

う が さき 貝 塚
宇 賀 崎

目 次

I. 調査に至る経過.....	57
II. 遺跡の位置と環境.....	58
III. 調査の方法と経過.....	60
IV. 調査の成果.....	63
A. 貝層および遺物包含層とその出土遺物.....	63
1. 堆積層の状況.....	63
2. 出土遺物.....	67
(1) 土製品.....	67
(2) 石製品.....	106
(3) 骨角貝製品.....	118
(4) 自然遺物.....	121
B. 発見された遺構とその出土遺物.....	135
1. 竪穴住居跡.....	135
2. 土壇墓.....	137
3. 埋葬犬を伴う土壇.....	138
V. 考 察.....	140
VI. まとめ.....	148
付 宇賀崎貝塚出土の人骨および犬骨について.....	167

I. 調査に至る経過

宇賀崎貝塚は宮城県名取市愛島笠島南東宮下に所在する貝塚で、古く明治末期に坪井正五郎氏によって貝塚周辺を指す通称から「釜の元貝塚」の名称で紹介され（坪井：1908）、大正・昭和初期の「日本先史時代人民遺物発見・遺跡地名表Ⅳ・Ⅴ」（東京帝国大学人類学教室：1917・1928）にも同名で記載されている。貝塚東端の小字名である「宇賀崎」を用いた「宇賀崎貝塚」の名称が現われるのは戦後で、昭和27年加藤孝氏は阿武隈川河岸段丘貝塚のひとつとして宇賀崎貝塚の名前をあげ、縄文時代早期槻木2式、前期室浜式併行の遺物を出土する鹹水産蛤貝塚であると紹介している（加藤：1952）^{註1}。さらに、昭和31年には「宇ヶ崎貝塚」として早期槻木Ⅱ式が鹹水産大型蛤貝層から出土すると述べている（加藤：1956）。また、「宮城県史Ⅰ」（伊東：1957）では「宇賀崎貝塚」として素山上層（素山2）式一槻木上層（槻木2）式を出土する遺跡として記載されている。昭和34年の「日本貝塚地名表」（酒詰：1959）では地点不詳としながらも「釜の元貝塚」の名が純鹹の貝塚として記載されている。

このように宇賀崎貝塚は名取市内には数少ない貝塚の一つとして古くからその存在を知られていた貝塚である。

昭和46年この宇賀崎貝塚の一部に含まれていると考えられる名取市愛島笠島字南東宮下3番地の所有者より同地番地での宅地造成による現状変更の申請が提出された。このため宮城県教育委員会は名取市教育委員会および地権者とその取り扱いについて協議を重ねたが、最終的には宅地造成に先だって事前調査を実施し、記録保存を図ることとなり、昭和47年3月から宮城県教育委員会と名取市教育委員会が主体となって緊急発掘調査を実施することとしたのである。

調査の要項は下記の通りである。

調 査 要 項

1. 遺 跡 名 宇賀崎貝塚（宮城県遺跡地名表登載番号 12009）
2. 遺 跡 所 在 地 名取市愛島笠島字南東宮下3番地
3. 調 査 主 体 者 宮城県教育委員会・名取市教育委員会
4. 調 査 担 当 者 宮城県教育庁文化財保護室
5. 遺 跡 略 号 US
6. 調 査 員 白鳥良一・三浦圭介
7. 調 査 期 間 昭和47年3月1日～5月5日
8. 調査対象面積 900m²

II. 遺跡の位置と環境 (第1図および「金剛寺貝塚」第1図：4ページ参照)

名取市西部には奥羽山脈から派生する標高200mほどの高館丘陵が東に向かって延びている。この高館丘陵は東に延びるにしたがって次第に低平になり、その東端は名取市の北部を流れる名取川や南の阿武隈川によって形成された沖積低地(名取平野→仙台平野)と接している。高館丘陵の縁辺にはさらに東に突出する小丘陵群が櫛歯状に分岐している。名取市中央部には特に東に張り出している標高10～50mの小丘陵が発達しており、北から箕輪丘陵、野田山丘陵、愛島丘陵(賽ノ窪丘陵)などの名称で呼ばれている。

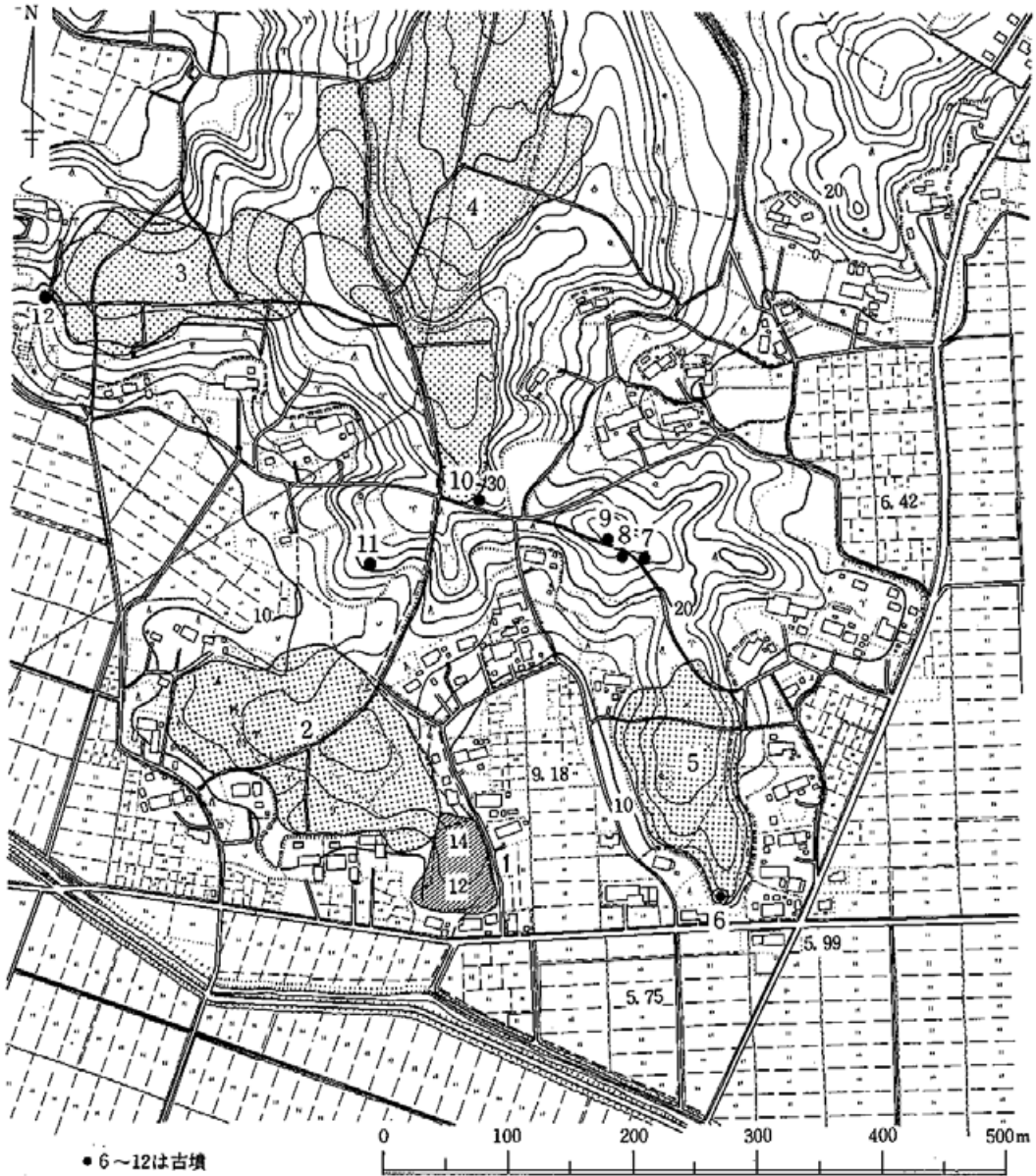
宇賀崎貝塚はこれらの小丘陵のなかで最も大きい愛島丘陵の南縁、ほぼ中央から南に突出する小舌状丘陵の南端部に立地している。この小舌状丘陵の標高は約13mで、南斜面と東斜面の2ヶ所に貝層が認められる。貝層付近の標高は12.5～7.5mである。現在、遺跡周辺の丘陵上や斜面は畑地に、丘陵と沖積低地の接点は住宅地に、沖積低地は水田に利用されている。水田面の標高は約6mで、この水田下にはスクモと呼ばれる泥炭層が約3mの厚さで堆積しており、さらにその下は海成の粗砂層が厚く堆積している(安田：1978)。

本貝塚周辺には愛島、野田山、箕輪などの丘陵上を中心に、旧石器時代から中世まで数多くの遺跡が分布している。特に縄文時代の遺跡や貝塚としては、本貝塚の東方1.3kmの愛島丘陵の南縁に大木戸(小豆島)貝塚(早～前期)が、南西2.5kmの高館丘陵東縁には柚ノ木(山畑南)貝塚(中・後期)が、北方2kmの野田山丘陵東端には野田山貝塚(湮滅)が、同じく北方約3kmの箕輪丘陵東縁には、昭和41年に調査され前期初頭大木1・2a式期の住居跡59軒と包含層・貝層などが確認された今熊野遺跡や金剛寺貝塚(後期)などが立地している^{註2}(宮城県教育委員会：1973)。

また、南西7kmには柴田町上川名貝塚(早・前期)が位置している。この上川名貝塚が立地する柴田町槻木盆地の周縁には上川名貝塚をはじめとして金谷貝塚(早～中期)、中居貝塚(前～中期)、深町貝塚(前～中期)、館前貝塚(前期)、松崎(槻木)貝塚(早期)などが点在しており、角田市の阿武隈川下流域に点在する土浮貝塚(前期)、館貝塚(前期)、平口貝塚(早期)、花島貝塚(早期)と共に阿武隈川下流域貝塚群と呼称されている(加藤：1952・1956)。

阿武隈川下流域貝塚群は古く昭和初期に山内清男氏によって発掘調査され、早期末の槻木下層(I)式、上層(II)式の標式遺跡とされた松崎(槻木)貝塚(山内：1929・30、伊東：1940)や前期初頭の上川名上層(II)式の標式遺跡である上川名貝塚(加藤：1951)など、主として縄文時代早期末から前期初頭にかけて形成された貝塚によって構成されている。

この貝塚群は宮城県内では、松島湾岸貝塚群や古石巻湾岸貝塚群と共に貝塚の形成される時期の古い貝塚群であるが、特に阿武隈川下流域貝塚群は時期的なまとまりをもっている。また貝層が重複する貝塚では下部に鹹水産貝種による貝層を、上部にヤマトシジミを中心とする貝



第1図 周辺の遺跡と地形

- | | |
|--------------|----------------|
| 1. 宇賀崎貝塚 | 縄文・弥生・古墳・奈良・平安 |
| 2. 宮下遺跡 | 縄文・弥生・古墳・奈良・平安 |
| 3. 北東宮下遺跡 | 縄文・奈良・平安 |
| 4. 五郎市遺跡 | 縄文・奈良・平安 |
| 5. 松崎遺跡 | 縄文・弥生・古墳・奈良・平安 |
| 6. 宇賀崎1号墳 | |
| 7~11. 宇賀崎古墳群 | |
| 12. 北東宮下古墳 | |

層をもつものが多いのもこの貝塚群の特徴のひとつである。宇賀崎貝塚は大木戸貝塚・柚ノ木貝塚と共にこの阿武隈川下流域貝塚群の北端に位置付けられる貝塚である。

さらに、宇賀崎貝塚は昭和49年に調査され弥生時代の遺物や古墳時代前・中期の住居跡24軒が検出された宮下遺跡（名取市教育委員会：1975）に同一丘陵上で隣接し、宮下遺跡の北には奈良・平安時代の五郎市遺跡が接している。東向いの丘陵上には6基の方・円墳からなる宇賀崎古墳群や古墳時代中期から奈良・平安時代の松崎遺跡が立地しており、縄文時代以降にも宇賀崎貝塚周辺が生活の場となったことが知られる。

註1. 加藤孝氏は「阿武隈・北上両河岸段丘、並に松島湾岸諸島における貝塚の分布とその編年」（1952年）で、「釜の元貝塚は宇賀崎貝塚に当該するかも知れない」としている。

註2. 今熊野遺跡の貝層は、調査時点においては確認されておらず、その後昭和48年、宮城県農業総合開発センター建設事業に伴う幹線道路工事の際、新たに発見されたものである。

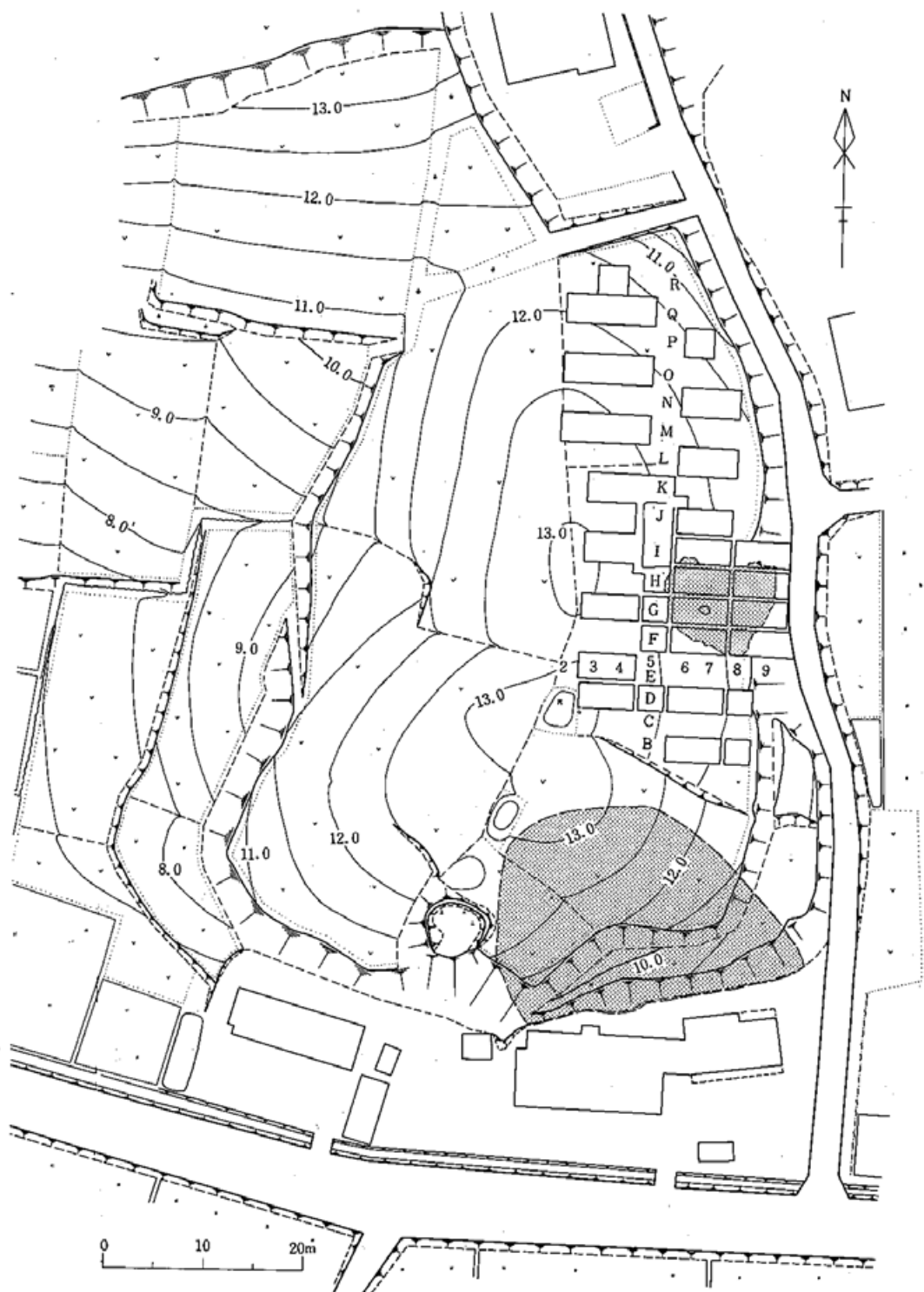
Ⅲ. 調査の方法と経過（第2図）

今回の調査は、名取市愛島笠島字南東宮下3番地の宅地造成予定地内に宇賀崎貝塚の一部が含まれると考えられたので、事前に発掘調査を行ない、当該部分の記録保存をはかる目的で実施された。

宅地造成が予定された部分は、南北に延びる丘陵の丘陵平坦部分から南斜面にかけてでありその範囲は約900㎡である。従来、この部分には貝層の存在は確認されていなかったが、遺物の散布状況などから集落の存在が予想されたため、造成予定地全域を対象として昭和47年3月1日から発掘調査を実施した。また、発掘調査に先きだち、遺跡周辺の現況を平板測量によって1/200の地形図に作製した。

すでに述べたように調査対象部分は丘陵平坦部分から東斜面にかけてであり、調査区の設定は、この東斜面に沿うように東西軸を定め、次いでそれに直交する南北軸を設定した。これらの軸線を基準に調査対象部分全域に3m四方のグリッドを設定し、グリッドには東西にアラビア数字、南北にアルファベットで表わすグリッド名を付した（第2図）。

調査は2グリッドを単位とする3×6mの東西に長いトレンチを3mおきに配列して進めた。その結果、調査区西半の丘陵平坦部では、耕作等による削平が著しく、遺構、遺物は検出されなかった。しかし、調査区南東部分の東斜面、G-7区を中心とするF~I-5~9区では保存の良好な貝層が約80㎡にわたって発見された。また、この貝層に接するH、I、J-5、6区からは竪穴住居跡が1軒検出された。このため、これらの遺構部分では隣接するグリッドを調査し、遺構周辺の全域に調査を実施することとした。



第2図 グリッド配図

貝層部分は、F・G区、G・H区、H・I区の境に幅40～50cmの東西ベルトを5・6区、7・8区の境に同じく南北ベルトを残し、各層の堆積状況を観察しながら調査を進めた。

貝層は、G-6、7区の最も厚い部分では約120cm堆積しており、基本的にはヤマトシジミを主構成貝とする上部貝層と、ハマグリ、アサリなどの鹹水産貝種によって構成される下部貝層に大きく分層できることが知られ、上・下貝層とも、さらに細分できることが判明した。これらの各層からは土器を始めとして各種の人工遺物や自然遺物などが出土した。また、G-7区のヤマトシジミ貝層上部からは埋葬犬がほぼ完全な形で一体分検出された。

各遺構、貝層の精査の進行した4月下旬には、平面図、断面図の作成や、写真撮影などの記録化を行ない、精査のほぼ終了した4月27日には現地説明会を実施し、調査の成果を一般に公開した。

現地説明会終了後、断面観察用に残した畔を調査した。この際ブロックサンプリング資料を層ごとに各所で採集した。こうして調査のすべてが終了したのは5月5日である。最終的な発掘面積は約500㎡である。

なお、調査期間中には東北大学歯学部助教授葉山杉夫氏に埋葬犬骨について、東北大学理学部安田喜憲氏に花粉分析、および、年代測定資料採集について現地指導を受けた。また、調査に当たっては、地主郷内進氏や、太田一郎氏をはじめとする地元各位に多大の御協力をいただいた。

IV. 調査の成果

今回の調査によって竪穴住居跡1軒、土壙墓1基、埋葬犬を伴う土壙1基、および、縄文早期から前期にかけての貝層、遺物包含層などが検出された。これらの遺構や貝層、遺物包含層からは縄文土器を始めとする多くの土製品、各種の石器、骨角器、貝製品などの人工遺物と共に、貝類・獣類・魚類・両生類などの動物遺存体や人骨などが出土しており、その数量は平箱で50箱ほどある。この章では最初に最も遺物の出土量が多い貝層・包含層などの堆積層について記述し、次いで遺構について調査の成果を述べる。

A. 貝層および遺物包含層

1. 堆積層の状況（第3図）

G-7区を中心としてF~I-5~9区に分布範囲をもつ貝層とその上面に堆積し、ほぼ同様の分布を示す包含層は基盤が東方向に約10~20°、北方向に約25°傾斜しているため、基本的にはそれに沿って南西→北東方向に傾斜して堆積している。その厚さはH-8区北壁付近で最も厚く、約3mある。

貝層はG-6・7区に最も厚く堆積しており、層の堆積状態・保存も良好であった。ここではこのG-6~9区北壁の断面図や、F-6~9区北壁、H-6~9区北壁の断面図を示し、層の堆積状態やその分布などについて述べる。土色や土性については第3図に一覧表を付した。

堆積層は基本的には次の12層に大別される。遺物の出土層位もこの大別にしたがって表記してある。第1層~第5層は土層である。

第1層—薄茶褐色土層 表土の耕作土である。

第2層—黄褐色土層 粘性を持たない層でH-7・8区に部分的に分布する。

第3層—黄褐色土層 第2層よりやや明るい層でH・I-7~9区とG-8区の一部に分布する。あまり厚さをもたない層である。

第4層—茶褐色土層 F・G-6区を除く調査区全体に分布し、北東方向にいくにしたがって厚さを増し、最も厚く堆積するH-7・8区では約130cmの層厚を測る。土色・土性の違いにより4a~4e層に細分されるが遺物の出土は少ない。

第5層—黒色土層 強く黒味を帯びた層で粘性をもつ。F-6~8区・G-6区には分布しないが、他では第6層上面に10~50cmの厚さで堆積する。土色・土性によって5a・5b層に2分される。遺物の出土は比較的多い。

第6層—ヤマトシジミを主構成貝とする貝層である。F~H-6~8ないし9区、一部はI区まで広範に分布するが、G・H-6・7区に分布の中心をもち、最も厚いG-7区北壁ぎわ

での層厚は約60cmある。遺物の出土は比較的少ない。6層は貝の比率などから第6 a～6 c層に大別される。

第6 a層—泥土貝層 黒褐色土が混じる。やや小型のヤマトシジミが大多数で、風化したものも多い。ハマグリ・アサリなどの鹹水産貝種やヌカガイなど淡水産貝種もわずかに含まれている。G・H-6～9区に分布しており、最も厚い部分で約30cmある。G-7区では黒色土の間層により、さらに2分されている。

第6 b層—純貝層 わずかに黄褐色土や黒褐色土を混じる。ヤマトシジミは6 a層より大型で風化していない。ハマグリ・アサリなどの鹹水産貝種が少量含まれ、他にヌカガイ・オオタニシもわずかに見られる。F・G-6～8区、H-6～9区と広く分布するが、G・H 7・8区で厚く堆積しており、約40cmの層厚がある。

第6 c層—純貝層 第6 b層とほぼ同様の貝層であるがより混入土が少ない。G・H-6・7区に部分的に分布するが、最も厚い部分で40cmの層厚がある。

第7層—泥土貝層 10～20cmの暗褐色土を含むヤマトシジミの破碎貝層で、わずかに鹹水産貝種を含む。G-6・7区からH-6～9区にかけて分布している。遺物の出土量は多い。破碎貝の混入率によって7 a・7 b層に2分される。

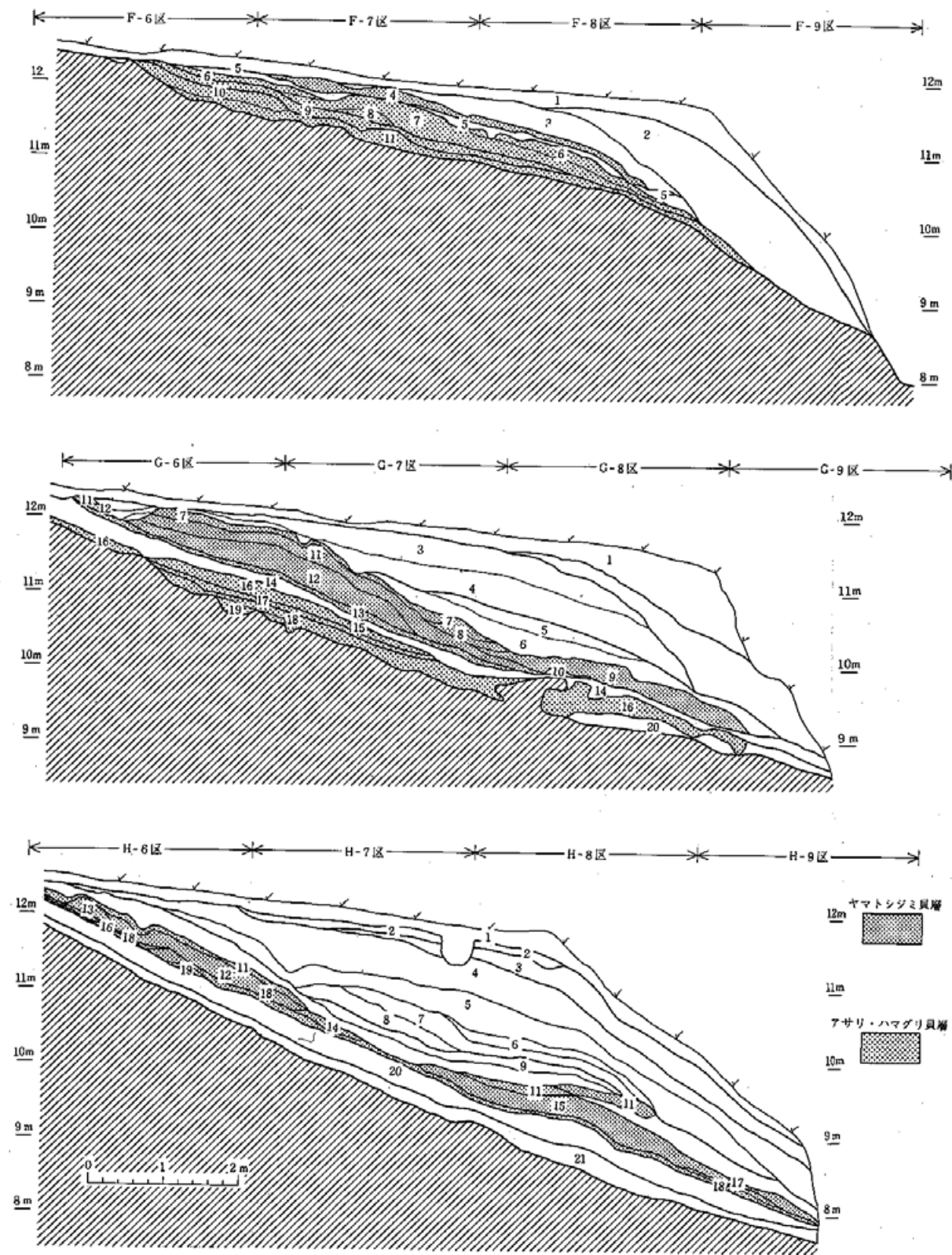
第8層—混貝土層 風化したヤマトシジミとハマグリを少量含む暗褐色土層で、F・G-6～8区に分布するが、G-6区で最も多く30cmの厚さがある。この層も遺物の出土は多い。

第9層—純貝層 ハマグリ・アサリを主構成員とする純貝層で、キサゴが比較的多く、他にオオノガイ・サルボウ・ハイガイやレイシガイ・イボニシ・マガキなども少量ではあるが含まれている。10～40cmの層厚をもち、F・G-6～8区に分布しており、H区にも一部はのびている。分布の中心と思われるF区では、保存の良い貝による純貝層であるが、G・H区では風化した貝が多く含まれるようになり、土の混入率も多くなる。遺物の出土は多い。

第10層—混貝土層 黒褐色土に風化したハマグリ・アサリなどを含む層である。キサゴ・サルボウ・ハイガイなども少量含まれる。F・G-6～8区に分布する薄い層であるが、遺物の出土量は多い。

第11層—混貝土層 地山直上の層で風化したハマグリ・アサリ・サルボウ・ハイガイなどを含む層である。F・G-6～8区にだけ分布する。遺物の出土は少ない。

第12層—黒褐色土層 地山直上の層でH・I-6～9区に分布し、一部、G区にも見られる。遺物はあまり含まれていない。



第3図 貝層・遺物包含層断面図

F

基本層位	層番号	層位	土色	その他
第1層	1	土層	薄茶褐色	表土
第4b層	2	土層	黄褐色	粘性あり
第4c層	3	土層	黒褐色	粘性・しまりあり
第6b層	4	純貝層	黒褐色	ヤマトシジミ主体
第8層	5	混貝土層	暗褐色	風化したヤマトシジミ・ハマグリ少量
	6	純貝層	暗茶褐色	ハマグリ・アサリ主体
第9層	7	純褐色	茶褐色	ハマグリ・アサリ主体
	8	混土貝層	黒褐色	ハマグリ主体
第10層	9	混貝土層	黒褐色	ハマグリ・アサリ主体
	10	純貝層	茶褐色	ハマグリ主体
第11層	11	混貝土層	茶褐色	風化したハマグリ・砂質土層

G

基本層位	層番号	層位	土色	その他
第1層	1	土層	薄茶褐色	表土
第3層	2	土層	黄褐色	砂質
第4b層	3	土層	茶褐色	粘性・しまりあり
第4c層	4	土層	黒褐色	しまりあり・混土少量混
第5a層	5	土層	黒色	
第5b層	6	土層	褐色	焼土・地山粒混
	7	混土貝層	黒褐色	ヤマトシジミ主体
	8	混貝土層	黒色	ヤマトシジミ混入
	9	混土貝層	黒褐色	ヤマトシジミ主体
第6b層	10	土層	黄褐色	地山ブロック
	11	純貝層	黄褐色・黒褐色	ヤマトシジミ主体
第6c層	12	純貝層	黄褐色・黒褐色	ヤマトシジミ主体 6b層に比して混入少ない
第7a層	13	混土貝層	暗褐色	ヤマトシジミの破砕貝
第8層	14	混貝土層	暗褐色	風化したヤマトシジミ・ハマグリ少量
	15	焼土層	赤褐色	焼土ブロック
第9層	16	純貝層	黒褐色	ハマグリ・アサリ主体
第10層	17	混貝土層	黒褐色	ハマグリ・アサリ主体(風化)
第11層	18	混貝土層	暗褐色	ハマグリ・アサリ主体(風化)
	19	混貝土層	暗褐色	18に比して貝混多い
	20	土層	暗褐色	貝混少量

H

基本層位	層番号	層相	土色	その他
第1層	1	土層	薄茶褐色	表土
第2層	2	土層	黄褐色	粘性なし
第3層	3	土層	黄褐色	砂質
第4a層	4	土層	薄茶褐色	粘性あり
第4b層	5	土層	茶褐色	粘性・しまりあり
第4c層	6	土層	黒褐色	しまりあり
第4d層	7	土層	茶褐色	しまりあり・混少量混入
第4e層	8	土層	黒褐色	粘性あり
第5a層	9	土層	黒色	
第5b層	10	土層	褐色	焼土・地山粒混入
第6a層	11	混土貝層	黒褐色	アサリ主体・再堆積砂分あり
第6b層	12	純貝層	黄褐色・黒褐色	ヤマトシジミ主体
	13	純貝層	黄褐色・黒褐色	ヤマトシジミ主体 12に比して若干明るい
	14	純貝層	黄褐色・黒褐色	ヤマトシジミ主体
第7層	15	混土貝層	暗褐色	ヤマトシジミの破砕貝
	16	混土貝層	暗褐色	ヤマトシジミの破砕貝
	17	土層	黒色	破砕されたヤマトシジミ少量混入
	18	混土貝層	暗褐色	ヤマトシジミの破砕貝
	19	混土貝層	暗褐色	ヤマトシジミの破砕貝
第12層	20	土層	黒褐色土層	
	21	土層	黒褐色土層	

2. 出土遺物

(1) 土製品

a. 縄文土器 (第4～25図・第14表)

縄文土器は最も出土量が多い。しかし、完形土器はなく、接合資料も少ない。このため多くの破片のなかから口縁部と底部資料、および、特徴的な文様をもつ胴部資料について、以下のような観察と分類を行なった。

口縁部および胴部資料

口縁部および胴部資料については1. 胎土、2. 成形、3. 調整、4. 器形、5. 文様などについて観察を行なった。この結果、宇賀崎貝塚出土土器はA—縄文時代早期後半の土器群、B—縄文時代前期初頭の土器群、C—縄文時代前期中葉の土器群の3群に大別されることが知られた。しかし、大別された各群の観察項目に示した各要素は多様であり、各群を網羅する有効な分類基準を抽出することはできなかった。このためA～Cの各群ごとに、器形や文様などの特徴によって各群土器を類別し、図示資料についての説明を加える。

A群土器 (第4～6図、1～49)

縄文時代早期後半の土器群である。胎土に繊維を含み、器壁内外面にアカガイあるいはサルボウ等の貝殻による腹縁刺突文や条痕文が施文されるもので、施文技法や施文部位などの違いによってI～III類に類別される。

A I類 (第4図、1～3)

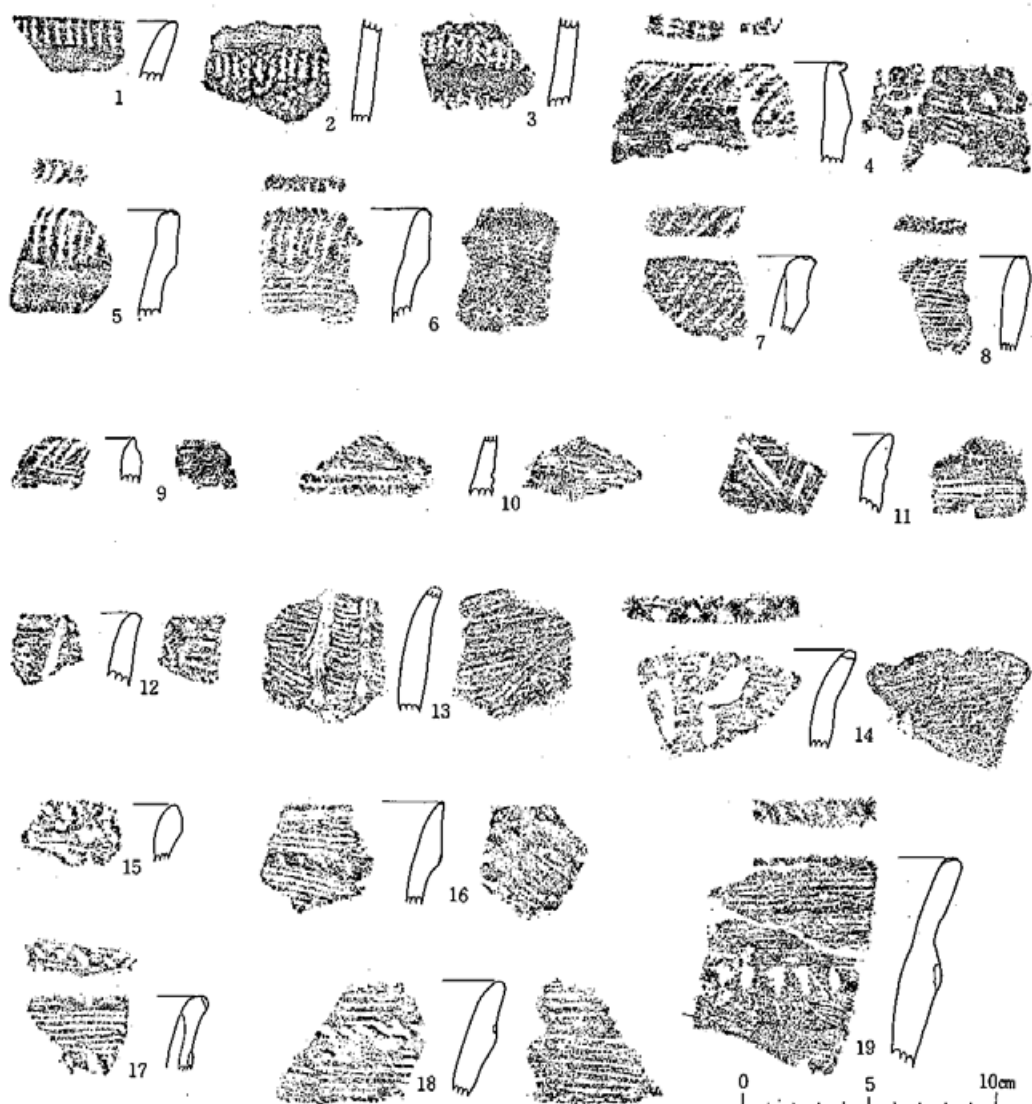
アカガイあるいはサルボウ等の貝殻腹縁刺突による刺突文帯をもち、貝殻条痕文は施されないものである。1が平縁の口縁部破片、2・3が胴部破片で同一個体のものである。口縁に対して縦位の短い貝殻腹縁刺突文を横方向に連続刺突して、刺突文帯を形成している。刺突文帯は無文部に一定の間隔で数列施されており、刺突文帯と無文帯とが交互にみられる。胎土への繊維の混入量は少ない。

A II類 (第4～6図、4～35)

器壁の内・外両面に貝殻条痕文が施される。いわゆる条痕文土器である。条痕文以外の施文の有無によって次のa～eに分かれる。

a (4～10) 口縁部外面に貝殻腹縁刺突文が施されるものである。4～8は口縁下部が肥厚し、稜帯となるもので、口縁上端からこの稜にかけての口縁上部に斜位あるいは縦位に刺突された一列の刺突文帯をもつ。また、口唇部にも刺突文が施される。7では刺突文帯は2列まで認められる。8の刺突文は押引文状となっている。10には2条の横走する貝殻腹縁刺突文が施されている。

b (11～15) 口縁部外面に貝殻条痕文以外の文様をもつもので、沈線文 (11～14)、刺突文



第4図 縄文土器(1)

No.	地区層位	部位	機能	口唇部	外面	内面	その他	分類
1	H-9 12層	口縁部	含む		貝殻線刻突文帯・ミガキ			A I
2	H-9 1層	胴部	*		*	ミガキ	*	
3	H-9 12層	*	*		*	*	*	
4	C-6-7 11層	口縁部	*	貝殻線刻突文	*	(斜位)	条痕文	A II a
5	H-7 10層	*	*	*	*	不明	*	
6	G-6-7 11層	*	*	*	*	条痕文	条痕文	*
7	G-6-7 9層	*	*	*(斜位)	*	(2列)	不明	*
8	H-8-9 10層	*	*	*(斜位)	*	(押引状) 条痕文	*	*
9	H-7 9層	*	*	*	*	条痕	*	*
10	G-6-7 11層	*	*	*	横位貝殻線刻突文(2列)・条痕文	条痕文	*	*
11	H-8 12層	*	*	*	沈線文(斜位)・条痕文	*	*	A II b
12	H-8 12層	*	*	*	*	不明	*	*
13	C-6-7 11層	*	*	*	沈線文(縦位)・条痕文	条痕文	*	*
14	H-8-9 6層	*	*	刺突文	*	*	縦線束	*
15	H-8-9 12層	*	*	*	刺突文・条痕文	*	*	*
16	F-6-7 9層	*	*	刻目	条痕文・陰帯・刻目	*	*	A II c
17	H-7 10層	*	*	*(斜位)	*	*	不明	*
18	F-6-7 9層	*	*	*	*(斜位)	*	*	*
19	H-7 9層	*	*	刺突文	*	刺突文	*	*

(15) などが施文されている。沈線文には「ハ」の字形に斜行する沈線文(11・12)と、2本の沈線を縦位に垂下させる沈線文(13・14)とがある。14の沈線文は繊維束によるものと思われ、口唇部には上方からの刺突が施されている。15は口縁部外面に不規則な刺突が施されている。

c (16~24) 口縁下部もしくは胴部上端が肥厚して隆帯上となり、この部分に刺突や刻目などが施されるものである。16~18は口縁下部が、19は胴部上端が肥厚するもので、20~24は隆帯部分の破片である。隆帯への施文は16~18が斜位の、19・23が縦位の刻目。20~22・24が刺突である。16・17・19は口唇部にも斜位の刻目が施されている。施文具は16~19がヘラ状工具20・21が貝殻腹縁、22が竹管、23・24が繊維束である。20の隆帯上には刺突とともに、指頭状(貝殻の殻頂?)の圧痕がみられ、24の刺突は隆帯上と隆帯上側面とに施されている。

d (25~29) 口唇部に刺突や刻目が施されるものである。25・28は口縁端が尖がるもので29は口縁下部が肥厚している。25は口唇部から口縁内面にかけて貝殻腹縁による組立の刺突が施されている。26~29にはヘラ状工具による斜位の刻目が施されている。

e (30~35) 内・外面に条痕文だけが施されるもので、AⅡ類では最も量的に多い。口縁部は、外反するものが多く、口縁端が尖がるもの(30~33)と口縁端が丸くおさまるもの(34・35)とがある。条痕文は内・外面ともに口縁近くでは横位に、胴部では不定方向に施される場合が多い。

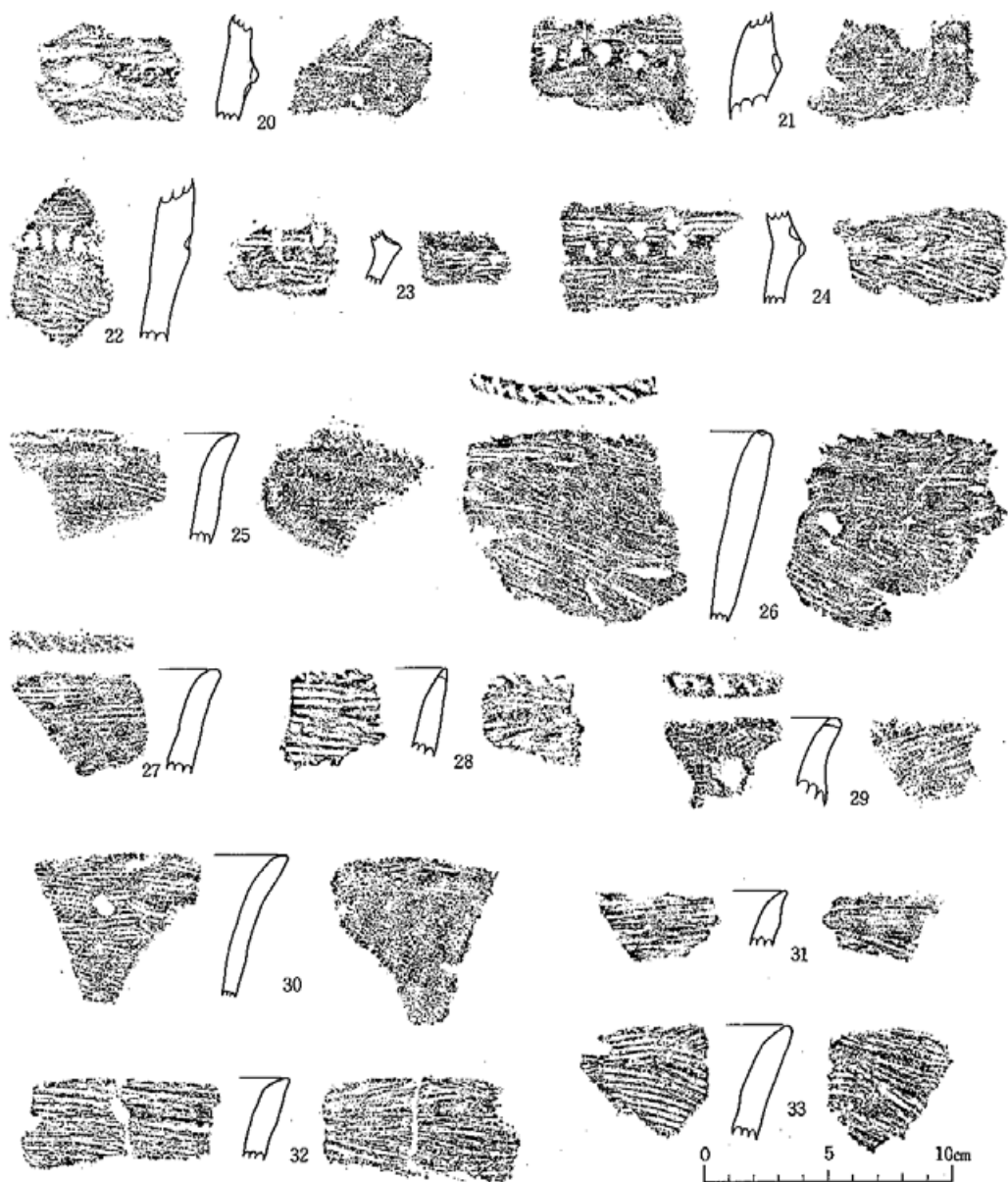
AⅢ類(第6図、36~49)

内・外面に条痕文が施されるが、条痕文の他にも縄文や擦糸文が施されるいわゆる縄文・条痕土器である。AⅡ類同様a~dに分かれる。

a (36・37) 口縁部外面に文様をもつものである。36・37ともに沈線文が施されている。36は内・外面に条痕文が、内面上端に縄文(LR)が施されるもので、口縁部外面には斜行する太い沈線によって「V」字状文が描かれている。37は外面には条痕文、内面には縄文(LR)が施され、口縁部外面には鋭い沈線によって菱形状文が描かれている。

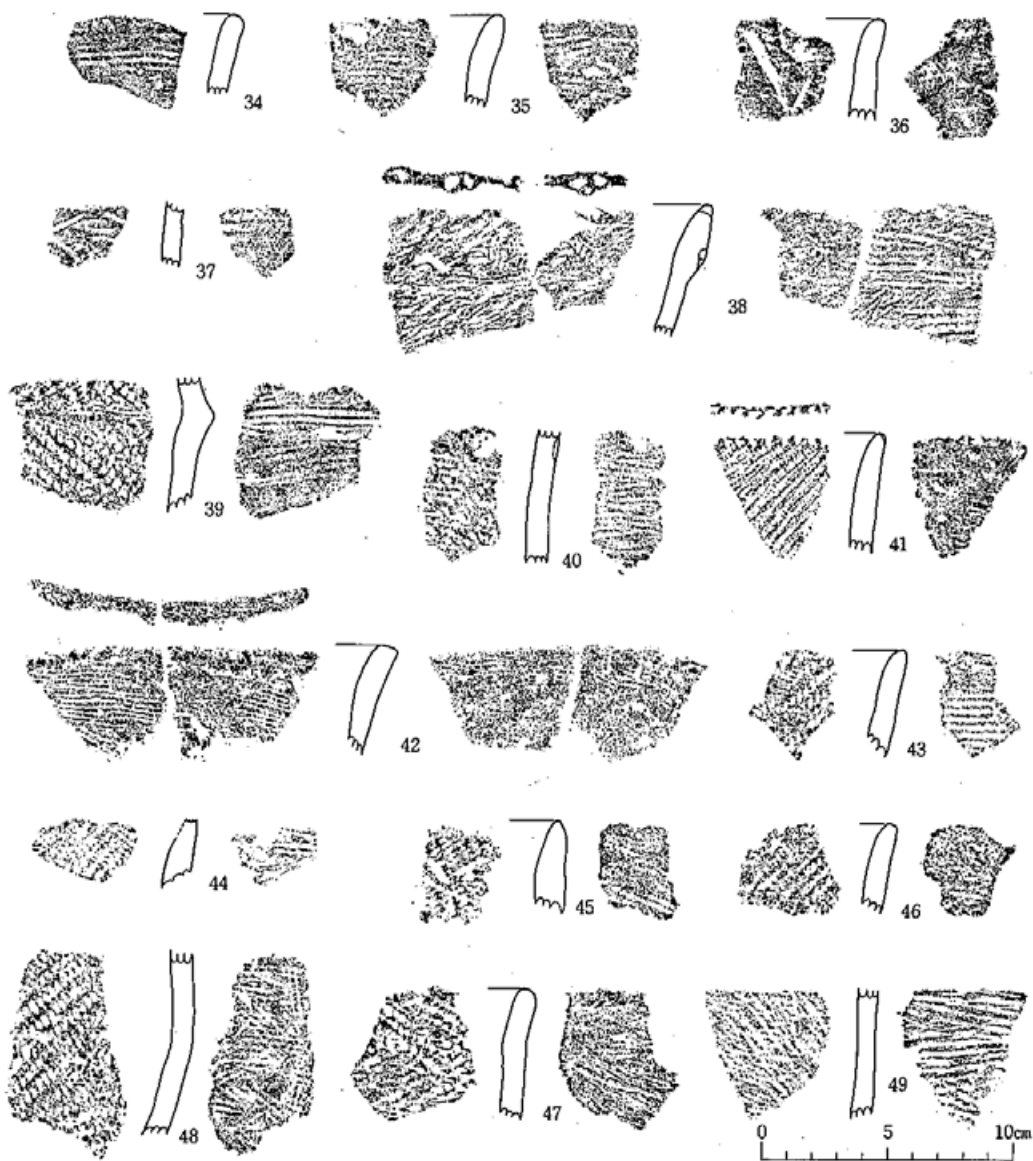
b (38~40) 口縁下部や胴部上端が肥厚して隆帯状になるものである。38は口唇部に斜位の、隆帯上に馬蹄形状の擦糸圧痕文(L)が施される。39は胴部上端が強く屈曲して隆帯状となるものである。40は胴部上端がわずかに肥厚するもので、隆帯上には指頭状の圧痕が施されている。38の外面には擦糸文(L)が、内面には条痕施文後、同じく擦糸文(L)が施されている。39・40は外面に縄文(LR)、内面に条痕の施文されるもので、39の縄文は屈曲部両側面にも及んでいる。40の縄文は条痕施文後に施されたものである。

c (41・42) 口唇部に刺突や地文が施されるものである。41は口唇部から口縁上端にかけて竹管刺突が、42は口唇部に擦糸文(r)が施されている。41の外面には縄文(LR)が、42



第5図 縄文土器(2)

No.	地区層位	部位	繊維	口唇部	外面	内面	その他	分類
20	G-6-7 10層	頸部	含む		桑痕文・隆脊 指頭状圧痕・貝殻腹縁刺突文	桑痕文		A II c
21	G-6-7 8層	*	*		* 貝殻腹縁刺突文	*		*
22	G-6-7 6層	*	*		* 竹筥刺突文	不明		*
23	H-8-9 12層	*	*		* 沈線文(縦位)	桑痕文	繊維束	*
24	H-8-9 11層	*	*		* 上側面に斜突	*		*
25	H-6 11層	口縁部	*	貝殻腹縁刺突文	*	*		A II d
26	G-6-7 10層	*	*	割目(斜位)	*	*		*
27	G-6-7 11層	*	*		*	不明		*
28	F-6-7 8層	*	*		*	桑痕文		*
29	F-8 9層	*	*		*	*		*
30	G-6-7 10層	*	*		*	*		A II e
31	F-6-7 19層	*	*		*	*		*
32	H-7 8層	*	*		*	*		*
33	H-8-9 11層	*	*		*	*		*



第6図 縄文土器(3)

No.	地区	層位	部位	繊維	口唇部	外面	内面	その他	分類
34	G-6-7	11層	口縁部	含む		条痕文	不明		A II a
35	H-8-9	10層	〃	〃		〃	条痕文		〃
36	H-8-9	10層	〃	〃		〃 沈線文(斜位)	条痕文・縄文(LR)		A III a
37	G-6-7	8層	〃	〃		〃 (菱形)	縄文(LR)	口縁端欠	〃
38	H-8	9層	〃	〃	燃糸圧痕文	燃糸(L) 隆帯・燃糸圧痕文(馬蹄形状)	条痕文・燃糸文(L)		A III b
39	G-6-7	8層	胴部	〃		縄文(RL) 隆帯・縄文(RL)	条痕文		〃
40	G-6-7	9層	〃	〃		条痕文・縄文(LR) 隆帯・指頭状圧痕文	〃		〃
41	H-7	10層	口縁部	〃	竹筥刺突文	縄文(LR)	〃		A III c
42	H-8	42層	〃	〃	燃糸文(r)	燃糸文(r)	条痕文・燃糸文(r)		〃
43	G-6	8層	〃	〃		縄文(LR)	条痕文		A III d
44	H-6-7	11層	〃	〃		〃 (LR)	〃		〃
45	G-6	8層	〃	〃		〃 (RL)	〃		〃
46	F-8	8層	〃	〃		〃 (LR)	〃		〃
47	G-7	8層	〃	〃		羽状縄文(RL×LR)	〃		〃
48	G-6	7層	胴部	〃		縄文(LR)	〃		〃
49	G-6-7	9層	〃	〃		燃糸文(L.θ)	〃		〃

の外面には捺糸文（r）が施文され、41・42の内面には条痕が施されている。42の捺糸文は外面だけでなく内面上部にも施文されている。

d（43～49） 外面に縄文や捺糸文などが、内面に条痕文が施されるもので、量的にはAⅡeに次いで多い。口縁部は直立気味のものと同外反するものがあり、後者が多く、口縁端は尖がるもの（43～45）と丸くおさまるもの（46・47）とがある。施文原体は43・44・46・48がLR、45がRL、46ではRLとLRの両者が使用されており、49は捺糸文（Lとℓ）が施文されている。

B群土器（第7～19図、50～209）

縄文時代前期初頭の土器群である。胎土に繊維を含み、内面にはミガキ、ナデ調整が施される。条痕文は認められず、わずかに擦痕の認められるものが少量ある。外面の施文文様の違いなどによって、Ⅰ～Ⅵ類に類別できるが、地文以外の文様をもつⅠ、Ⅵ類を除いては、すべて地文だけが施文されるものである。このためⅡ～Ⅴ類は刺突や刻目の有無や施文位置の違い、器形や地文の違いなどによって類別した。

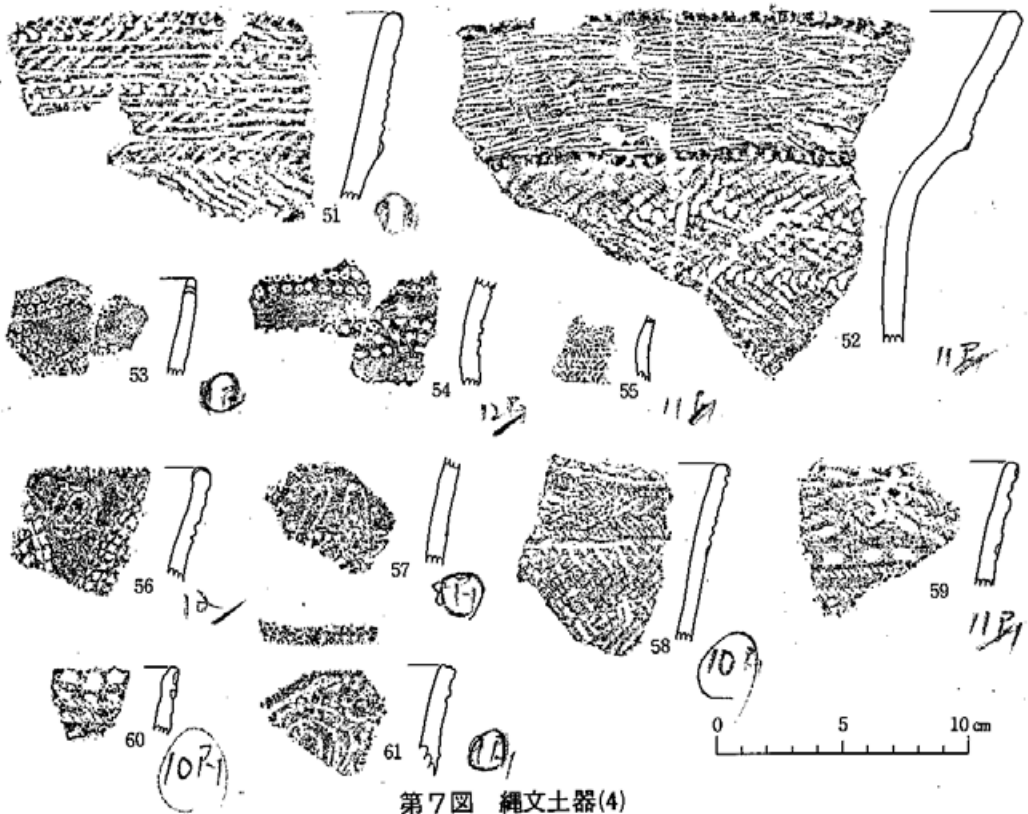
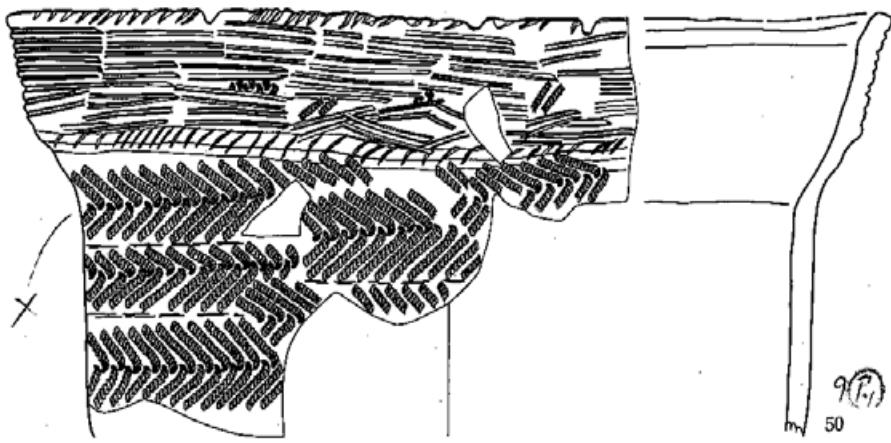
BⅠ類（第7・8図、50～65）

BⅠ類は地文以外の文様を主として口縁部にもつ土器である。文様には平行沈線文、竹管刺突文、捺糸圧痕文、連続刺突文などがあり、器形的には次のBⅡ類と共通するものが多い。施文具や文様構成の違いによりa～dに細分できる。

a（50～52） 平行沈線文が施されるもので、50と51は同一個体である。口縁下端が肥厚し、頸部が大きくくびれ、口頭部の境に段をもつ器形である。口縁部上端と隆帯化した口縁部下端に、50・51では斜位の刻目が、52では半載竹管の刺突が施されている。両者とも、口縁部に半載竹管による平行沈線文が施されるが、50・51では結束第1種（山内：1979）の羽状縄文（以下観察表ではRL×LRまたはLR×RLと表記する）施文後、比較的幅の広い施文具によって、平行沈線文が幾重にも横走して施されている。52は刺突文と同一の幅の狭い施文具で平行沈線文が菱形になるように施文されている。50～52ともに胴部には結束された羽状縄文が施文されている。

b（53～55） 竹管刺突文をもつものである。53は小波状を呈する口縁部破片で、口縁部上端に沿って、横走する3列の円形竹管刺突文帯によって菱形の文様帯が構成されている。54は胴部破片で、横位に連続刺突された3列の円形竹管文帯と無文帯が交互にみられる。55も胴部の小破片で、横位の平行沈線を数条単位で施文した後、沈線文上に半載竹管による爪形文が連続刺突されている。さらに多段の爪形文帯の間の無文帯にはコンパス文が横走している。

c（56～64） 捺糸圧痕文をもつものである。56・57は連続刺突文によって画された三角形の無文部に、1段の原体（L）を「の」の字、逆「U」字形に押圧したもので、56の口唇部に



第7図 縄文土器(4)

No.	地区層位	部位	繊維	口唇部	外	内	面	その他	分類
50	C-6-7 9層	口縁部~胴部	含む	刻目	口縁部・隆帯刻目 縄文(RL×LR)平行沈線文	胴部 羽状縄文(RL×LR)	ミガキ	同一個体	BI a
51	G-6-7 9層	*	*	*	*	*	*		*
52	G-6-7 11層	o	*	半截竹管刺突	口縁部・平行沈線文(菱形) 隆帯(半截竹管刺突)	胴部 羽状縄文(LR×RL)	*	*	*
53	H-7 9層	口縁部	*	小波状	円形竹管刺突文帯(菱形)	*	*	*	BI b
54	H-8 12層	頸部	*	*	*	(横位)・ミガキ	*	*	*
55	H-8-9 11層	胴部	*	*	平行沈線文・連続爪形文・コンパス文	*	*	*	*
56	H-8 12層	口縁部	*	懸糸圧痕文(θ)	連続刺突文・懸糸圧痕文(L)	*	*	*	BI c
57	G-6-7 8層	頸部	*	*	口縁部・横位刺突列点文 連続刺突文・懸糸圧痕文(L)	胴部 縄文(LR)	不明	*	*
58	G6~8 10層	口縁部	*	刺突文・大波状	横位連続刺突文・羽状縄文(RL・LR) 懸糸圧痕文(矢羽根状圧痕文)	*	ミガキ	横位・渦巻状	*
59	H-6-7 11層	*	*	*	横位連続刺突文・懸糸圧痕文(L)	*	*	*	*
60	H-7 10層	*	*	*	横位連続刺突文・懸糸圧痕文(L)	*	*	横位	*
61	H-8-9 9層	*	*	刺突文・大波状	懸糸圧痕文(L)	*	*	横位・渦巻状	*

も圧痕がみられる。57は1列の横位連続刺突によって胴部の地文（LR）と画されている。58～63は横位や渦巻状の撚糸圧痕文によって文様が描かれるもので、原体はすべて1段（L）である。58・61・63は大波状の口縁部破片で、58～60、62・63は口縁部上端に、61では口唇部上面に刺突や刻目が施される。58・59は2段の横走する撚糸圧痕文と1列の刺突列点文とによって口縁部文様帯と胴部が区画されている。58には矢羽根状沈線文が、59・60では刺突列点文が撚糸圧痕文間に施されている。胴部には58では条の短い単節斜行縄文RLとLRを交互に横位施文する羽状縄文（以下観察表ではRL・LRまたはLR・RLと表記する）。64は平縁で、口縁部下端に連続横位の指頭圧痕が施され複合口縁状となっている。口縁部上端には1条の横位撚糸圧痕文が施され、その下に3条の斜位の撚糸圧痕文と2列の刺突列点文によって山形文が描かれている。56～63に比して撚糸圧痕文の原体は太く、LとRの両者が押圧されている。

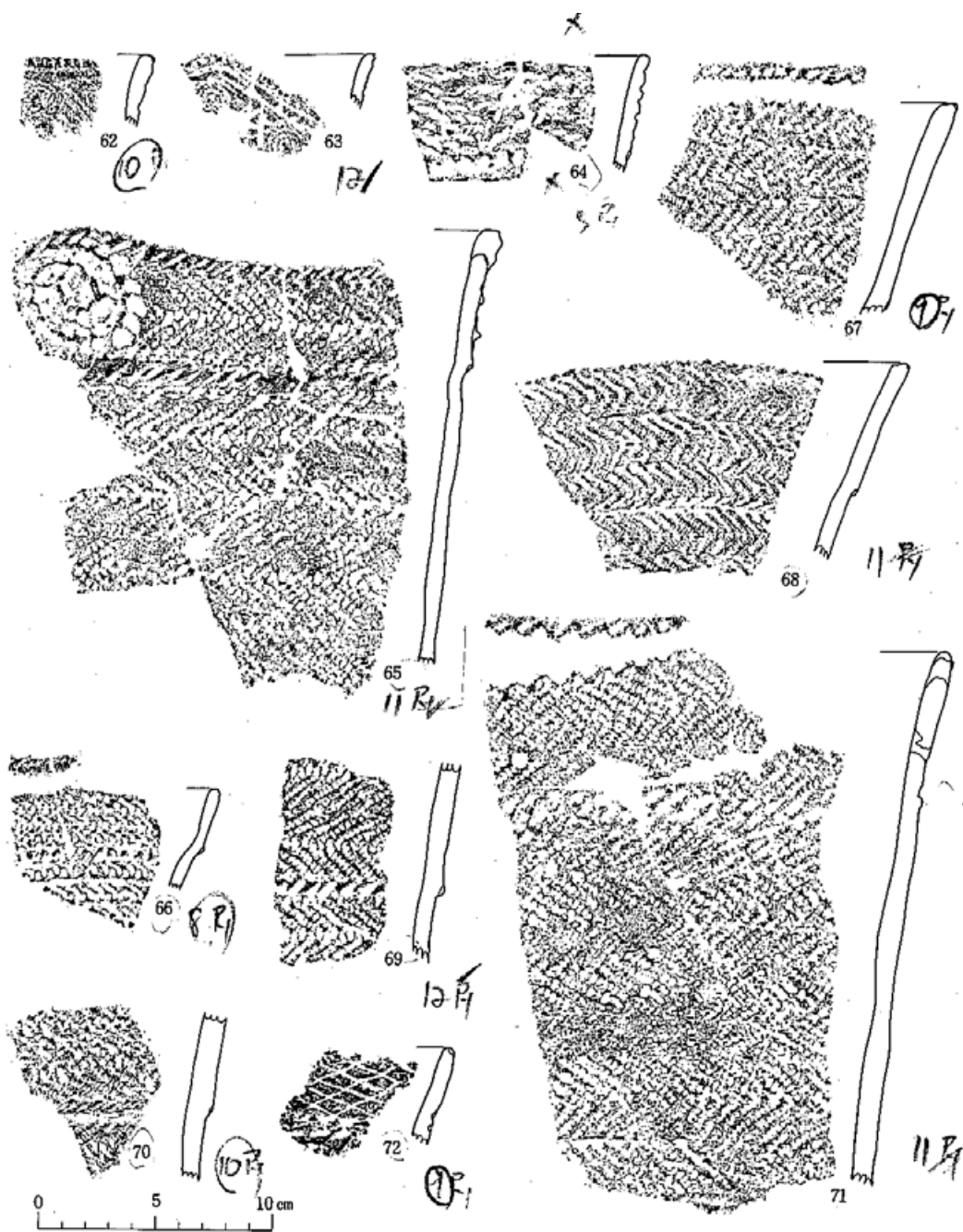
d (65) 波状口縁の波頂部に地文施文後、棒状工具の連続刺突文によって渦巻文が描かれるものである。口縁部下端に段をもつ器形で、この部分と口縁部上端に、斜位の刻目が施されている。地文は結束された羽状縄文である。

B II類（第8・9図、66～74）

口縁部と胴部の境が段や屈曲によって画され、この部分に刻目や刺突が施されるものである。口縁上端を欠く69・70以外は口縁部上端や口唇部にも刻目や刺突が施されている。口頸部の形態によってa・bに2分される。

a (66～70) 口縁部と胴部の境に段をもつものである。69・70は口縁部上端を欠いている。66は突起部を欠くが小突起を有するもので、口縁部下端の隆帯上に斜位の太い刻目が、口縁部上端と口唇部に爪形の刻目が施されている。67・68は平縁で口縁部上端と下端の段の部分に斜位の刻目が施されている。69・70は口縁部形態・口縁端部への施文の有無は不明であるが、口縁部下端の段の部分に斜位の刻目が施されている。地文は67・68が結束されない羽状縄文で、66・69・70は結束のある羽状縄文である。67の縄文の施文幅は0.8cmと短い。

b (71～74) 口縁部と胴部の境を横位連続刺突や屈曲によって画するものである。71・72・74は波状口縁で、73は平縁である。71は口縁部上端と口唇部上面にへら状工具を斜位に押圧して口縁端を小波状にしており、口縁部下端の刺突も左上と右下の2方向から加えられている。72は口縁部下端に2列の横位連続刺突文が、口唇部上面に棒状工具による刺突文が施されている。73は上方からの大ぶりの刺突が横位に連続して加えられ、口縁部と胴部とを区切っており、口唇部外面にも同様な刺突が施される。74は口縁部と胴部の境が屈曲する器形で、屈曲部にわずかな段が認められる。この段の部分と口縁部上端から口唇部上面にかけて斜位の刻目が施されている。地文は71・74が結束されない羽状縄文で、74の縄文の施文幅は1cm前後しかなく、非常に短いものである。73は結束された羽状縄文で、72は網目状撚糸文（rをL巻→次にR巻）



第8図 縄文土器(5)

No.	地区層位	部位	線維	口唇部	外 面	内 面	その他	分類
62	H-8-9 10層	口縁部	含む	刻目	撫承圧痕文(L)	ミガキ	横位・渦巻状	B I c
63	H-8-9 12層	〃	〃	刻目・大波状	〃	不明	〃	〃
64	F-7 5層	〃	〃	〃	(L・R) 指頭圧痕文・連続刺突文	ミガキ	〃・斜位	〃
65	G-6-7 11層	〃	〃	刻目(斜位)	羽状縄文(RL×LR) 連続刺突による渦巻文・屈曲部刻目	〃	小突起	B I d
66	F-8 8層	〃	〃	〃(爪形)	羽状縄文(RL×LR) 隆帯刻目	〃	〃	B I a
67	G-6-7 9層	〃	〃	〃(斜位)	(LR×RL) 屈曲部刻目(斜位)	〃	〃	〃
68	H-8-9 11層	〃	〃	〃	(RL・LR)	〃	〃	〃
69	H-6 12層	〃	〃	〃	(LR×RL)	〃	口縁端(欠)	〃
70	G-6-8 10層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
71	F-8 11層	口縁部-胴部	〃	刻目による小波状	(RL・LR) 屈曲部二方向からの横位連続刺突文	〃	波状口縁	B I b
72	G-6-7 9層	口縁部	〃	刺突文	網目状撫承文(n) 屈曲部・横位連続刺突(2列)	ナデ	〃	〃

である。

BⅢ類 (第9～12図、75～119)

口唇部や口縁部上端に刺突や圧痕、刻目などが施されているものである。小破片ではBⅡ類の口縁部も含まれると思われるが、大形の破片を見る限りは口縁部と胴部の境は明瞭でなく、また、この部分に刺突や刻目が施されるものはない。この類は刺突や圧痕の施文位置の違いによってa・bに2分できる。

a (75～96) 口唇部に刺突や圧痕、刻目が施されるもので、施文技法の違いによって2分される。

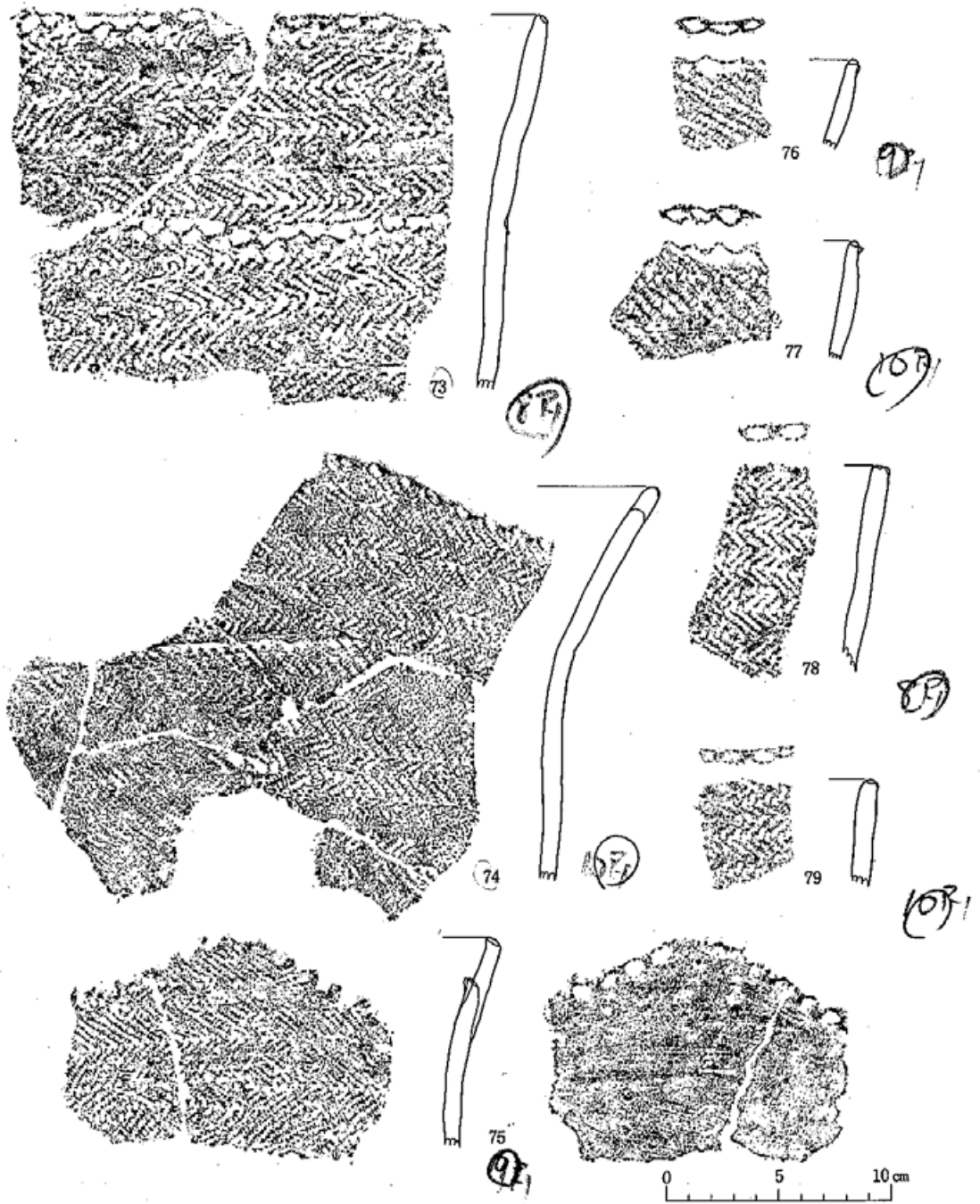
1. (75～85) 口唇部に大きい圧痕や深い刺突・刻目が施されることによって、口縁部上端が小波状を呈するものである。口縁部形態を大きく見ると75・84が波状口縁で、他は平縁である。75は口唇部の内面から、76～79は口唇部と口縁部上端外面の2方向から押圧が加えられるものである。口縁端での施文位置や技法をさらに細かに見ると、80～83は口唇部に、84・85は口縁部上端から口唇部にかけて、深い刺突や刻目が加えられるもので、80・81は地文施文原体を押圧している。地文は76が単節斜行縄文(RL)、77が結束された単節斜行縄文(RL×RL)で、75・78・79・84・85が結束された羽状縄文である。80～82が撚糸文(R)で、83は $R < \overset{LR}{e}$ である。

2. (86～96) 口唇部に刺突や圧痕・刻目が施されるが、1より施文が浅いため口縁部上端が小波状になることはない。すべて平縁のものである。86・87は口唇部に縄文原体(RL)が斜位に圧痕されている。88・89は縄文原体の末端が、90～92・94は棒状工具が、93は2本の平行施文具が、95は半載竹管が口唇部に縦位に刺突されているもので、96は口唇部に斜位の刻目を有している。86～88では縄文(RL)の条が縦走するように斜位回転されており、86・87は同一個体である。また、88は縄文施文後、原体によるものと思われるナデが、縦・斜方向に施されている。94～96にもRLの縄文が横位に回転施文されている。89・91～93は結束された羽状縄文が施される。93はLRの一方の条に側面ループが加えられている。90はRLの末端ループ文が重層して施されている。

b (97～119) 口縁部上端に刺突や刻目を有するものである。この類はさらに1～3に細分できる。

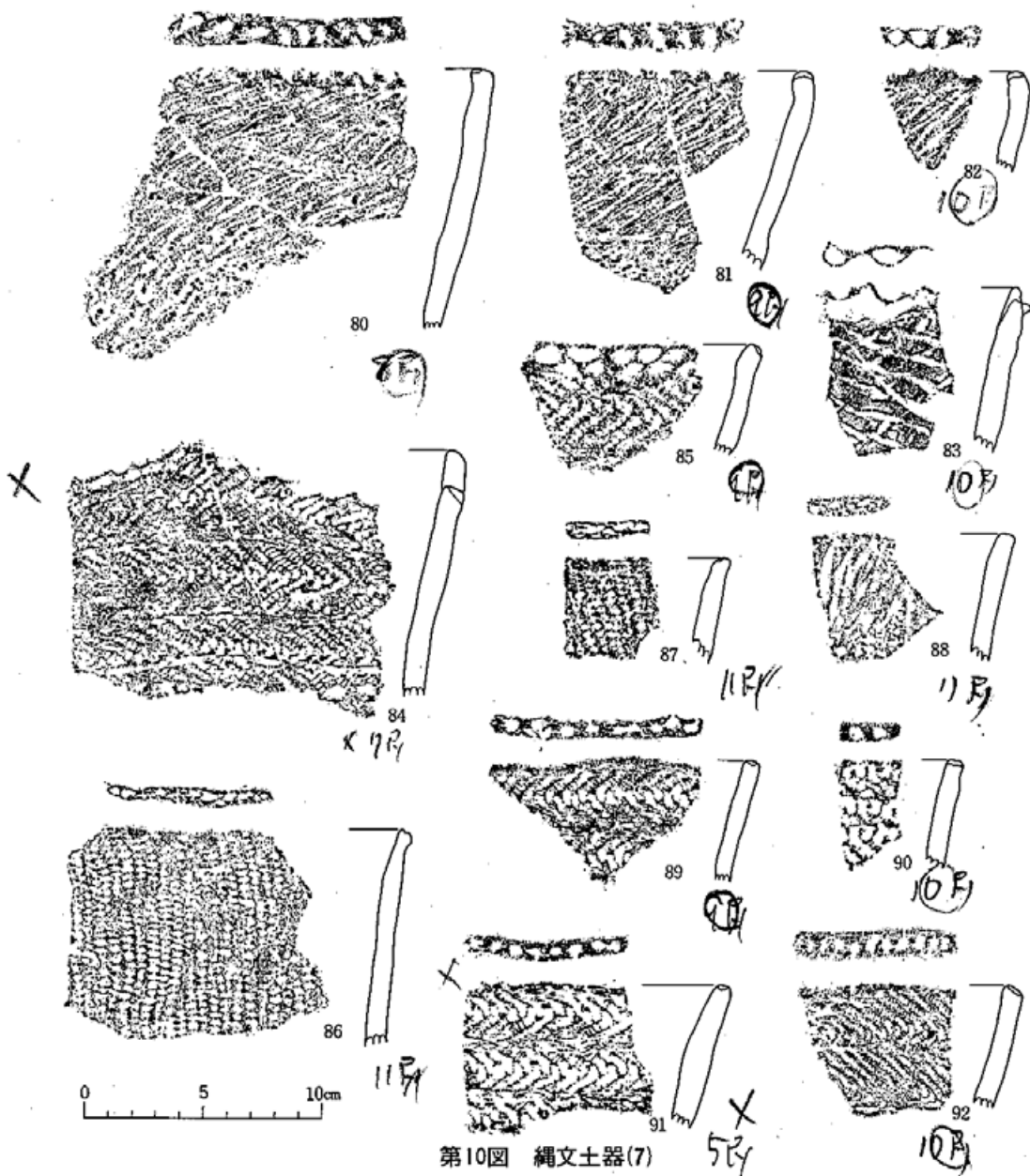
1. (97～101) 口縁部上端に竹管による刺突が施されるもので、97・98は上方から、99～102は横方向から刺突が加えられている。すべて平縁である。地文は97・98・101・102が結束のない羽状縄文、99・100が結束された羽状縄文である。

2. (103～109) 口縁部上端が肥厚し、肥厚した部分に縦位の刻目をもつもので、103のように複合口縁状を呈するものもある。103はまた、口縁部に小突起を有している。107の刻目は幅の狭



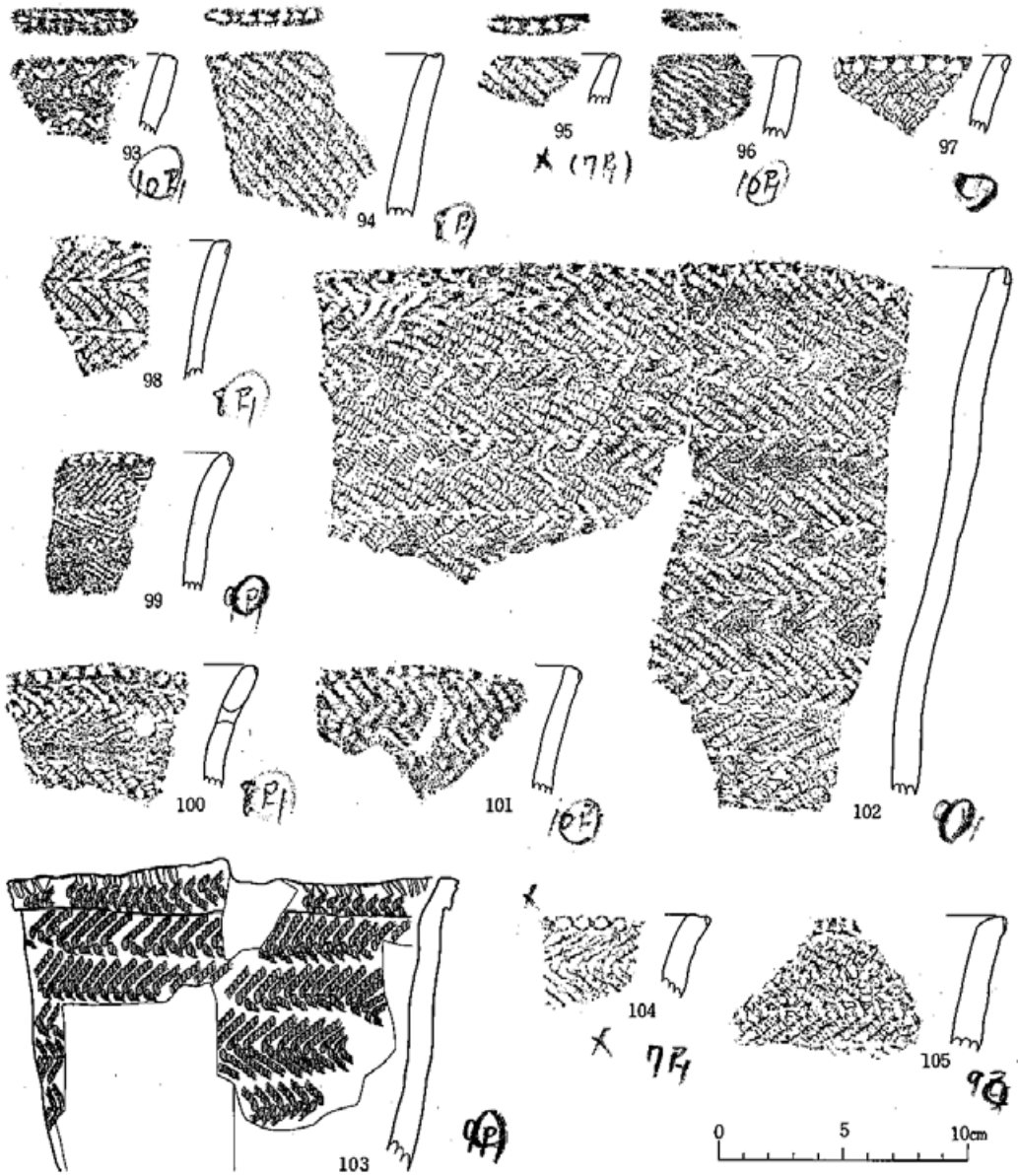
第9図 縄文土器(6)

No.	地区層位	部位	組織	口唇部	外面	内面	その他	分類
73	G-6 8層	口縁部	含む	刺突文	羽状縄文 (RL×LR) 屈曲部 上・下両方向から5の横位連続刺突文	ミガキ		B II b
74	G-6-7 10層	*	*	刻目 (斜位)	羽状縄文 (RL・LR) 屈曲文 刺突文 (斜位)	*	波状口縁	*
75	F-6-7 9層	*	*	小波状・刺突	(RL×LR)	擦痕	*	B II a
76	F-8 9層	*	*	押圧	縄文 (RL)	ミガキ・ナデ		*
77	G-7 10層	*	*	刻目	結束された斜行縄文 (RL×RL)	ミガキ		*
78	G-6-7 8層	*	*	*	羽状縄文 (LR×RL)	*		*
79	G-6-8 10層	*	*	*	*	*		*



第10図 縄文土器(7)

No.	地区層位	部 位	織 維	口 唇 部	外 面	内 面	そ の 他	分 類
80	G-6-7 8層	口縁部	含む	小波状	燃承文 (R)	ナデ		B III a
81	G-7 9層	〃	〃	原体圧痕(R)	〃 (R)	〃	同一個体	〃
82	G-7 10層	〃	〃	小波状・刻目	〃 (R)	〃		〃
83	H-7 10層	〃	〃	刻目 (刻痕)	付加条 (R<LR)	〃		〃
84	G-6 7層	〃	〃	刻突	羽状縄文 (RL×LR)	〃	液状口縁	〃
85	H-6 9層	〃	〃	〃	〃	〃		〃
86	H-6-7 11層	〃	〃	原体圧痕(RL)	縄文 (RL) 斜位施文	〃		同一個体
87	H-6 11層	〃	〃	〃	〃	〃		
88	H-8-9 11層	〃	〃	刺突 (原体)	〃 縦方行ナデ (原体)	不明		〃
89	H-6 9層	〃	〃	〃	羽状縄文 (LR×RL)	ミガキ		〃
90	G-7 10層	〃	〃	〃 (棒状工具)	未端ループ文 (RL)	不明		〃
91	H-8 5層	〃	〃	〃	羽状縄文 (RL×LR)	ミガキ		〃
92	H-8 10層	〃	〃	〃	〃	ナデ		〃



第11図 縄文土器(8)

No.	地区層位	部位	縦文	口縁部	外	面	内	面	その他	分類
93	H-8-9 10層	口縁部	含む	刺突(平行梳文具)	縄文 (LR+片面ループ)		ミガキ・ナデ			BⅡb
94	C-6-7 8層	〃	〃	〃 (棒状工具)	〃 (RL)		不明			〃
95	C-6 7層	〃	〃	〃 (半截竹管)	〃		ナデ			〃
96	H-8 10層	〃	〃	刮目(斜位)	〃		不明			〃
97	C-8 9層	〃	〃	口縁上端 刺突(竹管上方)	羽状縄文 (LR・RL)		ミガキ			BⅡc
98	F-6 8層	〃	〃	〃	〃		〃			〃
99	H-6 9層	〃	〃	〃	(LR×RL)		ナデ			〃
100	G-6-7 8層	〃	〃	〃	〃		〃		補修孔	〃
101	G6-8 10層	〃	〃	〃	(LR・RL)		ミガキ			〃
102	G-6-7 9層	〃	〃	〃	〃		ミガキ・ナデ			〃
103	G-6-7 9層	〃	〃	口縁上端隆帯 刮目・(斜位)	(LR×RL)		ナデ		小突起	BⅡd
104	C-6 7層	〃	〃	〃	(LR×RL)		擦痕			〃
105	G-6-7 9層	〃	〃	〃	〃		ミガキ			〃

い平行施文具で施文されている。地文はすべて結束された羽状縄文である。

3. (110~119) 口縁部上端に刻目をもつものであるが、bのように口縁部上端が特に肥厚することはない。刻目には縦位のものと同斜位のものがあり、100~115が縦位、116~119が斜位のものである。口縁部形態は116が波状口縁で、他は平縁である。刻目は115が半載竹管、116はおそらく爪先によるものと思われ、他はへら状工具によるものである。地文は113・114・118・119が結束された羽状縄文、110~112・116・117が結束のない羽状縄文で、115は縄文(R L)が多段に横位施文されて帯縄文状となっている。

BIV類 (第12・13図、120~127)

口縁部と胴部の境にわずかな段をもったり、口縁部下端を肥厚させて胴部と区画するもので、口唇部や口縁部上端、区画部への施文・刺突などはまったくないものである。口唇部にはミガキが施され、口縁部上端は角張ることが多い。地文は120~126が結束された羽状縄文、127が斜行縄文(R L)で、縄文施文が口縁部上端まで及ばないため、わずかな無文帯が口縁部上端に残されるもの(120~124)もある。

BV類 (第13~18、図128~209)

地文だけが施文されるものである。器形的にも口頸部の境が明瞭ではない。施文される地文の違いにより、a~fに細分できる。

a (128~141) 斜行縄文が施文されるものである。縄文原体には単節、複節、合の撚などがある。

128~138は単節縄文が施されるもので128~132がR L、133~138がL Rである。いずれも横位に回転施文しているが、138では縦位の回転施文も認められる。帯縄文状に施文幅の明瞭なものが多いが、施文単位の不明瞭なものもある。それぞれの縄文の節の傾きを見ると縄文原体は0段多条が多いと思われ、138では条中の節の表われ方から0段3条であることが知られる。129の原体は1段の条の太さが異なっているものである。

139・140は複節縄文が施されるもので、139はL R L、140はR L Lである。139の口縁には2個一対の小突起が4単位に配されている。

141は合の撚 ($L < R$) が横位や斜位に回転施文されるもので、原体の両端には結節が認められる。

b (142~158) 結束されない羽状縄文が施文されるものである。142~144が波状口縁で、他は平縁である。すべて単節縄文L RとR Lを交互に横位回転施文して羽状縄文としている。また縄文原体の閉じた端や細い繊維によって結縛された端が認められ、整った縄文帯が重層しているものと、末端が不明で、施文単位の境の明瞭でないものがあり、前者が多い。

c (159~190) 結束された羽状縄文が施文されるものである。口縁部、胴部資料とも、量的

に最も多い。159・160が波状口縁で、他は平縁である。縄文の施文幅は1.5～3cmで、160・161・184・185のように短い原体では結束部分が強調されて施文されている。節の傾きや形態からみると0段多条がほとんどで、162、168、171も0段の条が太い多条である。また、原体の末端は細い繊維によって結縛されている例が多い。190は結束後のLRの条に結び目が一個作られているものと思われる。191はRLの条に側面ループが一個作り出されている。

d (192～201) 縄文原体の末端にループを有するものである。194が波状口縁で、他はすべて平縁である。192・193は無節(R)の、194・195はLRの、196～201はRLの末端にループが付されるものである。施文方法では密接して多段に施文される例(192・193・195・197)や、やや間隔を置くもの(194・201)、ループ文が口縁部に3段だけ施文されるもの(200)などがある。

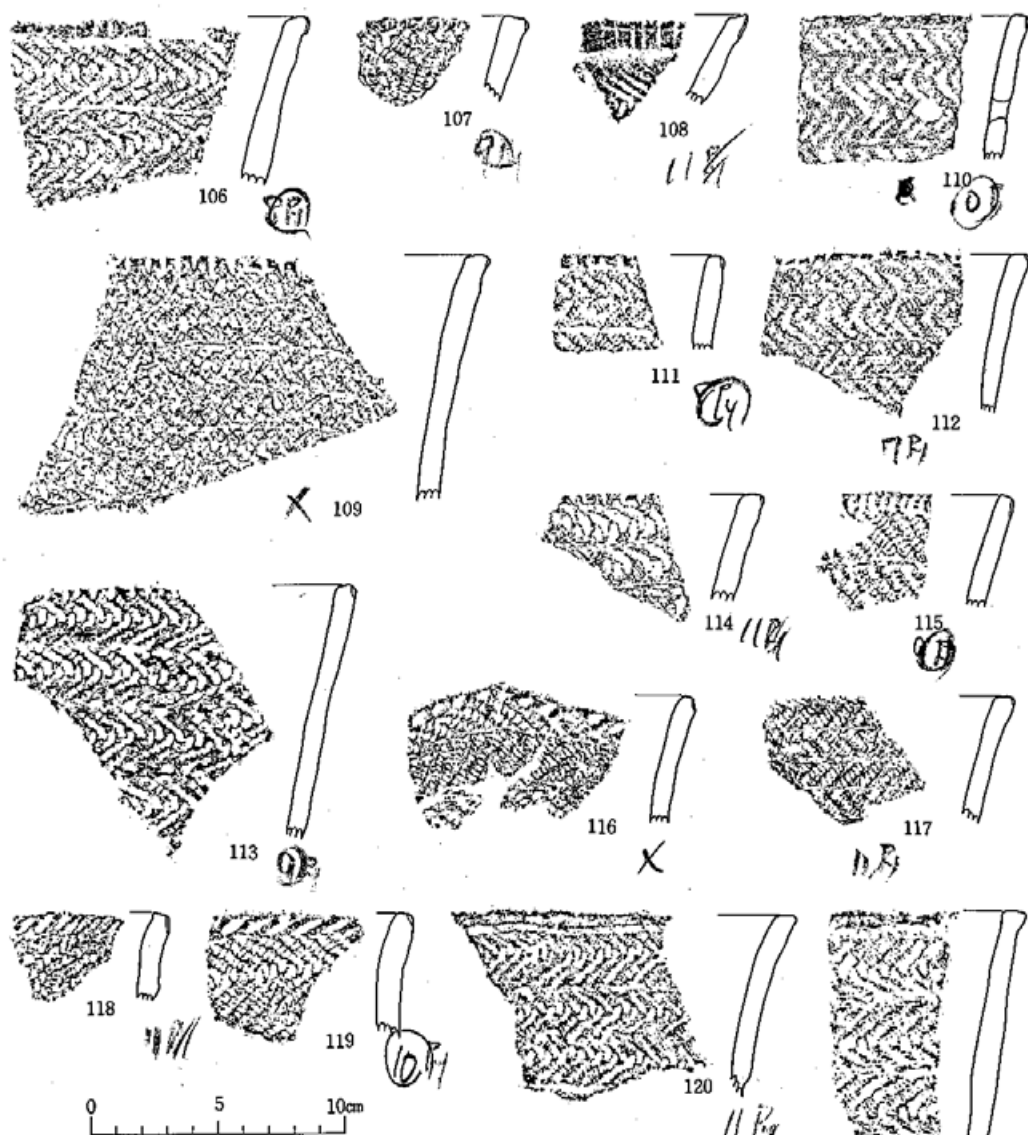
e (202) 撚糸文が施されるものである。口縁部破片は1例しかないが、胴部破片は多い。202はLの条を使用した不整なものである。

5. (203～209) 組紐回転文が施されるものである。すべて1段の条を組んだもので、204がLLRR、205がRRRRで、203・206～209がLLLL^{註1}である。

BVI類 (第19図210)

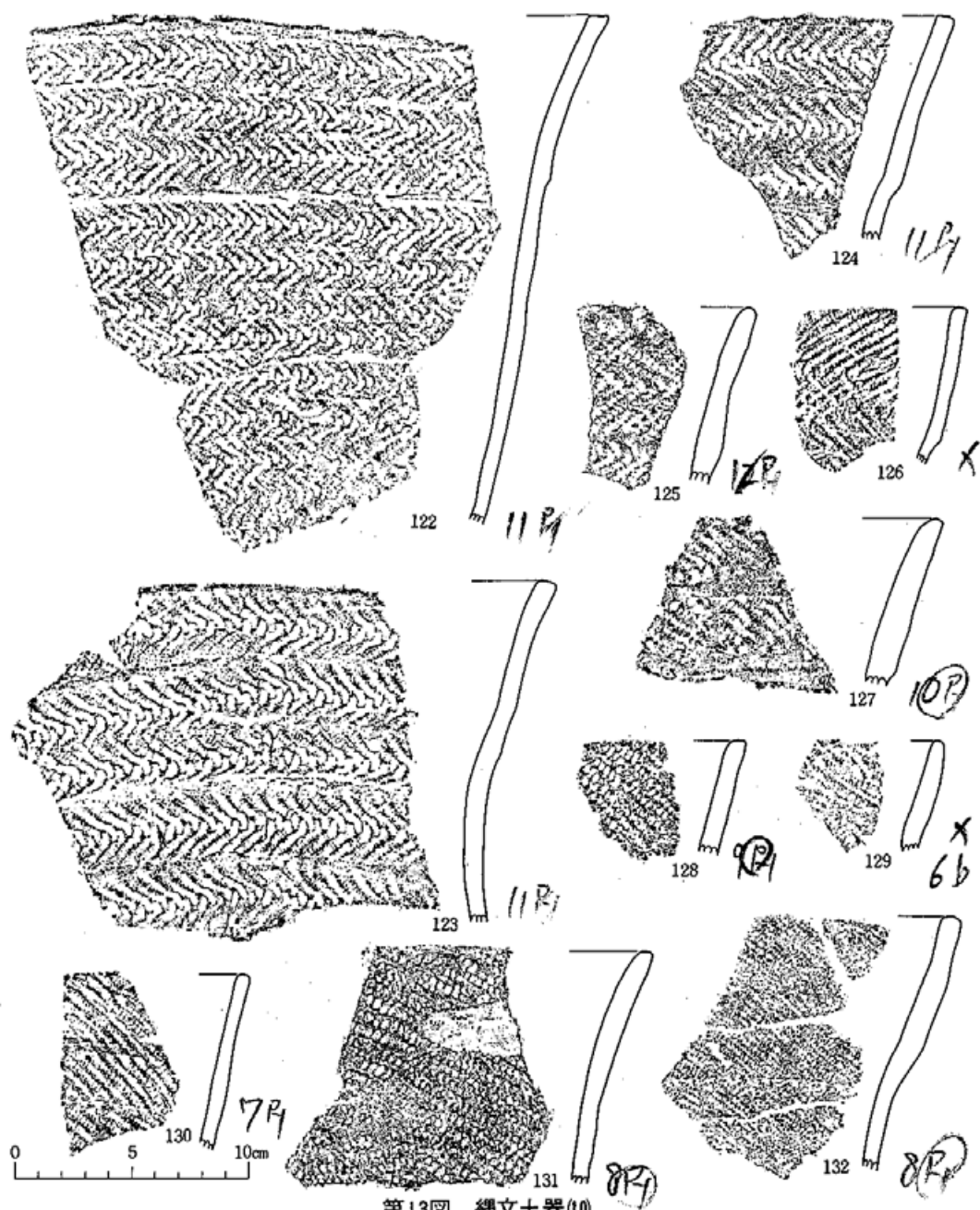
刻目を有する隆帯と半載竹管による文様をもつもので1点ある。胎土に繊維を少量含んでいる。口縁部に細粘土紐を一条横位に貼付した隆帯を巡らし、隆帯上には押しつぶしたような刻目が施される。隆帯から頸部にかけては半載竹管による横位連続刺突文が4列施されている。胴部には結節を回転施文した綾絡文が施されている。

誌1. 組紐回転文の原体の表記については、「貝崎貝塚第3次発掘調査報告」(下村・庄野:1979)の表記法にしたがった。



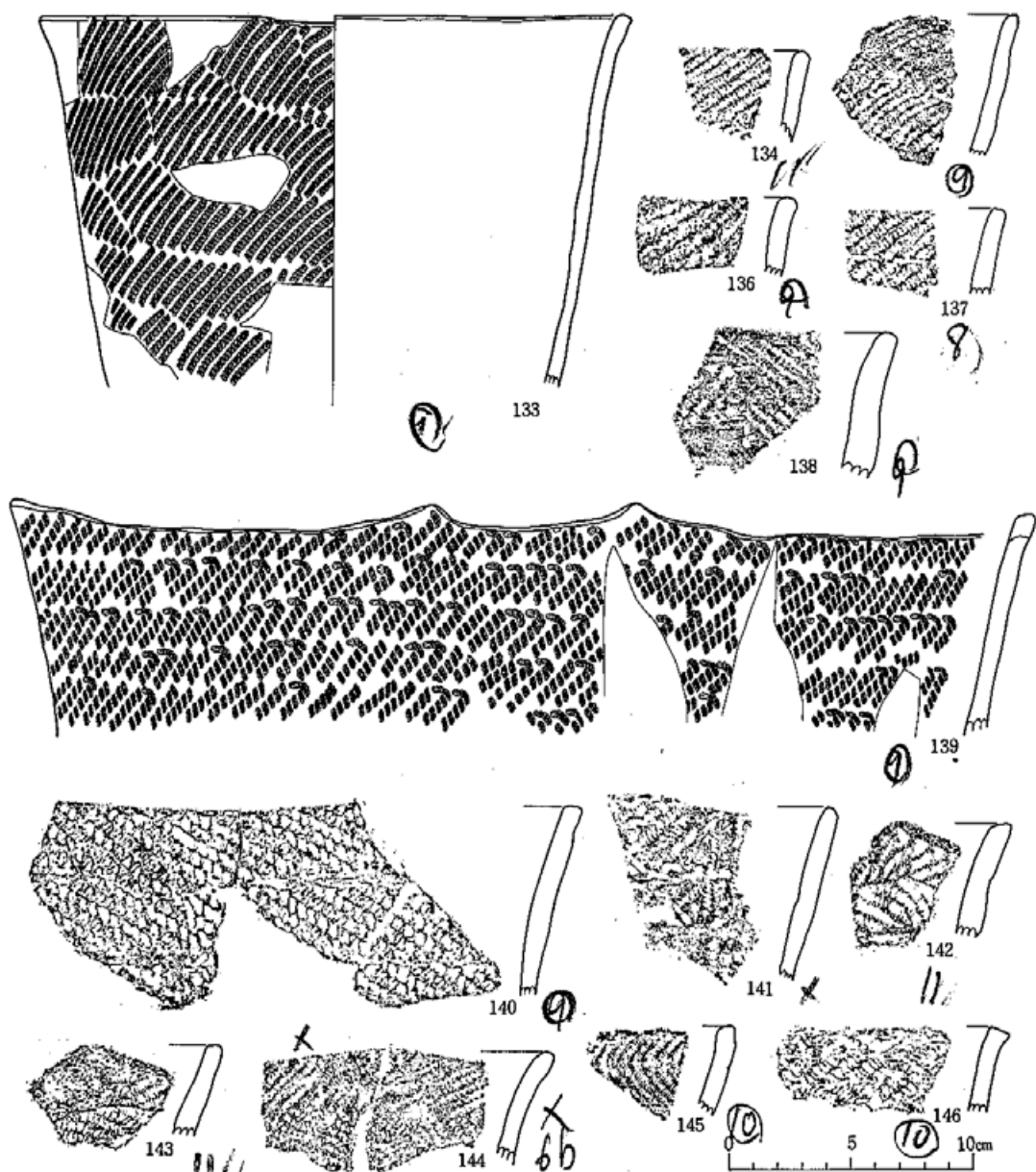
第12図 縄文土器(9)

No.	地区層位	部位	繊維	口唇部	外 面	内 面	その他	分類
106	G-6-7 8層	口縁部	含む	口縁上縁隆帯 刻目(刻位)	羽状縄文(LR×RL)	ミガキ		B III d
107	C-7 9層	*	*	*	*	*	*	*
108	H-6-7 11層	*	*	刻目(平行彫文具) 刻目	*	*	*	*
109	G-6 7層	*	*	口縁上縁 刻目(刻位)	*	*	*	B III e
110	G-7 10層	*	*	*	(LR・RL)	*	補修孔	*
111	G-6 8層	*	*	*	*	*	*	*
112	G-6 7層	*	*	*	*	*	*	*
113	H-7 9層	*	*	*	(LR×RL)	*	*	*
114	H-8-9 11層	*	*	*	*	*	*	*
115	G-6-7 9層	*	*	刻目(爪形状)	(LR・RL)	*	*	*
116	H-5 3層	*	*	刻目(刻位)	*	ナデ	波状口縁	*
117	H-8-9 11層	*	*	*	*	ミガキ	*	*
118	H-8-9 11層	*	*	*	(LR×RL)	ナデ	*	*
119	H-8-9 10層	*	*	*	*	ミガキ	*	*
120	H-8-9 11層	*	*	なし	(RL×LR) 段あり	*	*	B N
121	C-6-7 8層	*	*	*	(LR×RL)	ナデ・ミガキ	*	*



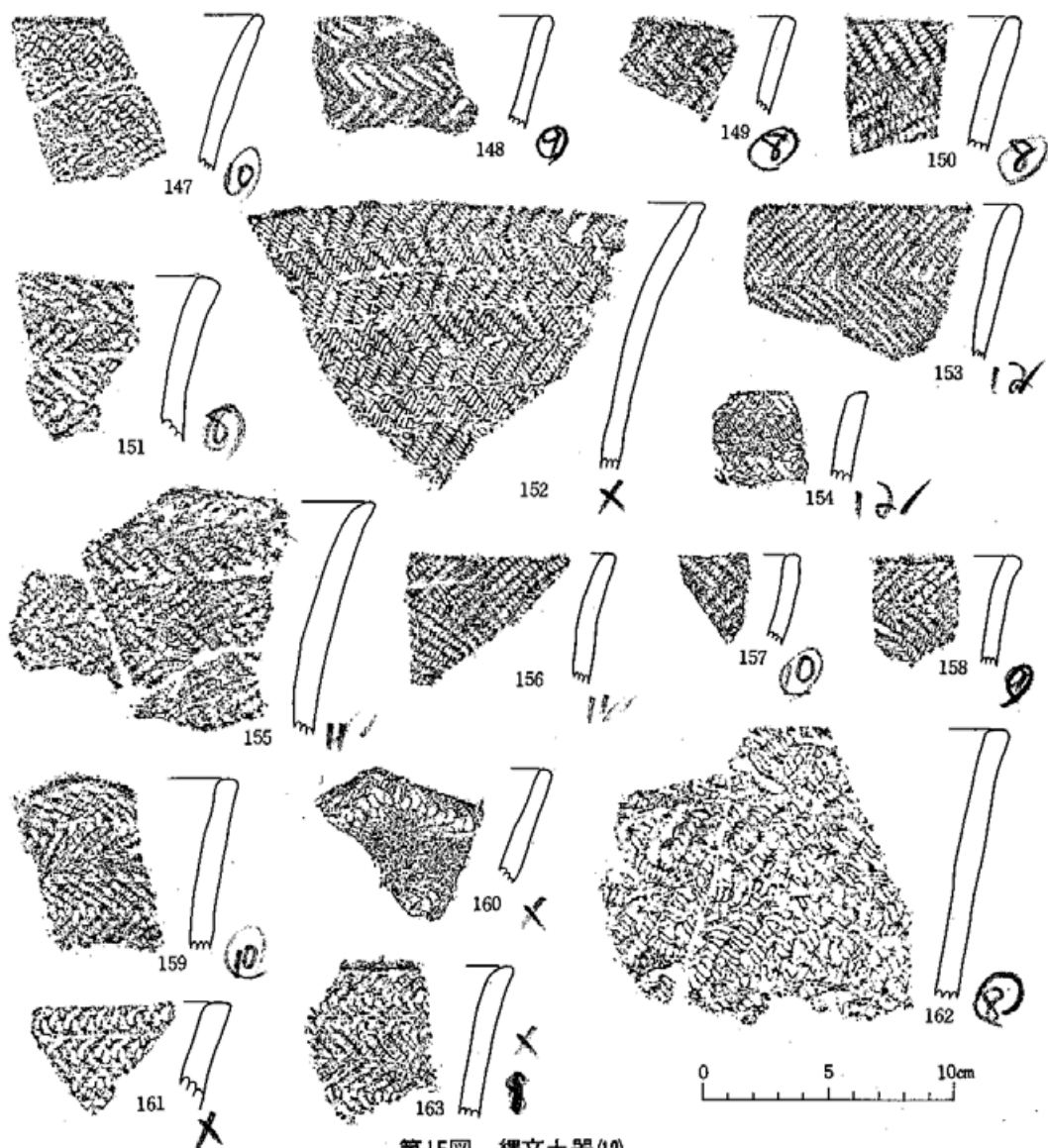
第13図 縄文土器(10)

No.	地区層位	部位	継ぎ目	口唇部	外 面	内 面	その他	分類
122	H-8・9 11層	口縁部	含む	なし	羽状縄文 (RL×LR) 段あり	ミガキ		B N
123	H-6 11層	○	○	○	○	○		○
124	H-6 11層	*	*	*	(LR×RL)	○		○
125	H-6・7 12層	○	○	○	(RL×LR)	*		○
126	H-6 6層	○	○	○	(LR×RL)	○		○
127	H-6 10層	○	○	○	縄文 (RL)	*	ナデ	○
128	G-6・7 9層	*	*	*	斜行縄文 (RL)		ミガキ	B V a
129	G-8・9 6b層	○	○	○	○	○		○
130	G-6 7層	○	○	○	○	○	ナデ・ミガキ	○
131	G-8 8層	○	○	○	○	○	ミガキ	○
132	H-7・8 8層	*	*	*	*	*		○



第14図 縄文土器(II)

No.	地区層位	部位	繊維	口唇部	外	面	内	面	その他	分類
133	H-8-9 9層	口縁部	含む	なし	斜行縄文 (LR)		ミガキ			BV a
134	H-8-9 11層	*	*	*	*	*	*	*	*	*
135	G-7 9層	*	*	*	*	*	*	*	*	*
136	H-8 9層	*	*	*	*	*	*	*	*	*
137	F-6 8層	*	*	*	*	*	不明	*	*	*
138	G-6-7 9層	*	*	*	*	*	ナデ	*	縦位施文もあり	*
139	H-8-9 9層	*	*	*	複節縄文 (LRL)		ミガキ		小突縁 全幅1.5x4単位	*
140	G-7 9層	*	*	*	(RLL)		*	*	*	*
141	H-8-9 6b層	*	*	*	合の掬 (L<R) + 結節		*	*	縦位施文もあり	*
142	H-6 11層	*	*	*	羽状縄文 (LR・RL)		*	*	液状口縁	BV b
143	H-8-9 11層	*	*	*	*	*	*	*	*	*
144	G-6 6b層	*	*	*	*	*	不明	*	*	*
145	G-6-8 10層	*	*	*	*	*	ミガキ	*	*	*
146	G-7 10層	*	*	*	*	*	*	*	*	*



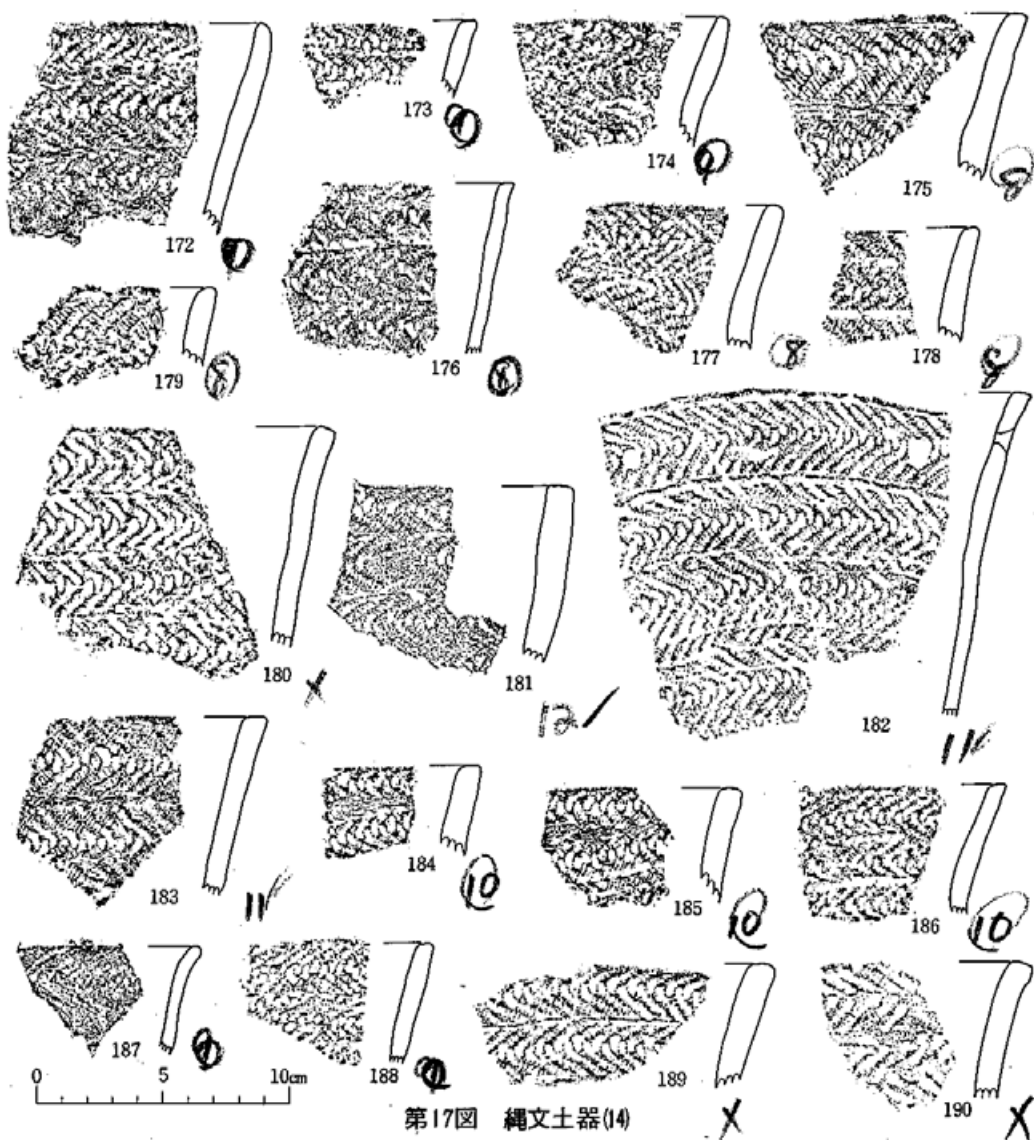
第15図 縄文土器(12)

No	地区層位	部位	繊維	口唇部	外	面	内	面	その他	分類
147	G-6-7 10層	口縁部	含む	なし	羽状縄文 (RL・LR)		ミガキ			BVb
148	C-6-8 9層	*	*	*	*	*	ナデ			*
149	G-8 8層	*	*	*	*	(LR・RL)	不明			*
150	G-6-7 8層	*	*	*	*	(RL・LR)	ミガキ			*
151	G-6-7 8層	*	*	*	*	*	*			*
152	C-6-7	*	*	*	*	(LR・RL)	*			*
153	H-8 12層	*	*	*	*	*	*	擦痕		*
154	H-6-7 12層	*	*	*	*	(RL・LR)	*	ナデ		*
155	H-8-9 11層	*	*	*	*	(LR・RL)	*			*
156	H-6 11層	*	*	*	*	*	不明			*
157	H-8-9 10層	*	*	*	*	*	ナデ			*
158	H-6 9層	*	*	*	*	*	ミガキ			*
159	H-8-9 10層	*	*	*	*	(RL×LR)	*		波状口縁	BVc
160	F-8 6b層	*	*	*	*	*	不明			*
161	G-6 6b層	*	*	*	*	(LR×RL)	ミガキ			*
162	F-8 8層	*	*	*	*	*	*			*
163	F-6-7 6b層	*	*	*	*	*	不明			*



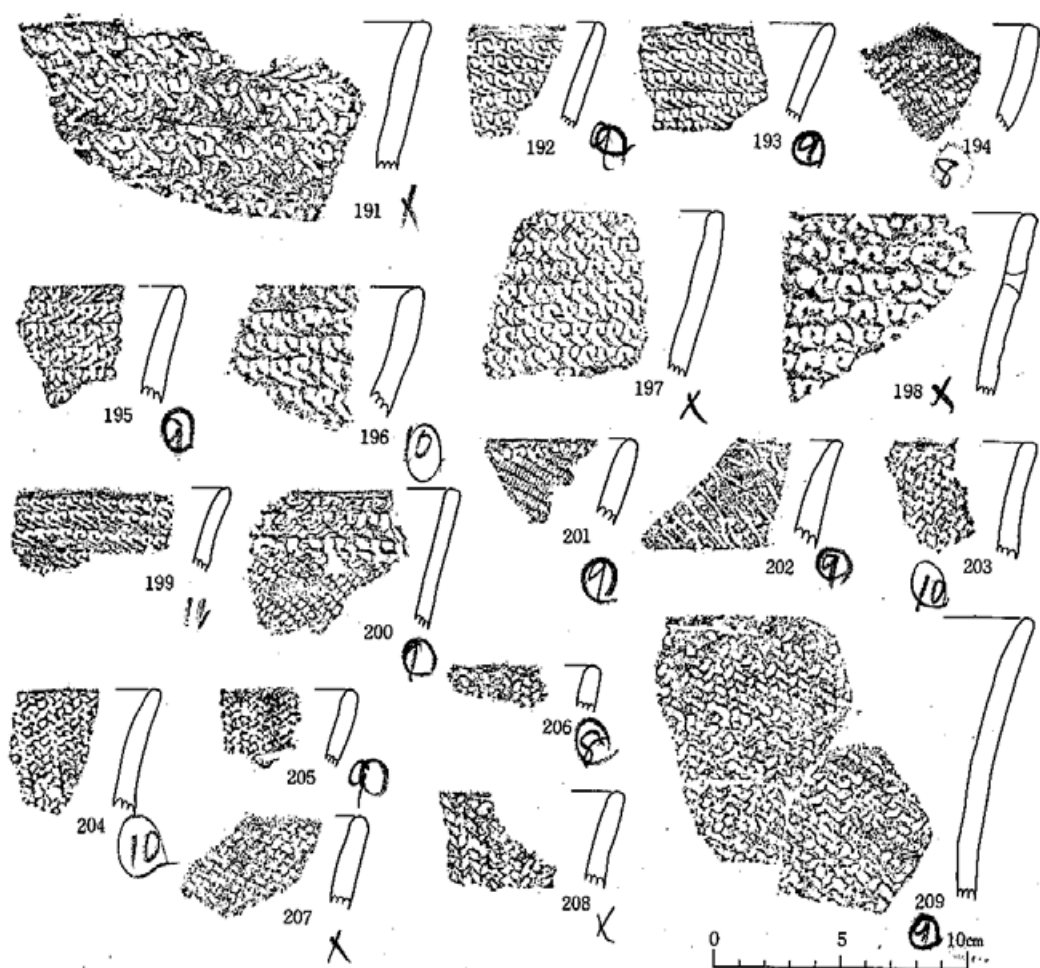
第16図 縄文土器(13)

No.	地区層位	部 位	織 維	口 唇 部	外 面	内 面	そ の 他	分 類
164	C-6 7層	口縁部	含む	なし	羽状縄文(LR×RL)	ミガキ	補修孔あり	B V c
165	F-8 6b層	*	*	*	(RL×LR)	ミガキ(探痕)		*
166	F-7 6b層	*	*	*	*	*	一部変形	*
167	F-8 6b層	*	*	*	*	ナデ		*
168	G-8 9層	*	*	*	*	ミガキ	0段3条	*
169	G-7 10層	*	*	*	(LR×RL)	*		*
170	G-8 9層	*	*	*	*	*		*
171	G-8 9層	*	*	*	(RL×LR)	*		*



第17図 縄文土器(14)

No.	地区層位	部位	横縦	口唇部	外	内	面	面	その他	分類
172	G-8 9層	口縁部	含む	なし	羽状縄文 (LR×RL)	ミガキ				Bvc
173	G-6-7 9層	*	*	*	(RL×LR)	*				*
174	G-6-7 9層	*	*	*	*	*				*
175	G-8 8層	*	*	*	*	*				*
176	G-6-7 8層	*	*	*	(LR×RL)	*				*
177	G-6-7 8層	*	*	*	(RL×LR)	ナデ				*
178	G-6-7 8層	*	*	*	*	*				*
179	G-6-7 8層	*	*	*	(LR×RL)	ミガキ				*
180	G-6 7層	*	*	*	(RL×LR)	ナデ・擦痕				*
181	H-8 12層	*	*	*	(LR×RU)	ミガキ				*
182	H-6 11層	*	*	*	(RL×LR)	*			補修孔2	*
183	H-6 11層	*	*	*	*	*				*
184	H-8-9 10層	*	*	*	(LR×RL)	*				*
185	H-9-9 10層	*	*	*	*	*				*
186	H-8 10層	*	*	*	*	ナデ				*
187	H-7 9層	*	*	*	*	*				*
188	H-6 9層	*	*	*	*	*				*
189	H-8 7層	*	*	*	*	ミガキ				*
190	G-6 7層	*	*	*	(RL×LR)	*				*



第18図 縄文土器(15)

No.	地区層位	部位	繊維	口唇部	外	内	面	その他	分類
191	F-8 6b層	口縁部	含む	なし	羽状縄文 (RL×LR) RLの条に片面ループ1	ミカキ・ナデ			BVc
192	G-6-7 9層	*	*	*	先端ループ文 (R)	ミガキ			BVd
193	H-6 9層	*	*	*	*	*		*	
194	G-6-7 8層	*	*	*	(LR)			波状口縁	*
195	H-8 9層	*	*	*	*	*		*	*
196	H-8-9 10層	*	*	*	(RL)	*		*	*
197	F-8 6b層	*	*	*	*	*		*	*
198	F-7 5層	*	*	*	*	*		ミガキ・ナデ 補修孔あり	*
199	H-6-7 11層	*	*	*	*	*		ミガキ	*
200	H-6 9層	*	*	*	*	*		*	*
201	G-8 9層	*	*	*	*	*		ナデ	*
202	H-6 9層	*	*	*	窓糸文 (L)	ミガキ			BVe
203	G-7 10層	*	*	*	組紐回転文 (LLLL)	*			BVf
204	H-8-9 10層	*	*	*	(LLRR)	*		*	*
205	H-6 9層	*	*	*	(RRRR)	*		*	*
206	G-6-7 8層	*	*	*	(LLLL)	*		*	*
207	G-6 6b層	*	*	*	*	*		*	*
208	G-6-8 6層	*	*	*	*	*		*	*
209	H-7-8 9層	*	*	*	*	*		*	*

C群土器 (第19～23図、211～284)

縄文時代前期中葉の土器群である。胎土に繊維を少量含むものが1点あるが、その他には繊維の混入は認められない。小破片が多いため全体的な文様構成などは不明なものが多いが、施文技法や文様の違いによってⅠ～Ⅲ類に類別できる。

CⅠ類 (第19～21図、211～256)

平行施文具による沈線文が施文されるものである。施文具の違いから a、b に2分される。

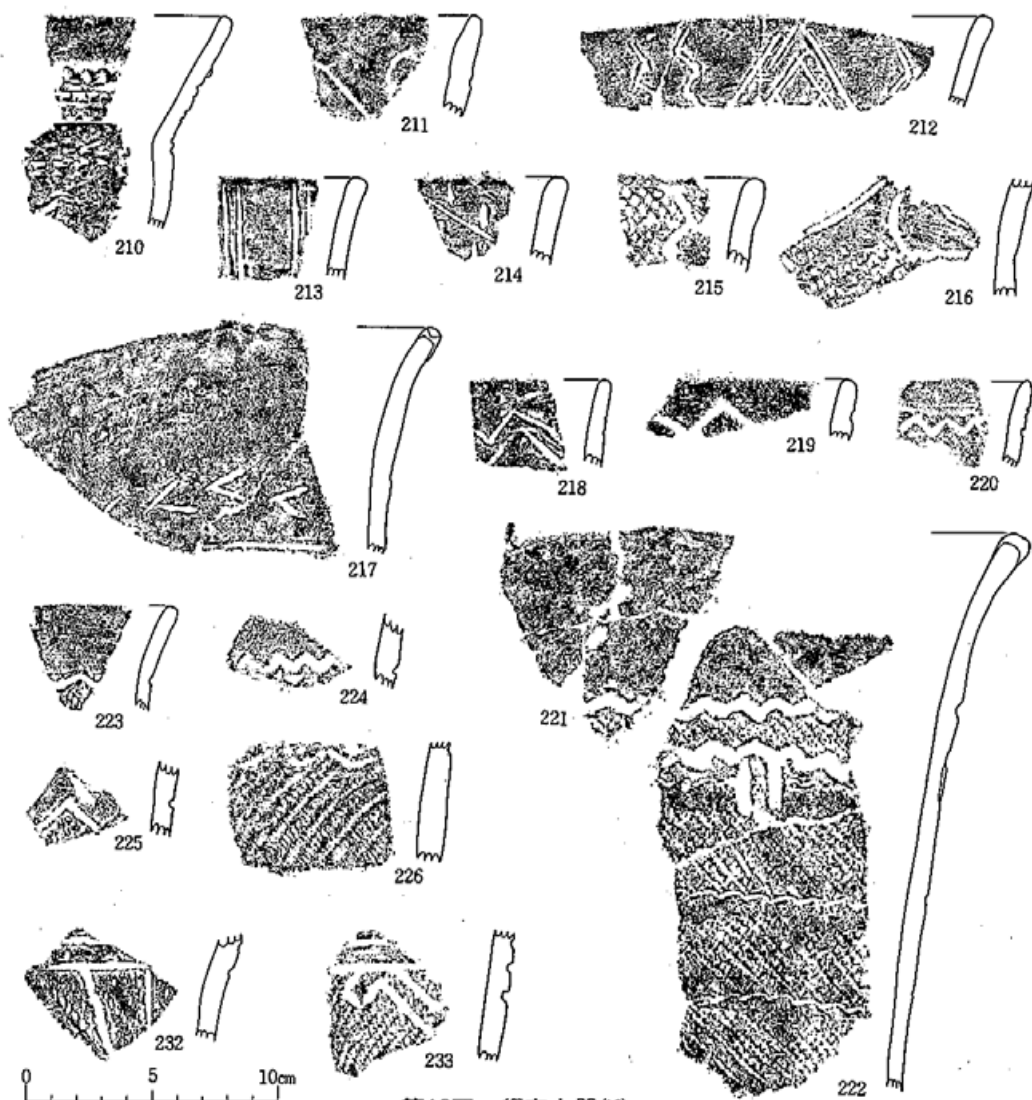
a (211～252) 一本工具による沈線文をもつもので、主として施文文様から1～5に細分できる。

1. (211～217) 口縁部に縦位や斜位の沈線文をもつもので、文様には曲線文 (211・216)、縦位山形文 (212・215)、縦位や斜位の平行線文 (213・214)、矢羽根状文 (217)、などがある。縄文 (R L) が施文される215を除いては、口縁部はナデやミガキによる無文帯となっている。211の胎土には繊維が少量含まれている。217は口縁部に貼付による小突起を有しており、小突起には上方からの刺突が1つ加えられている。

2. (218～226) 口縁部や頸部に横位の連続山形文をもつものである。218・219は口縁部無文帯に横位山形文が施文されている。221と222は同一個体で頸部に太い沈線による横位山形文を2条巡らし、下位の山形文の所々から短い平行沈線を垂下させている。この横位山形文は口縁部無文帯と地文とを区画しており、220・223～226も同様である。また、221の口縁部には細粘土紐の粘付による小突起が付される。地文は221～223がR L、225がL Rで、226は付加条である。221・222は一方の条が細いものである。

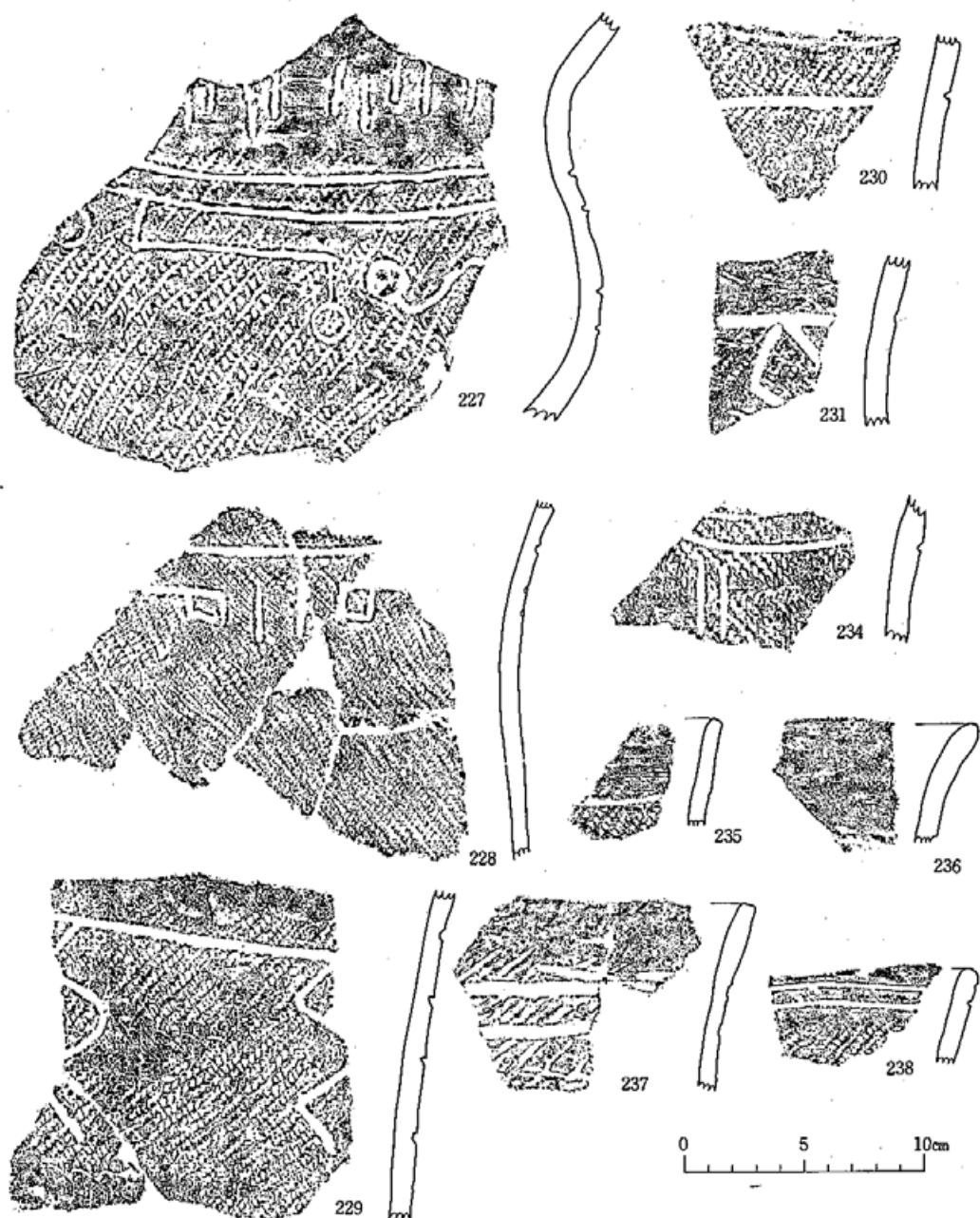
3. (227～241) 口縁部や頸部、胴部上半に横位沈線を1・2条巡らせるもので、横位沈線によって口縁部無文帯と地文が区画されるものが多い (227・229・230・233・235～239)。227は無文帯である口頸部に2本単位の短い縦位沈線が、胴部上半には横位平行沈線と円文が施され、胴部文様は、直・曲線によって接続されているものである。228～234は横位沈線とその下に直線的な文様をもつものである。228・234には227で横位沈線の上に施文されていた2本一単位の縦位沈線が横位沈線下に施されている。228の方形沈線文は227にみられた円文が変化したものと思われる。229・230は同一個体で、212・215と同様の縦位山形沈線文が横位平行沈線に接して垂下している。同じく横位沈線に接して231では菱形文が、232は縦・斜位の沈線が、233では平行沈線文が斜位に施されている。235・236は横位沈線が1条、237～239は2条巡るものである。240は1条の沈線と波状文が、241は無文部に平行沈線文と2段の山形文が横走しているものである。地文は228・232・234がR L、229～231・233・235・238・239がL R、227・240が付加条 $L < \begin{matrix} LR \\ L \end{matrix}$ 、237が無節 (L) で、229～231・237には結節が認められる。

4. (242～252) 胴部破片で文様構成の明らかでない沈線文をもつものである。242・243には



第19図 縄文土器(16)

No.	地区	層位	部	位	縦	横	口	唇	部	外	面	内	面	その他	分類
210	H-6	8層	口縁部	含む	なし	なし	なし	なし	なし	剣目隆帯・横位連続刺突文(半軟竹筴4列)	稀部(δ)	ミガキ			B V
211	H-6	7層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	沈線文(1本工具)	曲線文	〃			C Ia1
212	H-6-7	6a層	〃	〃	なし	〃	〃	〃	〃	縦位山形文・平行線文		〃			〃
213	C-7	6b層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	縦位平行線文		〃			〃
214	F-6	7層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	斜位平行線文		〃			〃
215	C-7	6b層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	縦位山形文・縄文(RL)		〃			〃
216	H-7	6a層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	曲線文・縄文(LR)		〃			〃
217	I-8-9	7層	〃	〃	〃	〃	小突起	〃	〃	〃	〃	〃			〃
218	H-8-9	6層	〃	〃	〃	〃	なし	〃	〃	〃	〃	〃			〃
219	H-6	5層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〃
220	H-8	5層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
221	J-6	6b層	〃	〃	〃	〃	熟土粘貼付 小突起	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
222	I-6	5層	頸部~胴部	〃	なし	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	同一個体
223	X	X	口縁部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
224	I-8-9	7層	頸部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
225	H-8	4層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
226	I-8-9	5層	胴部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
232	G-6-8	6層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
233	H-9	6層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃



第20図 縄文土器(17)

No.	地区	層位	部	位	線	口	外	内	内	面	面	その他	分類
227	G-8	6b層	胴部-胴部	なし	なし	なし	沈線文(1本工具)平行沈線文(縦位・横位) 円文・縄文(付加糸)L<R					ミガキ	CIa3
228	G-6-7	6b.c層	*	*	*	*	*	*	*	方形沈線文・縦位沈線文・縄文(RL)	*	*	*
229	H-8	6b層	*	*	*	*	*	*	*	横位平行沈線文・縦位山形文・縄文(LR) 結節	*	*	*
230	H-8	6b層	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
231	H-8	6b層	*	*	*	*	*	*	*	横位沈線文・菱形文・縄文(LR) 結節(R)	*	*	*
234	I-8-9	5層	*	*	*	*	*	*	*	横位・縦位平行沈線文・縄文(RL)	*	*	*
235	H-6	6層	口縁部	*	*	*	*	*	*	横位沈線文・縄文(LR)	*	*	*
236	G-6	6b層	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
237	G-8	6a層	*	*	*	*	*	*	*	横位平行沈線文・縄文無筋(L) 結節	*	*	*
238	H-8-9	6層	*	*	*	*	*	*	*	横位平行沈線文・縄文(LR)	*	*	*

直線的なものと同線的な沈線文が施される。244には直線的な、245～249には曲線的な沈線文が施され、250～252には2本1単位の短い縦位沈線が施されている。地文は242がRL、243・246～251がLR、245がRL ℓ (?)、244が付加条 $R < \begin{matrix} RL \\ L \end{matrix}$ である。

b (253～256) 半載竹管による平行沈線文をもつものである。文様の違いによって2分される。

1. (253) 頸部に細い半載竹管による横位山形文が2条巡るもので、この山形文によって口縁部無文帯と、胴部が画されている。地文はRLである。

2. (254～256) 半載竹管による平行沈線文や爪形文が密に施文されるものである。243は口縁部上端に半載竹管の横位連続押引きによる爪形文を2列、列点文を1列巡らせ、口縁部下端にも爪形文を1列横走させて、その間の無文帯に平行沈線文を斜位に施文している。244は半載竹管による平行沈線文、押し爪形文、へら状工具による横位沈線文や列点文が施される。245には半載竹管による平行沈線文、連続刺突文が施されている。

C II類 (第22・23図、257～281)

粘土紐を横位に貼付したり、細粘土紐の貼付による文様をもつものである。施文文様の違いなどによりa、bに2分される。

a (257～260) 斜位の刻目を有する粘土紐が横位に貼付されるものである。その他の文様の有無によって1・2に細分される。

1. (257・258) 斜位の刻目が施される粘土紐を横位に貼付したものである。257はナデ調整による無文帯の下に2条粘土紐が貼付されている。刻目は尖端の鋭いへら状工具によって刻まれている。258は257より太い粘土紐を貼付している。粘土紐は横位沈線によって2分され、それぞれに先端の角ばった工具によって斜位の刻みが施されている。257はLR、258はRLの単節斜行縄文が地文として施文されている。

2. (259・260) 斜位の刻目が施される横位粘土紐の貼付の他に、細粘土紐の貼付による文様をもつものである。259・260はともに横位粘土紐の下に接して、細粘土紐の貼付による曲線的な文様が縦位に展開している。259の細粘土紐にはミガキ調整が加えられ、平滑になっており、横位粘土紐への刻目は最終的に加えられている。260の細粘土紐には貼付後の調整は加えられていない。地文は259がRL、260がLRである。

b (261～281) 細粘土紐の貼付による文様をもつものである。貼付後の粘土紐には顕著な調整は加えられない。文様の違いにより1～4に細分される。

1. (261～263) 細粘土紐の貼付文の他に沈線文をもつものである。261は曲線的な貼付文の文様間に227・228・234・250・252などに見られた2本1単位の短い縦位沈線が施されている。262は貼付文の両側に沈線が並走している。263は細粘土紐を貼付した梯子状文と曲線的な沈線文が施さ

れている。地文は261・263がLR、262が $L < \frac{L}{L} R$ の付加条である。

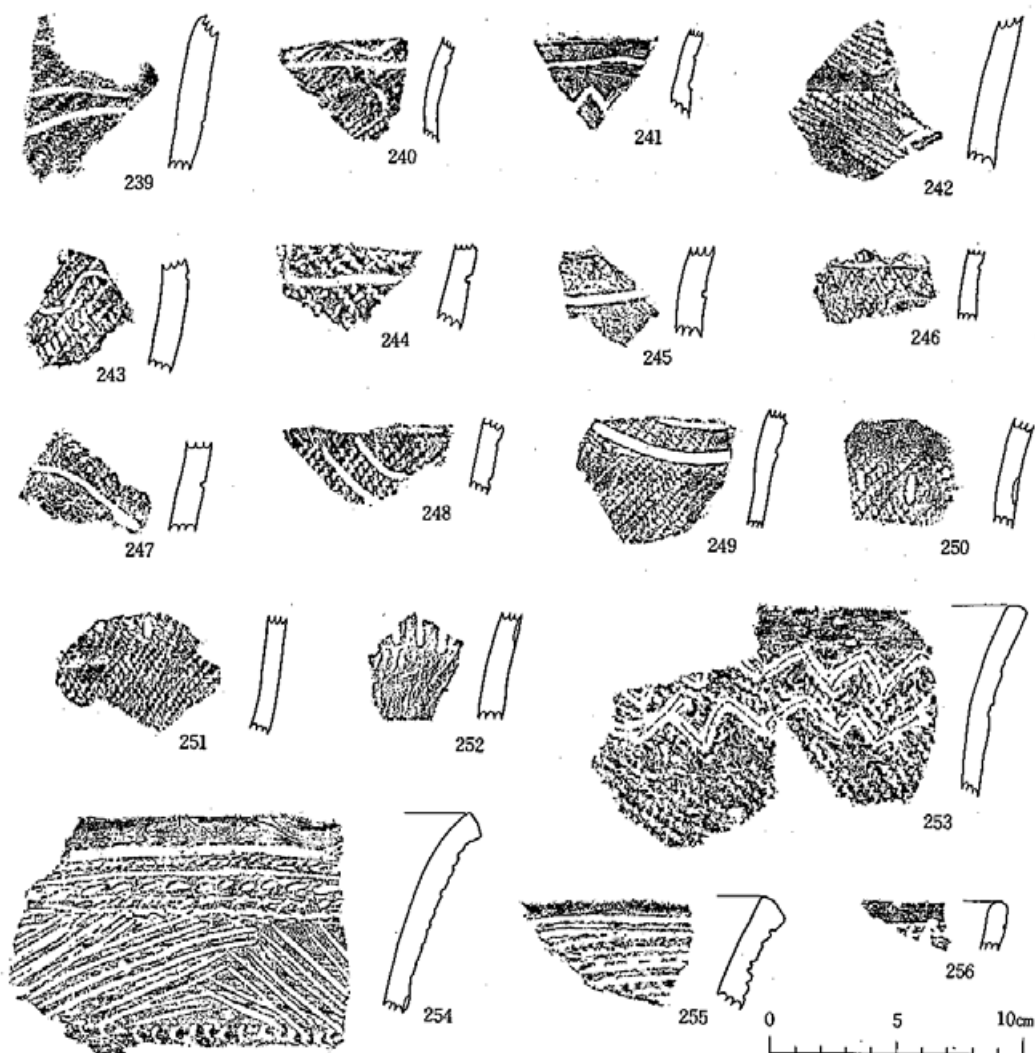
2. (264~270) 細粘土紐の貼付による曲線的な文様をもつものである。264が口縁部、265・266が頸部破片で他は胴部破片である。264は口唇部に「S」字状の、口縁部内面にも同様の曲線文が施されている。口縁部外面はナデ調整による無文である。265・267は平行する貼付文が施されるもので、265には外面からの盲孔と両面から穿孔された補修孔がある。266は無文帯と地文の境に1条の曲線的な貼付文が横走している。268~270は曲線的な貼付文が縦位に施されるもので、268・269は同一個体である。地文は265・266がLR、267・269がLRr、270がRLである。

3. (271~275・277) 細粘土紐貼付文の文様構成に梯子状文をもつものである。277はB群土器のなかで復元実測できた唯一の例である。頸部で強く屈曲する器形で、口縁部は外反する。胴部は脹み、上半に最大径をもつが下半は急角度ですぼむ。口縁端に幅は広いがあまり突出さない台状の突起を有している。口頸部は横方向のミガキ調整が施され無文帯となっている。頸部から胴部上半には地文(LRr)施文後、細粘土紐を2本平行に貼付する横位平行線文や、横位に連続する渦巻文に近い曲線文が施文され、これらの文様の随所に梯子状文が付加されている。277の曲線文は261・265・267などに共通する文様である。271~273は同一個体で271・272が口縁部、273が頸部から胴部にかけての破片である。横位に展開する梯子状文の他に271・272では口唇部にも細粘土紐の貼付文が施文され、273の貼付文には細かな斜位の刻目が施されている。274は横位の波状貼付文や斜位の貼付文の間に梯子状文が施される。275は277に見られるような曲線文に付された梯子状文である。273・274の地文はLRで、275は付加条 $R < \frac{R}{L} L$ か1段の条の太さの異なるRLである。

4. (276・278~281) 細粘土紐の貼付による横位の小波状文をもつものである。278は貼付文が剥離しているが、その痕跡から口頸部のミガキ調整による無文帯と胴部の地文との境に小波状文を貼付していたものと思われる。276・279は2列の、280と281は1列の横位小波状文が施されている。地文は276がRL、276・280がLR、281がLRrである。

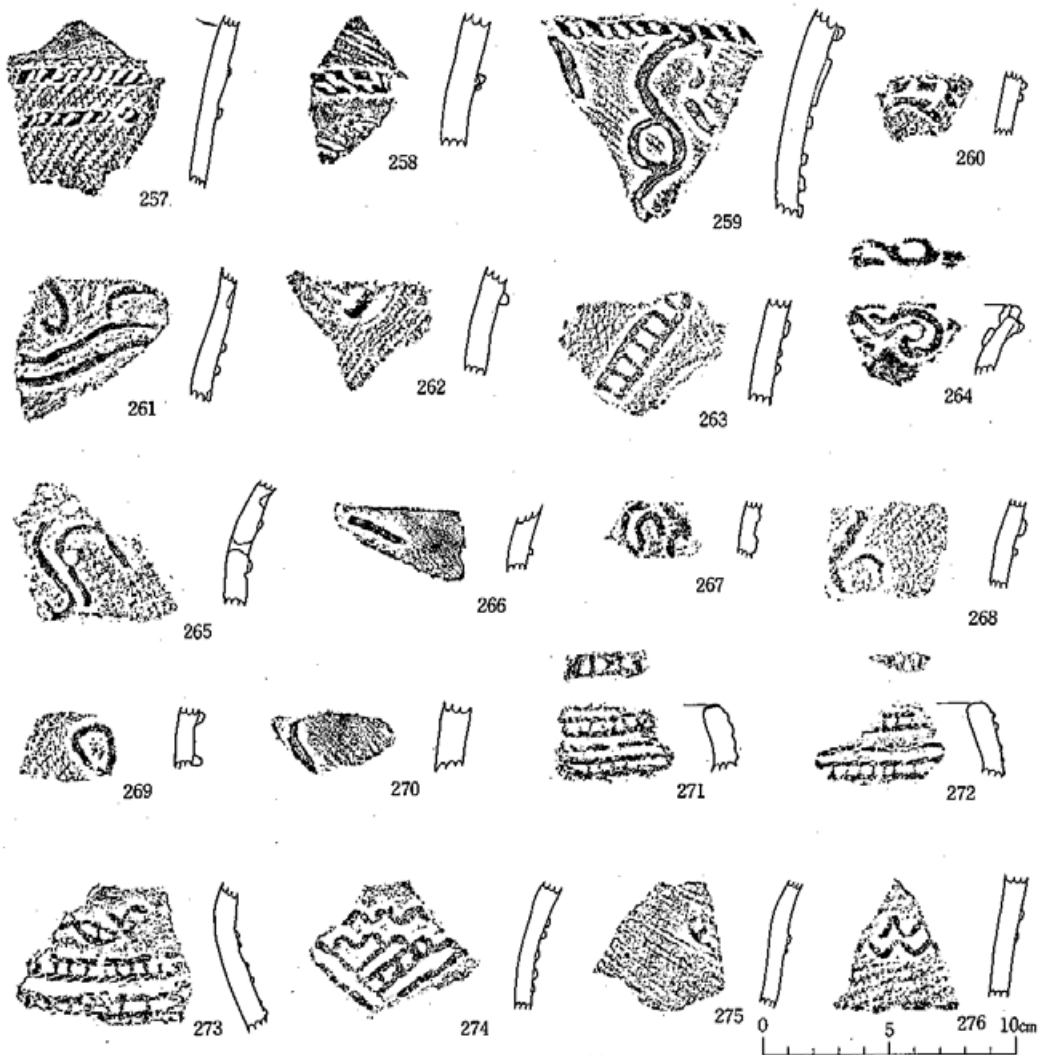
CⅢ類 (第23図、282~284)

無文の口縁部である。282は口縁端に低い台状の突起をもち、突起の上面には上方からの円形刺突が施されている。283・284は口縁端に粘土紐を橋状に貼付した小突起をもつもので、283は2個、284には1個の突起がみられる。同様の突起はCⅠ・CⅡ類の口縁部に認められる。



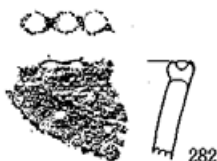
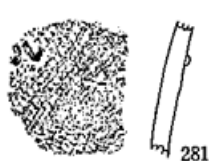
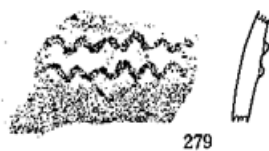
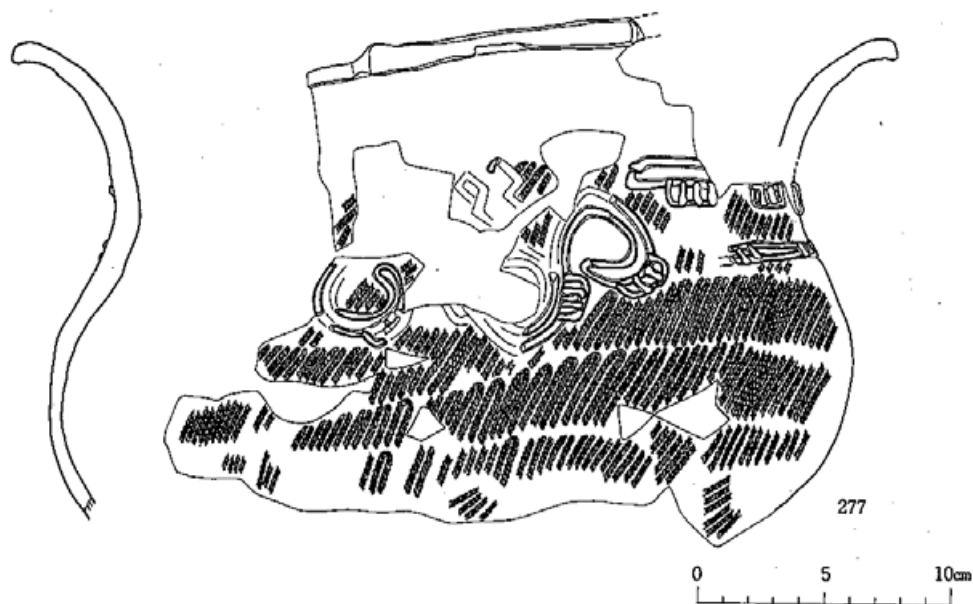
第21図 縄文土器(18)

No.	地区	層位	部位	横	縦	口唇部	外	面	内面	その他	分類
239	H-6	7層	口縁部	なし	なし		沈線文(1本工具)	横位平行沈線文・縄文(LR)		ミガキ	CIa3
240	G-8	6層	頸部~胴部	*	*	*	*	横位山形文・横位沈線・縄文(付加条) L < L ^R	*		*
241	H-6	8層	頸部	*	*	*	*	横位平行沈線・横位山形文	*		*
242	H-8	6層	胴部	*	*	*	*	直・曲線文・縄文(RL)	*		CIa4
243	G-7	6b層	*	*	*	*	*	(LR)	*		*
244	G-8-9	6b層	*	*	*	*	*	直線文・縄文(付加条) R < R ^L	*		*
245	H-8	6b層	*	*	*	*	*	横位沈線文・縄文(RL?)	*		*
246	H-6	6b層	*	*	*	*	*	曲線文・縄文(LR)	*		*
247	H-6	6層	*	*	*	*	*	曲線文・縄文(LR)	*		*
248	H-8	5層	*	*	*	*	*	*	*		*
249	H-8	6b層	*	*	*	*	*	*	*		*
250	H-9	6層	*	*	*	*	*	縦位平行沈線文・縄文(LR)	*		*
251	H-8-9	6層	*	*	*	*	*	*	*		*
252	G-7	6b層	*	*	*	*	*	縄文無筋(L)	*		*
253	H-7	6a層	口縁部	*	*	*	*	平行沈線文(半截竹管) 横位山形文・縄文(RL)	*		CIb1
254	I-8	4層	*	*	*	*	*	横位・斜位爪形文・連続刺突文	*		CIb2
255	F-7	6b層	*	*	*	*	*	*	*		*
256	H-6	8層	*	*	*	*	*	横位爪形文	*		*



第22図 縄文土器(19)

No.	地区	層位	部位	縦線	口唇部	外面	内面	その他	分類
257	H-8	6b層	頸部-胴部	なし	なし	細粘土細貼付(横位・斜位刻目)・縄文(LR)	ミガキ		C II a1
258	H-8	6b層	胴部	*	*	*	*		
259	H-8-9	表土	*	*	*	・曲線文・縦位平行沈線・縄文(LR)	*		C II a2
260	H-8-9	6b層	*	*	*	*	*		
261	I-6-7	7層	*	*	*	・曲線文・縦位平行沈線・縄文(LR)	*		C II b1
262	H-6	6c層	*	*	*	・曲線文・沈線文・縄文(付加条) L < 上 ^R	*		
263	I-7	5層	*	*	*	・梯子状文・縄文(LR)	*		
264	H-8-9	6b層	口縁部	*	3字状細粘土貼付文	ナガ・無文	細粘土細貼付文の曲線文		C II b2
265	H-8-9	6b層	胴部	*	なし	平行曲線文・縄文(LR)		縦線孔1 貫孔1	
266	H-6	6a層	*	*	*	細粘土細貼付・横位曲線文・縄文(LR)			
267	H-6	6b層	*	*	*	・平行曲線文・縄文(LRr)	*		
268	土橋本 遺跡土器1層	*	*	*	*	・縦位曲線文・縄文	*		
269	H-6	6層	*	*	*	*	*	同一個体	
270	G-7	6層	*	*	*	*	*		
271	I-8-9	5層	口縁部	*	細粘土細貼付文	・梯子状文・横位平行線文(斜位の細い刻み)	*		C II b3
272	G-7	6層	*	*	*	(斜位の細い刻み)	*	同一個体	
273	C-6~8	5層	胴部	*	なし	・曲線文・梯子状文(斜位の細い刻み)・縄文(LR)	*		
274	I-8-9	5層	*	*	*	・梯子状文・液状文・平行線文・縄文(LR)	*		
275	H-7	5層	*	*	*	・梯子状文・縄文(付加条) R < 上 ^R	*		
276	H-8-9	5層	*	*	*	・液状文・縄文(LRr)	*		C II b4



第23図 縄文土器(20)

No.	地区層位	部位	繊維	口唇部	外	面	内面	その他	分類
277	H-8 6b層	口縁部-胴部	なし	台状突起	縦粘土紐貼付文・横位平行線文・梯子状文・平行曲線文・縄文(L,Rr)		ミガキ		C II b3
278	I-8-9 5層	口縁部	○	なし	○	横位波状文・縄文(RL)	○	剥落	C II b4
279	I-8-9 5層	胴部	○	○	○	○	○		○
280	I-8-9 7層	○	○	○	○	○	○		○
281	H-8-9 7層	○	○	○	○	○	○		○
282	H-6 6層	口縁部	○	台状突起・剣状文	ミガキ		ナデ		C I
283	I-7 5層	○	○	粘土紐貼付による 尾端一枚の小突起	○		ミガキ		○
284	I-8-9 5層	○	○	○	○		○		○

底部資料

底部資料はその形態や胎土に繊維を含むか含まないかによって大きくA・B両群に分類することができる。A・B両群はさらに細部の形態や施文技法の違いによって細分される。

A群土器

胎土に繊維を含むもので、形態的には丸底のもの、丸底風の小さな平底をもつもの、平底のものなどがあり、平底には揚底風のもの、底部外縁がはり出すものなどがあるが、丸底のものが1点しかないため、ここでは主として胴部外面下端と底部外面への施文の違いによって分類する。

A I類 (第24図、1～9)

胴部下端や底部の外面に刺突文や爪形文などが施文されるものである。施文部位の違いによってa～bに2分できる。

a (1～8) 胴部下端と底部の下端に刺突文や爪形文が施文されるもので小さな平底(1～4)と平底(5・6)がある。3・4は若干揚底風である。1～3は先端の角ばる棒状工具によって連続刺突が施されている。1は胴部にRLの縄文が施されているが、胴部下端には横位と斜位の連続刺突が施されている。底部には外周に沿うように刺突が施されている。2は胴部下端に1列、底部に円形に1列の連続刺突が施されている。胴部にはRLとLRの、底部にはLRの縄文が施文されている。3は胴部下端に横位に数列、底部に同心円状に4列の連続刺突が施される。4は胴部に結束された羽状縄文が施文され、胴部下端と底部には縄文原体の末端による刺突が施されている。5は半載竹管により胴部下端に2列、底部に同心円状に数列の刺突が施されている。6は半載竹管で平行沈線を胴部では横位に、底部では同心円状に密に施文し、沈線上に連続する爪形文を施すものである。底部にはコンパス文も施されている。口縁部資料55と同一個体である。

7・8は胴部下端の外面に2列の爪形文が施されるが、底部を欠いたり、磨滅によって底部の施文の明らかでないものである。地文は7がRL、8は結束された羽状縄文である。7は底部外縁がはり出している。

b (9) 底部外面にだけ刺突が施されるものである。揚げ底風の底部で、底部外面には平行施文器具によって外周を一巡する刺突文が施され、その内に相対する弧状の刺突と放射状の刺突が施されている。胴部にはLRの縄文が施文されている。

A II類 (第24・25図、10～15)

胴部に施文された地文が底部外面にも施文されるものである。底部の形態からa～cに細分できる。

a (10) 丸底のものである。胴部と底部の外面に結束された羽状縄文が施されている。

b (11~13) 比較的小さな平底のものである。11は丸底風の底部で底部外縁がわずかにはり出している。12にもわずかなはり出しが認められる。13は丸底風のものではり出しは認められない。12には結束された羽状縄文が、11・13にはLRとRLが施文されている。

c (14・15) 揚げ底風の底部をもつものである。14の底部外縁はり出しているが、15ははり出しが顕著ではない。14には結束された羽状縄文が、15には結束されない羽状縄文が施文されるが、15の底部は小破片のためRLしか認められない。

AⅢ類 (第25図、16~18)

底部外面に縄文や刺突文などが認められないものである。a・bに2分できる。

a (16・17) 丸底風の小さな底部のものである。16は胴部施文は不明で、17はLRが施文されている。いずれも底部外面は無文となっている。

b (18) 揚げ底風の底部をもつもので、底部外縁がわずかにはり出す。胴部にはRLの縄文が施文されるが、底部外面はきれいにナデ調整され無文となっている。

B群土器

胎土に繊維を含まないものである。A群と比較するとA群より大きな平底をもつ。底部資料B群は量的には多いが、形態や器面調整などにあまり差異はないため形態の違いによって2分し、特徴的なものを図示するとどめた。また、木葉痕や網代痕などの圧痕を底部外面に有するものは皆無である。

B I類 (第25図、19)

底部外縁がわずかにはり出すものである。胴部下端や底部の外面にはていねいなナデ調整が施されている。胴部の地文はRLである。

B II類 (第25図、20・21)

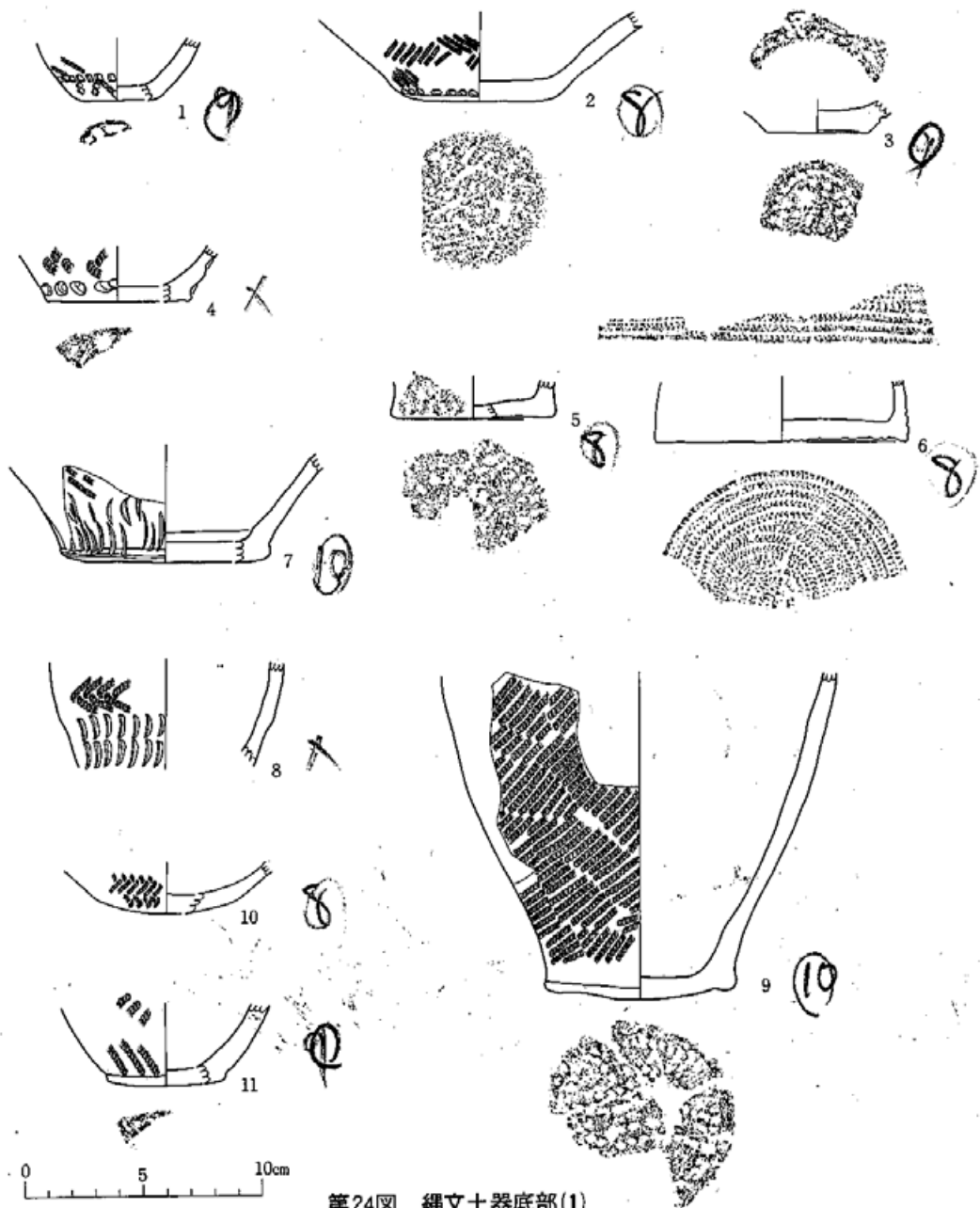
底部外縁がはり出さないものである。20は胴部下端の外面に軽いケズリが横方向に加えられ底部外面はていねいなナデ調整が施されている。胴部の地文はLR rである。21は胴部下端の外面に縦方向のミガキ調整が施され、底部外面にはナデ調整が加えられている。

b. 弥生土器

堆積層5層を中心に少量の弥生土器が出土している。小破片が多く器形の明らかなものは少ない。また、既して保存は不良である。弥生土器は施文文様の有無によって次のような分類が可能である。

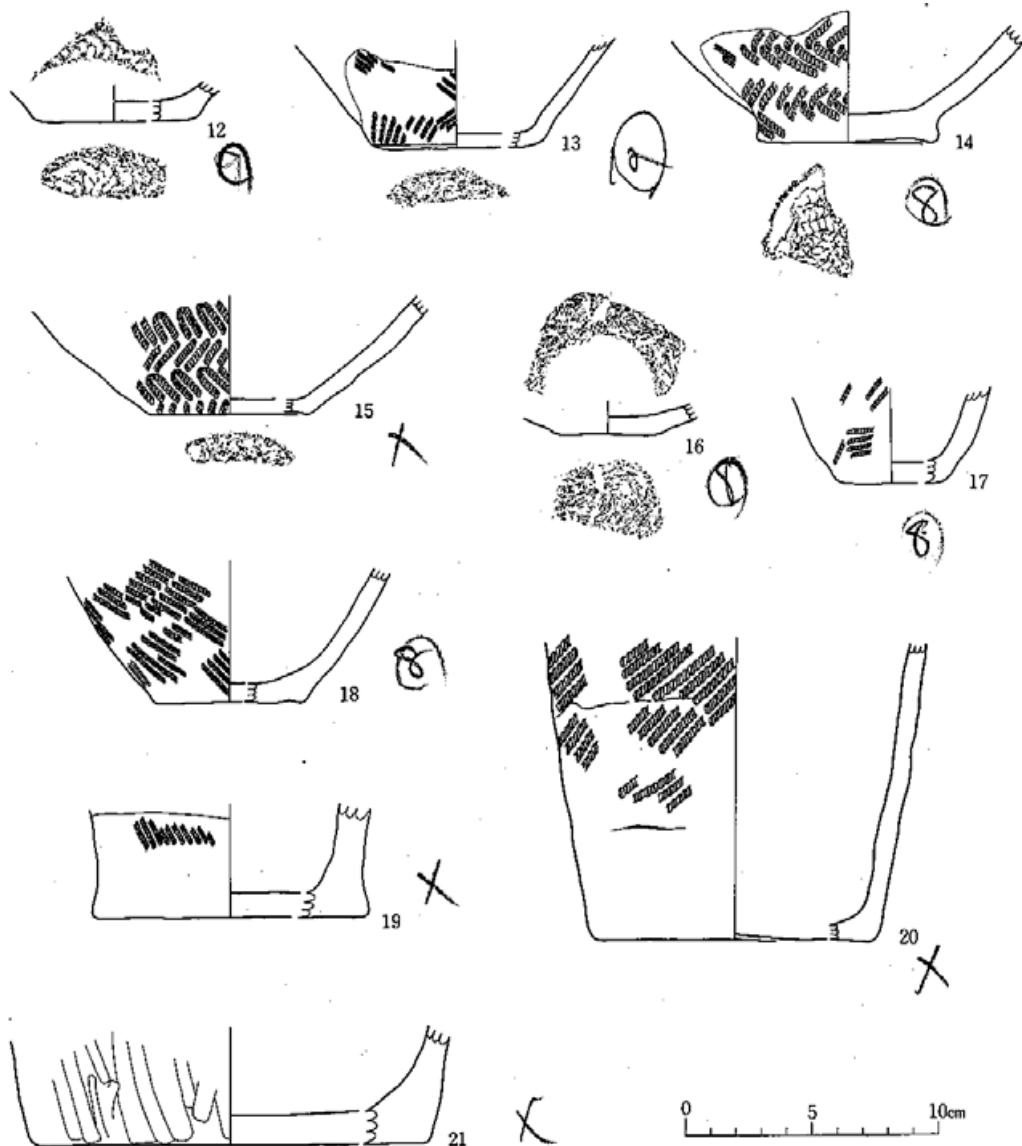
第1類 (第26・27図、1~16)

幅の狭い平行施文具を使用した平行沈線による文様をもつものである。平行沈線の幅は2~3.5mmで、文様構成の違いによりa~cに細分できる。



第24図 縄文土器底部(1)

No.	地区層位	編組	外 面		内 面	そ の 他	分 類
			胴 部	底 部			
1	G-6-7 9層	含む	縄文 (RL)・連続刺突文	連続刺突文	ナデ		A I a
2	G-6 8層	〃	縄文 (RL・LR)・連続刺突文	縄文 (LR)・連続刺突文	ミガキ		〃
3	F-8 9層	〃	連続刺突文	連続刺突文			〃
4	I-8-9 5層	〃	羽状縄文 (LR×RL)・連続刺突文	連続刺突文		原体末端	〃
5	G-6-7 8層	〃	連続刺突文	連続刺突文	ナデ	半截竹管	〃
6	G-8 8層	〃	平行沈線・連続爪形文	平行沈線・連続爪形文・コンパス文	〃		〃
7	G-7 10層	〃	縄文 (RL)・爪形文	不明	〃		〃
8	F-8 6層	〃	羽状縄丸 (LR×RL)・爪形文		ミガキ		〃
9	G-7 10層	〃	縄文 (LR)	連続刺突文	〃		A I b
10	G-6-7 8層	〃	羽状縄文 (RL×LR)	不明	〃	丸底	A II a
11	H-6: 9層	〃	羽状縄文 (RL・LR)	有 (不明)	不明		A II b



第25図 縄文土器底部(2)

No.	地区層位	編織	外 面		内 面	そ の 他	分類
			脣 部	底 部			
12	H-8 9層	含む	羽状縄文 (RL×LR)	羽状縄文 (RL×LR)	ミガキ		A II b
13	H-8 12層	○	○ (RL・LR)	縄文 (LR)	ナデ		+
14	F-8 8層	○	○ (LR×RL)	○ (RL)	ミガキ		A II c
15	F-8 6b層	○	○ (RL・LR)	○ (RL)	+		+
16	F-8 8層	+	不明	不明	ナデ		A II a
17	F-8 8層	○	縄文 (LR)	ナデ	+		+
18	G-6-7 8層	○	○ (RL)	○	○		A II b
19	H-6 7層	無	○ (RL) ナデ	○	+		B I
20	H-7-8 7層	○	○ (LR) ミガキ	○	ミガキ		B II
21	H-8-9 6b層	○	ミガキ	ミガキ	+		+

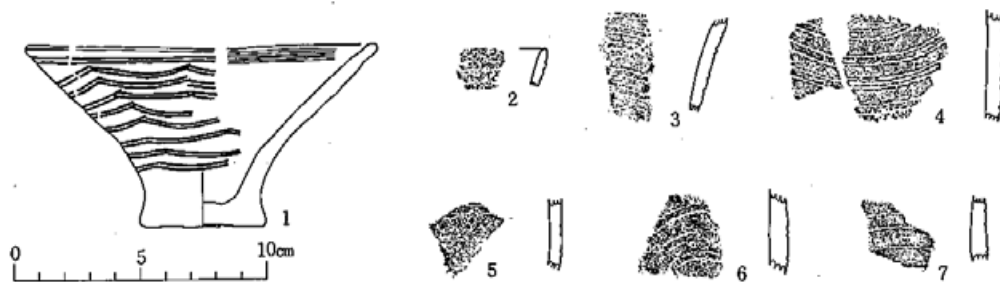
a (1~10) 平行沈線によって連弧文や円文などの曲線文が施されるものである。1~3は浅鉢で、他は器形の不明なものである。地文の施文されるものはない。1は浅鉢もしくは蓋で、口縁部に横位の平行沈線を1条巡らせ、その下に横位に連続する下向弧状文が8段重層して施されている。2は浅鉢の口縁部で、横位平行線文と弧状文が施されている。3~10は胴部破片で、2~3mm幅の平行沈線によって弧状文や同心円状文が施される。各平行沈線間は比較的間隔をもって施文されている。

b (11~14) 平行沈線によって斜行する直線的な文様が施されるものである。器形の明らかなものはないが、11・14は壺胴部上半の破片かも知れない。11は並走する幅の狭い平行沈線によって山形文に近い文様が施される。12は横位平行沈線文の下に山形文が施されている。14は横位と斜位の、14は斜位の平行沈線文が施されるもので、13・14の平行施文具の幅は4mm弱で他に比してやや幅が広い。

c (15・16) 平行沈線が横位に施されるものである。15は壺頸部の破片で、2条の平行沈線が施されている。16は1条の平行沈線が施されるもので、地文に斜行縄文(LR)が施されている。

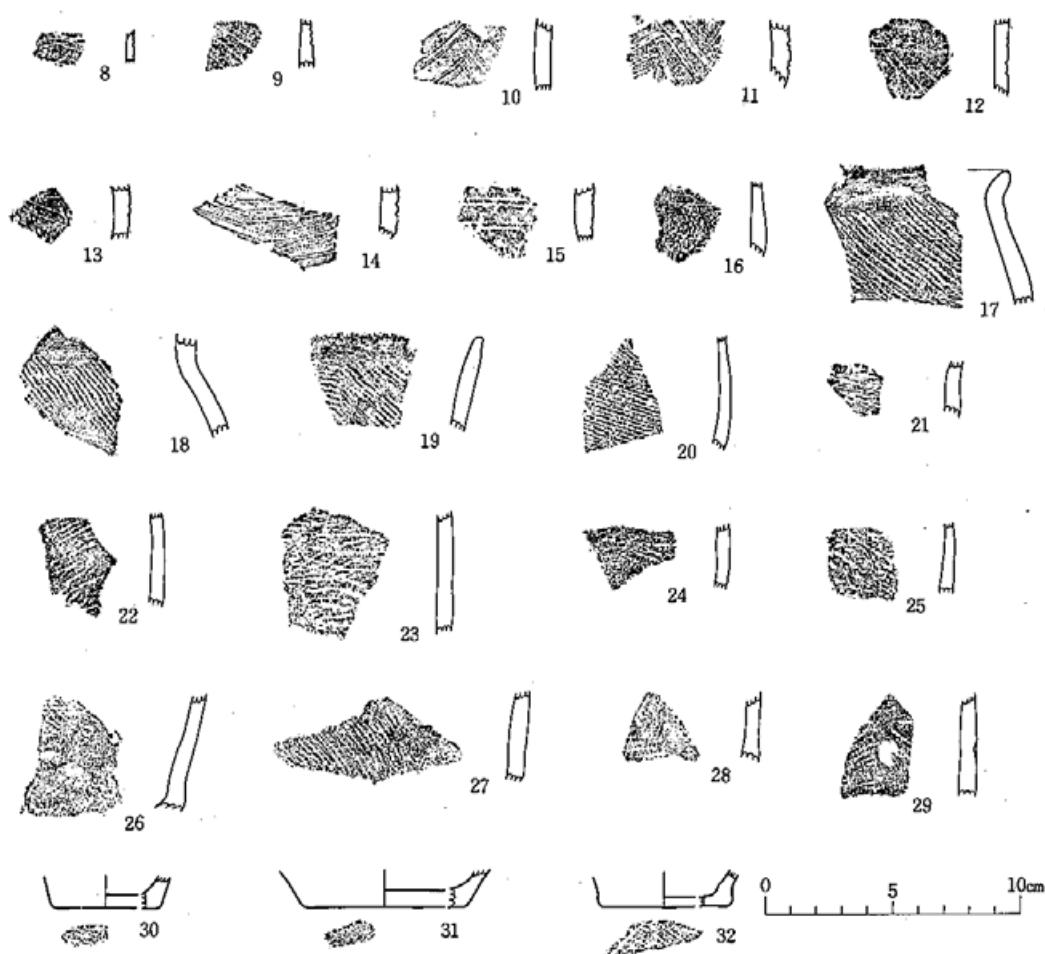
第2類 (第27図、17~32)

文様をもたず地文だけが施文されるものである。17~19は甕の口縁部で、他の器形は不明である。17・18は同一の器形で、口縁部は外反するが短く、胴部上半に最大径をもつ。口頸部には横ナデが施され、横ナデ施文後撚糸文(R)が胴部に施文されている。19は地文(撚糸文r)施文が口縁部にも及ぶものである。20~29は胴部破片で、20~26は撚糸文(R)、27は撚糸文(r)、28・29は縄文(LR)が施文されている。25は底部近くの破片で、胴部下半はミガキ調整による無文帯となっている。30~32は底部破片で、30・31の底部外面には布目痕が、32には木葉痕が認められる。



第26図 弥生土器(1)

No.	地区	層位	部位	外 面	内 面	その他	分類
1	I-8-9	5層		平行沈線文	ナデ	浅鉢か蓋	第1類a
2	C-7	6層	口縁部	*		浅鉢	*
3	I-7	1層	胴部	*		*	*
4	I-8	5層	*	*			*
5	H-8	6a層	*	*			*
6	H-8	5層	*	*			*
7	H-8	5層	*	*			*



第27図 弥生土器(2)

No	地区	層位	部位	外	内	面	その他	分類
8	H-6-7	5層	胴部	平行沈線文				第1類 a
9	G-8	5層	*	*				*
10	H-9	6層	*	*				*
11	C-8-9	5層	*	*			蓋?	第1類 b
12	G-7	6層	*	*				*
13	C-8-9	5層	*	*				*
14	H-8	6a層	*	*			蓋?	*
15	H-8-9	5層	頸部	*			蓋	第1類 c
16	H-6-8	5層	胴部	平行沈線文・縄文(LR)				*
17	H-8	6層	口縁部	横ナデ・燃糸文(R)				第2類
18	I-8-9	5層	頸部	*				*
19	H-8	×層	口縁部	燃糸文(r)				*
20	H-8	5層	胴部	燃糸文(R)				*
21	H-8-9	5層	*	*				*
22	H-8	5層	*	*				*
23	H-7	5層	*	*				*
24	H-6-8	5層	*	*				*
25	H-6-8	5層	*	*				*
26	H-6-7	5層	*	*				*
27	H-6-7	5層	*	*	(r)			*
28	H-6-7	5層	*	縄文(LR)				*
29	F-7	5層	*	*				*
30	H-8-9	4層	底部	ミガキ・布目痕				*
31	I-8	×層	*	布目痕				*
32	×	×層	*	木葉痕				*

C. 土師器、須恵器

堆積層5層を中心に比較的多くの土師器と少量の須恵器が出土している（第28図、第14表）。土師器には坏・高坏・壺・甕・甑などの器種があるが、完形品は少なく実測図を作製できたものも少ない。このため、土師器・須恵器は分類を行わず実測図の作成できた資料を中心に各器種ごとに説明を加える。

土師器

坏（第28図1～6、第14表）

図示できたものは6点で、いずれも製作にロクロを使用しないものである。しかし、各坏には器形や調整に違いが認められるので個別に説明する。

1は口縁部が外反し、内面に稜をもつもので体部は丸味をもつ。底部を欠くが、丸底もしくは小さな平底をもつものと思われる。器面調整は口縁内・外面とも横ナデが施されるが、体部のヘラミガキが口縁部まで及んでいる部分もある。体部に内・外面とも横・斜方向のヘラミガキが施されている。

2は口縁部が外傾し、内面に明瞭な稜をもつ。体部は丸味をもち、底部は小さな平底である。器面調整は外面が、口縁部から体部上半にかけて横ナデ、体部は横・斜方向のヘラケズリ後、ヘラミガキが施され、底部はヘラケズリされている。内面は口縁部に横ナデと部分的にヘラミガキが施され、体部から底部にかけては縦・横方向のヘラミガキが施されている。

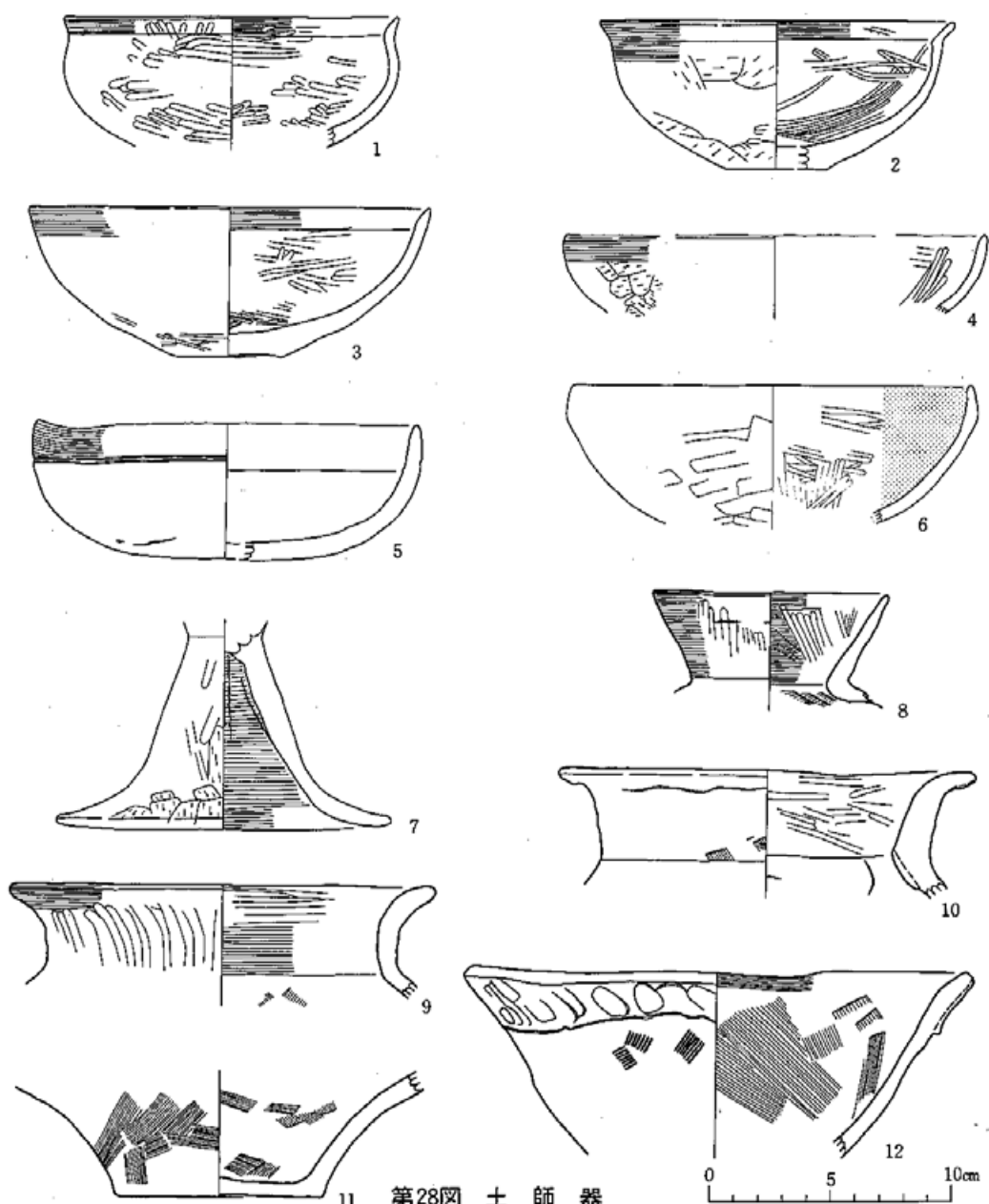
3は口縁部から体部まで丸味をもって外傾し、口縁部は直立気味になり、内面に弱い稜をもつ。底部は小さな平底である。器面調整は、外面は口縁部に横ナデが、体部と底部にはヘラケズリ後、ヘラミガキが施されている。内面は口縁部に横ナデ、体部から底部に横・斜方向のヘラミガキが施されている。

4は体部下半から底部を欠くが、3と同様の器形をもち、口縁部はほぼ直立する。器面調整は外面では、口縁部に横ナデが、体部には斜方向のヘラケズリが施され、内面には口縁部から体部に縦・斜方向のヘラミガキが施される。

5は丸底気味の底部をもち、体部は強く内湾し、口縁部は直立する器形で、口縁部と体部の境には沈線が1条巡っている。器面調整は、外面の口縁部に横ナデが観察できるが、他は磨滅が著しく不明である。

6は底部を欠くもので、体部はわずかに丸味をもって外傾し、口縁部はやや内傾する。器面調整は外面では、口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリが施された後、ヘラミガキやナデが施されている。内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は口縁部から体部上半までが横方向、底部は縦方向である。

坏には以上の図示資料の他に第14表の破片集計表に示したように、内外両面に丹塗りされる



11 第28図 土師器

番号	出土層位	種別	器面						口径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)
			口縁部	胴部	底部	内縁部	胴部	底部				
1	G-8-9 5層	土師器・杯	横ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ		横ナデ	ヘラミガキ	13.7		(5.4)		
2	G-8-9 5層	〃	横ナデ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラケズリ	横ナデ	ヘラミガキ	14.5		4.2	6.2	
3	H-8-9 5層	〃	横ナデ	ヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	横ナデ	ヘラミガキ	16.4		4.4	6.2	
4	G-7-6 X	〃	横ナデ	ヘラケズリ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	17.1			(3.2)	
5	I-9 4-5層	〃	横ナデ	ヘラミガキ				15.6			5.6	
6	X X	〃	ヘラケズリ 横ナデ	ヘラミガキ		ヘラミガキ	黒色鉄鏝	16.3			(5.7)	
7	H-9 5層	〃 高杯 (脚部)	ヘラケズリ 横ナデ	ヘラミガキ		シボリ目横ナデ				13.7	(8.6)	
8	H-7 5層	〃 小壺	横ナデ ヘラミガキ (丹塗り)			横ナデ (丹塗り)		9.6			(4.2)	
9	H-8 5層	〃 壺	横ナデ ヘラミガキ			ヘラミガキ	ナデ	7.2			(4.2)	
10	H-9 5層	〃	横ナデ			ヘラミガキ	刷毛目	16.8			(4.8)	
11	H-8 6層	〃		ナデ	ナデ	ナデ				8.2	(4.5)	
12	H-8 5層	〃 甕	ナデ(オウエ)	刷毛目		横ナデ	ヘラナデ	20.2			(7.5)	

ものや、製作にロクロを使用し、底部を回転糸切り技法で切り離しているものなどがある。

高坏（第28図7）

図示した坏部を欠く脚部だけのものが1点ある。脚部は坏部との接合部から下半に向って開く器形で、下半は大きく外反している。器面調整は外面ではヘラケズリ後、ヘラミガキが施される。内面は全体に横ナデが施されているが、上半部にはシボリ目が残っている。

壺（第28図8、第14表）

小形のものと同大形のものがある。8は小形のもので頸部が強く屈曲し、口縁部は直線的に外傾する。器面調整は口縁部の内外両面に横ナデが施された後、ヘラミガキが施されている。体部は内面にヘラナデがみられる。また、内外両面ともに丹塗りが認められる。

甕（第28図9～11、第14表）

土師器では最も出土量が多いが、器形の明らかなものはない。製作に際してロクロを使用しないものを使用するものがあり、前者が多い。また、ロクロ不使用のものには朱塗りのものも認められる。

9、10は頸部で屈曲し、口縁部が外反する器形の口縁部破片で、体部以下を欠いているが、体部は丸味をもつものと思われる。9の器面調整は口縁部外面に横ナデ後、縦位のヘラミガキが施される。内面は口縁部に横ナデ後、ヘラミガキが、体部にはナデが施される。10の口縁部外面はオサエ後ヘラナデが、内面はヘラミガキが施される。内面の頸部にもオサエの痕跡が残っている。11は甕の体部下半から底部にかけての破片で、体部は丸味をもつものと思われる。器面調整は体部内外面、底部内外面ともにナデ調整である。

甌（第28図12）

体部下半以下を欠くが、単孔式の甌であると思われる。鉢形の器形で、口縁部は複合口縁となっている。器面調整は外面の複合口縁口縁部に指頭の圧痕（オサエ）が施され、体部外面には刷毛目が施される。口唇部から口縁部内面には横ナデが、体部内面にはヘラナデが施されている。

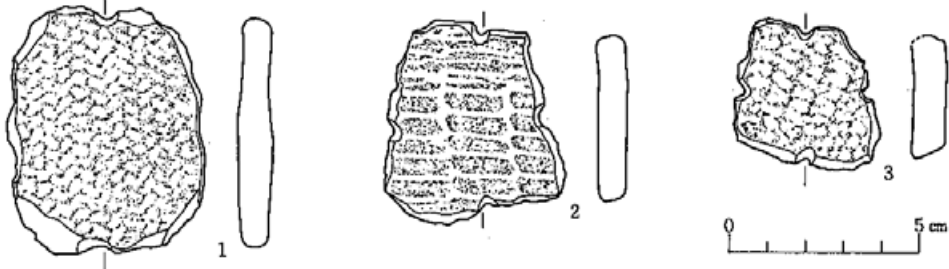
須恵器（第14表）

坏底部、甕体部・底部の破片が各1点ずつ堆積層5層から出土している。坏・甕ともに底部は回転糸切り技法によって切り離されたものである。

D. その他の土製品（第29図1～3）

その他の土製品としては土錘が3点ある。いずれも上部貝層であるヤマトシジミ貝層から出土したもので、土器破片に紐懸けの切れ目をつけた土器片錘である。1は2ヶ所、2・3は4ヶ所の切れ目をもつ。1・2は胎土に繊維を含み、3は含んでいない。1は組紐回転文、2は整った葺瓦状撚糸文（L）、3は縄文（LR）が施文されている。重量は1が39.1g、2が25.6g

3が18.0gである。



第29図 土錘

番号	地区層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	繊維	外面	内面	備考
1	H-6 6a層	65.5	51.0	9.0	39.1	有	組紐回転文	ナ ア	刻目 2ヶ所
2	G-8 6b層	54.0	48.0	8.0	25.6	有(少)	帯板状燃糸文	ミガキ	◇ 4ヶ所
3	H-7 6a層	37.5	38.0	9.0	18.0	無	RL	◇	◇ 4ヶ所

(2) 石製品

石製品には石鏃・石匕・石錘・石篋・不定形石器・大形打製石器などの剥片石器や石斧などの磨製石器、凹石・敲石・磨石・石皿・石錘などの礫石器や石製垂飾品などがある。この他、剥片石器の素材となった剥片や石核なども多く出土している。

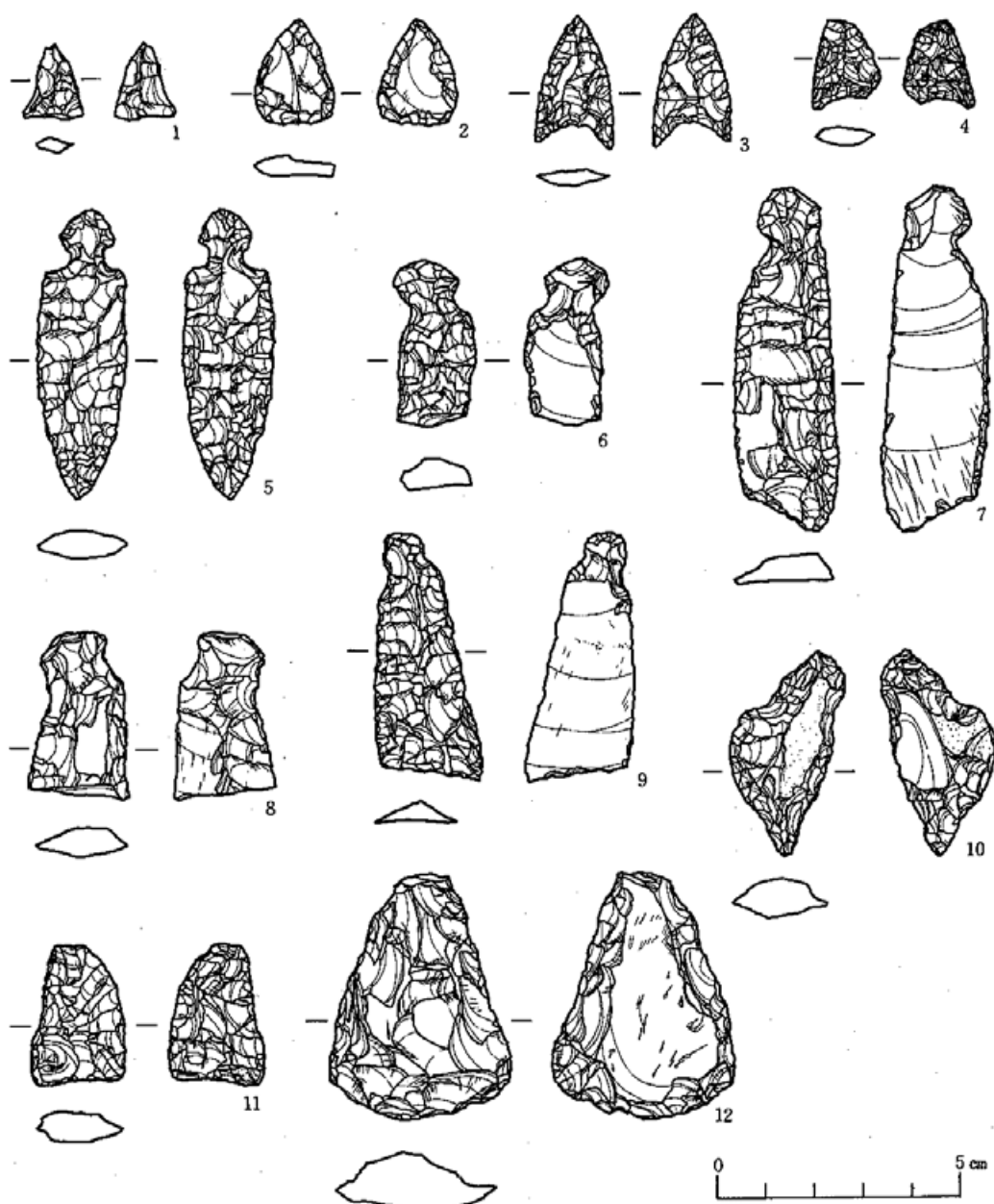
剥片石器

石鏃 (第30図 1～4)

1は黒曜石製で尖端と基部を欠く。両面からの調整剥離はやや雑である。2～4は無茎の石鏃である。2は平基で、両側縁はわずかにふくらむ。調整剥離は両面ともに縁辺にだけ施されている。3・4は基部に抉り込みをもつもので、3の抉り込みは深い。3の両側縁はふくらみをもつ。4は先端と基部の一部を欠損しており、基部の抉り込みは3と比して浅く。両側縁もあまりふくらまない。

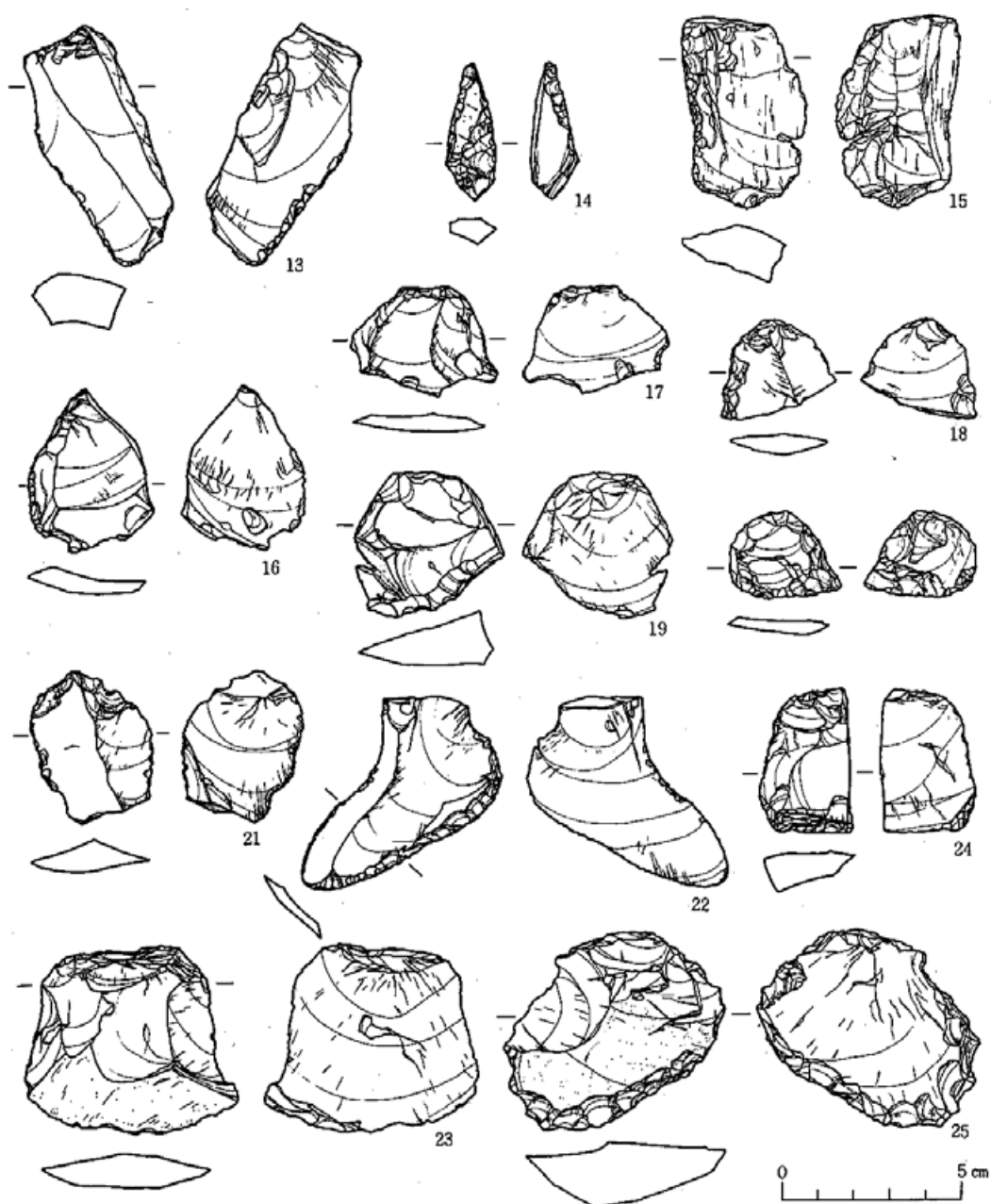
石匕 (第30図 5～9)

いずれも縦長の石匕である。6・8は尖端が欠損し、つまみ部が残るものである。5は背・腹面が不明なほど、全体に調整剥離が加えられるもので、つまみ部の抉り込みは深い。ほぼ左右対称の形態をもち、先端部が尖頭器状になることから石槍の可能性もあると思われる。6～8はわずかな打面を残すもので、その周縁につまみ部を両面から作り出している。6・7は主として背面に調整剥離が加えられており、腹面には6では両側縁に、7では右側縁に小さな調整剥離が施されている。7は末端にも刃部をもつ。8も腹面に1次剥離面を残すが、6・7に比して腹面右側縁に施される調整剥離は大きい。9は打面周辺に丹念な調整剥離が施され、つまみ部を作り出しているため、打面が残らないものである。両側縁と下端に刃部をもつが、調整剥離は背面に集中して施されており、腹面にはつまみ部付近にしか調整剥離は認められない。



第30図 石器 (I)

番号	種別	地区	層位	打面の有無	背面調整	腹面調整	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	石	材	備考
1	石鏃	H-9	6層	—			15.7	12.3	0.50	黒曜石	—	基部欠損
2	石鏃	H-8	6b層	—	縁辺のみ	縁辺のみ	21.6	16.2	1.30	珪質頁岩(一部玉ざい質)		
3	石鏃	H-6	6b層	—			27.9	16.0	0.80	珪質頁岩		
4	石鏃	H-7	8層	—			18.5	13.5	0.85	珪質頁岩		
5	石ヒ	G-6-7	8層	—			59.4	18.3	6.15	珪質頁岩		
6	石ヒ	G-6-7	9層	有			34.2	15.5	3.80	珪質頁岩		半欠品
7	石ヒ	H-6	9層	有		右側縁	70.7	21.3	9.30	珪質頁岩		
8	石ヒ	H-7	10層	有		右側縁	34.6	21.0	5.95	珪質頁岩		半欠品
9	石ヒ	H-8	12層	—		つまみ部のみ	51.0	21.0	5.40	石英安山岩質凝灰岩		
10	石鏢	G-8	8層	—			43.0	21.2	7.30	珪質頁岩		転用品?
11	石鏢	H-8-9	6層	—			29.2	19.3	3.50	珪質頁岩		
12	石鏢	G-8-9	8層	—		縁辺のみ	51.1	37.2	20.85	珪質頁岩		



第31図 石器 (2)

番号	種別	地区	層位	打削の有無	背面調整	腹面調整	長さ(cm)	幅(mm)	重量(g)	石	材	備	考
13	不定形石器	G-8	5層	有	三辺調整	二辺調整	69.1	31.9	36.10	珪質頁岩			
14	*	H-8-9	5層	有	二辺以上調整	一辺以上調整	38.9	13.8	3.45	珪質頁岩			
15	*	I-8-9	5層	有	—	一辺調整	54.0	32.4	28.90	珪質頁岩(一部玉ずい質)			
16	*	I-8-9	5層	有	二辺調整	—	46.7	33.4	9.95	珪質頁岩(一部玉ずい質)			
17	*	I-8-9	5層	有	部分調整	部分調整	31.0	40.6	5.35	珪質頁岩			
18	*	H-6	7層	有	二辺調整	—	26.6	31.6	5.20	珪質頁岩		破損品	
19	*	F-6-7	8層	有	二辺以上調整	—	40.1	41.5	21.60	珪質頁岩			
20	*	G-6-7	8層	有	全体調整	二辺以上調整	24.5	31.4	4.20	珪質頁岩			
21	*	C-6-7	8層	有	一辺調整	一辺調整	42.8	33.9	11.75	珪質頁岩			
22	*	G-6-7	9層	有	三辺調整	—	67.0	42.0	12.00	珪質頁岩			
23	*	G-8	9層	有	—	一辺調整	52.7	59.0	26.15	細粒石英安山岩質凝石岩			
24	*	C-8	9層	有	三辺調整	部分調整	40.4	26.4	12.60	珪質頁岩			
25	*	H-6	9層	有	二辺調整	三辺以上調整	64.7	48.8	55.60	流紋岩			

石錐 (第30図10)

両面に風化の度合の異なる剥離面をもつことから、転用品か再剥離を加えたものと思われる。つまみ部には両面から調整剥離が施されるが不整形をしており、つまみ部から錐部へ移行する部分には深い抉りが入っている。錐部は短く、断面は不完全な菱形を呈している。

石篋 (第30図11・12)

縦長で下辺に向って開く形態をもつ。11は両面からの調整剥離が上・下両端と両側縁の4辺に施される小形のものである。12は両側縁と下端の3辺に背・腹両面から調整剥離が施されるもので、腹面への剥離は小さい。両側縁の刃部は直線的であるが、下辺は弧状となっている。

不定形石器 (第31・32図13~42)

剥片に調整剥離が施されるもので定形的でないものや、剥片に使用痕跡と思われる小さな剥離をもつものを不定形石器として一括した。不定形石器には1次剥離の打面を残すもの(13~27)と打面が残らないもの(28~42)とがある。

13~27は打面の残るもので、25が自然面を打面としている他は、調整された打面を有している。13~16・18・19・27は縦長の剥片を、17・20~23・25・26は横長の剥片を素材としている。調整剥離は背面にだけ施されるもの(16・18・19・22・26)、腹面にだけ施されるもの(15・23)、背・腹両面に施されるもの(13・14・17・20・21・24・25・27)などがあり、一部を調整したもの(17・26)、一辺を調整したもの(15・21・23)、2辺以上を調整したもの(13・14・16~18・20・22・24・25・27)などがある。20は形態的には石鏃に似ており、背面の縁辺全周を調整しているが、打面の一部と腹面の一片には調整が及んでいない。

28~42は打面の残らないもので、調整剥離や破損により、背・腹面の明らかでないものもある(28・34・39)。また、素材となった剥片が縦長のものであるか、横長のものであるか不明なものも多い。36・40は背面に。30・31・33・42は腹面に、28・29・32・34・35・37~39・41は両面に調整剥離が施されるもので、一部を調整したもの(31・33)、一辺を調整したもの(30・34・36・40)、二辺以上を調整したもの(28・29・32・35・37~39・41・42)などがある。二辺以上を調整するものには28のように調整が縁辺を全周するものや、29のように石篋に近い形をもつものなどがある。

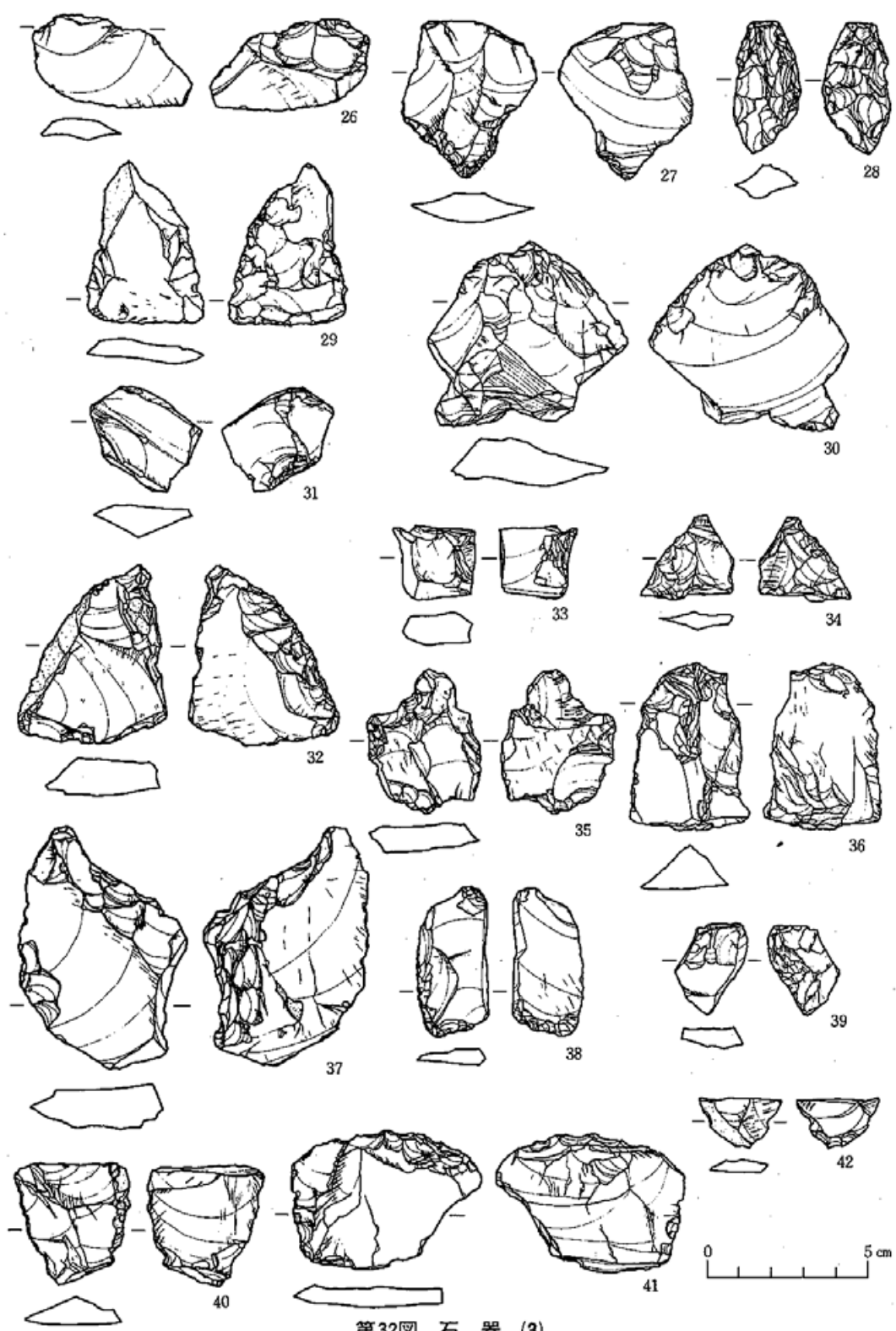
大形打製石器 (第33図43)

両端を欠くが、大形の剥片の側縁に両面からの、反対の側縁に片面からの調整剥離を施し、刃部を形成したものである。

磨製石器

磨製石器には6点の磨製石斧と形態の明らかでないもの1点がある。

磨製石斧 (第33図・44~49)



第32图 石器 (3)

第32図 石器 (3)

番号	種別	地区層位	打削の有無	背面調整	腹面調整	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	石	材	備考
26	不定形石器	H-7・8 9層	有	部分調整	—	27.4	45.8	6.65	珪質頁岩		
27	*	H-8・9 10層	有	二辺調整	部分調整	50.5	42.5	14.30	珪質頁岩		
28	*	G-5 3層	—	全面調整	全面調整	41.8	19.9	7.30	流紋岩		
29	*	H-8・9 X	—	三辺調整	三辺調整	50.4	36.2	21.10	珪質頁岩		
30	*	F-6・7 X	—	—	一辺調整	58.3	62.2	56.70	凝灰岩質頁岩(一部玉札・質)		
31	*	H-6 X	—	—	—	25.4	34.3	8.20	珪質頁岩		
32	*	K-4 1層	—	二辺調整	二辺調整	56.5	46.8	30.40	珪質頁岩		
33	*	G-6・7 8層	—	—	部分調整	22.8	24.0	7.10	珪質頁岩		
34	*	G-6・7 8層	—	一辺調整	一辺調整	26.7	28.9	4.25	珪質頁岩		
35	*	H-7 9層	—	二辺以上調整	二辺以上調整	45.3	34.5	13.00	珪質頁岩		
36	*	H-6 8層	—	一辺調整	—	52.3	36.7	29.60	珪質頁岩		
37	*	H-6 9層	—	二辺調整	二辺調整	75.0	51.0	55.50	珪質頁岩		
38	*	H-7 9層	—	二辺以上調整	一辺調整	46.0	21.5	7.65	珪質頁岩		
39	*	H-7 9層	—	二辺以上調整	二辺以上調整	28.2	21.5	3.25	流紋岩		
40	*	G-6 10層	—	一辺調整	—	37.5	35.3	12.70	珪質頁岩		
41	*	G-6 10層	—	二辺以上調整	二辺調整	43.3	58.6	22.90	珪質頁岩		
42	*	G-7 10層	—	—	二辺以上調整	15.5	25.4	1.65	珪質頁岩		

すべて破損品が破片で完形品がないため、全体的な形態を知ることでできるものはない。44・45・48が比較的大型のもので、46・49が小型のものである。44は多孔質安山岩製で、刃部だけが残るものである。刃部は使用のためか完全に潰れている。45・46は頭部破片である。頭部から刃部に向かって広くなる形をもつと思われる。全体的によく研磨されており、研磨面の境は明瞭である。45は46に比して肉厚のもので、頭頂には研磨されていない部分がある。47は小破片であるが研磨の状態などから石斧の破片と思われる。48は頭部と刃部の大部分を欠いているが、扁平な礫を研磨して石斧としたものと思われる。全体的に研磨されているが、刃部で著しい。刃部は使用によるためか大きく剥落している。49は石英安山岩製の小型の石斧で、4つに剥離して出土した。頭部から刃部に向かってやや丸味をもつて開く形態で扁平である。刃部の形態は不明である。

形態不明の磨製石器 (第33図・50)

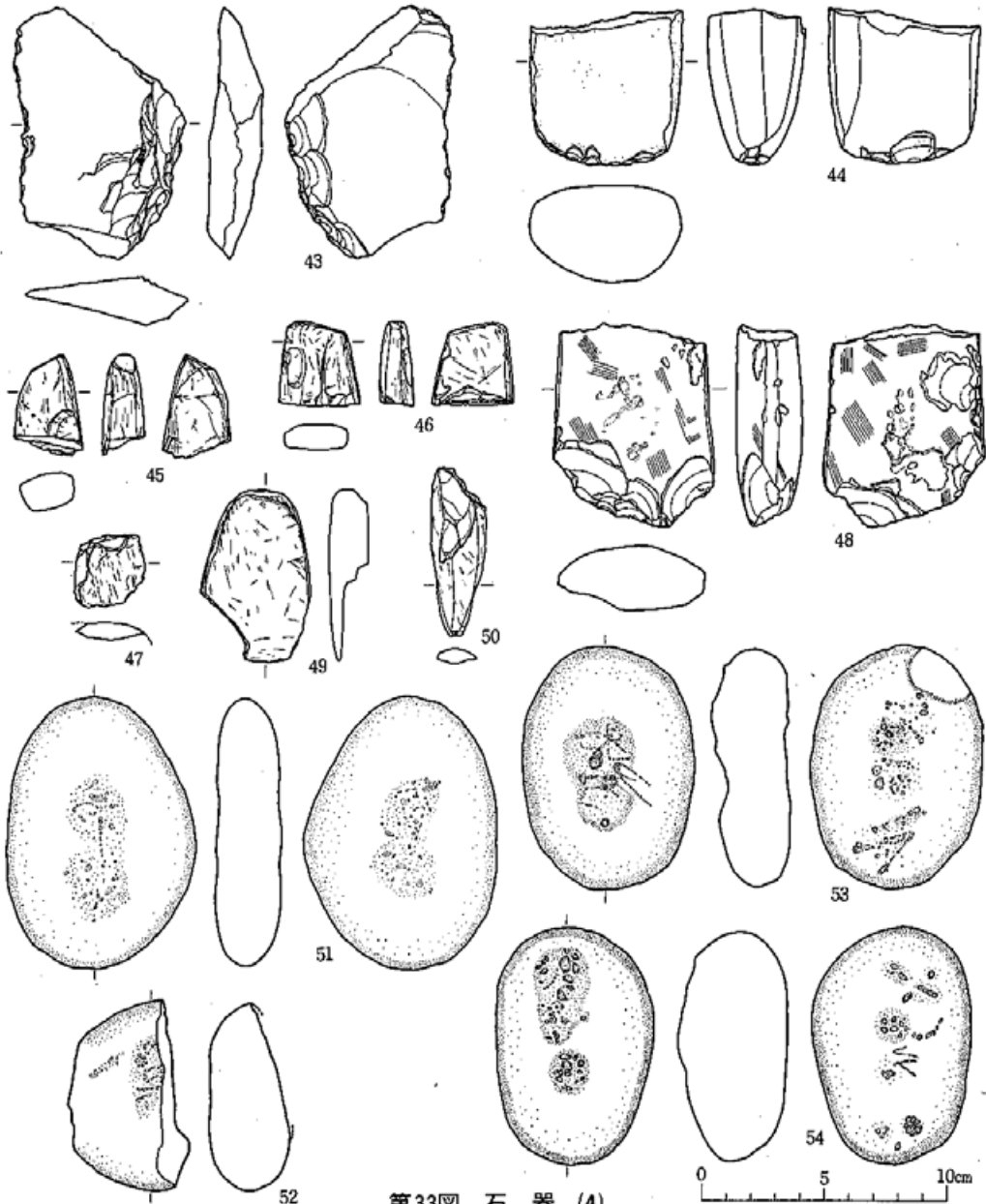
半欠品のため全体の形態が不明のものである。破損部を除いてよく研磨されており、あるいは石剣の破片である可能性がある。

礫石器

礫を素材とする石器で量的にも多く出土している。使用痕跡の違いなどによって凹石、敲石、磨石、石皿、石錘などに類別することができる。

凹石 (第33・34図、51～64)

円礫の片面もしくは両面に凹みをもつものである。51・53・54・62・63以外は破損しているため凹みの数は明確ではないが、1～4個の凹みをもつものと思われる。片面に3個の凹みを有している例(55・64)もある。凹みはすべて敲打痕が集中したために形成されたものと思われ、凹みの周辺に広く敲打痕をもつもの(51・53・56・58)や凹みの平面形が円形ではなく不定なもの(51・52・54・57・59・60・64)などがある。また、凹みの断面形には浅い皿状のも



第33図 石器 (4)

番号	種別	地区層位	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量 (g)	石	材	備考
43	大形打製石器	G-6-7 8層	13.8	6.1	2.1	121.7	石英安山岩		上・下先端欠損
44	磨製石斧	I- x 層	(6.3)	6.2	4.0	195.1	安山岩		頭部欠損
45	◇	G-8 4層	(4.1)	2.8	1.8	29.3	石英安山岩質凝灰岩		頭部
46	◇	I-8 4層	(3.4)	3.3	1.4	24.7	石英安山岩質凝灰岩		頭部
47	◇	G-7 6P層	(3.0)	(2.8)	(0.7)	7.0	石英安山岩質凝灰岩		破片
48	◇	H-9 6層	(8.3)	6.6	2.7	228.0	石英安山岩		礫使用
49	◇	G-6 8層	(7.0)	4.5	1.6	50.0	石英安山岩		
50	石剣?	H-7 5層	(6.9)	(2.3)	(0.6)	10.7	石英安山岩質凝灰岩		4面の研磨面
51	凹石	G-8 x 層	11.8	7.8	2.6	405.0	石英安山岩		
52	◇	H-8 5層	7.8	(4.8)	3.3	145.5	石英安山岩		
53	◇	F-6-7 6b層	9.9	7.0	3.1	275.0	石英安山岩		
54	◇	H-8 6b層	9.8	6.5	4.5	345.0	石英安山岩質凝灰岩		側縁敲打痕

の(51・59・60)から、「V」字状の深いもの(53・55・58・62・64)までである。凹石にはさらに側縁にも敲痕による磨滅が認められるもの(54・55・61・62・64)もある。

敲石(第35・36図、65～75)

円礫の上・下面や縁辺に敲打痕をもつものである。65・68・69・74・75は縁辺と上・下両面もしくは片面に敲打痕をもつもので、上・下両面の敲打痕は凹石のように凹みを形成するまでに至らないものである。その他のものは縁辺にだけ敲打痕を有するものである。縁辺にみられる敲打痕には部分的なもの(65～68・75)と連続して一辺ないしは一辺以上に及んでいるもの(69～74・76)とがある。また、敲打痕以外の使用痕としては69・72の片面が磨面となっており、75の両面に粗い擦痕が認められる。

磨石(第36・37図、77～89)

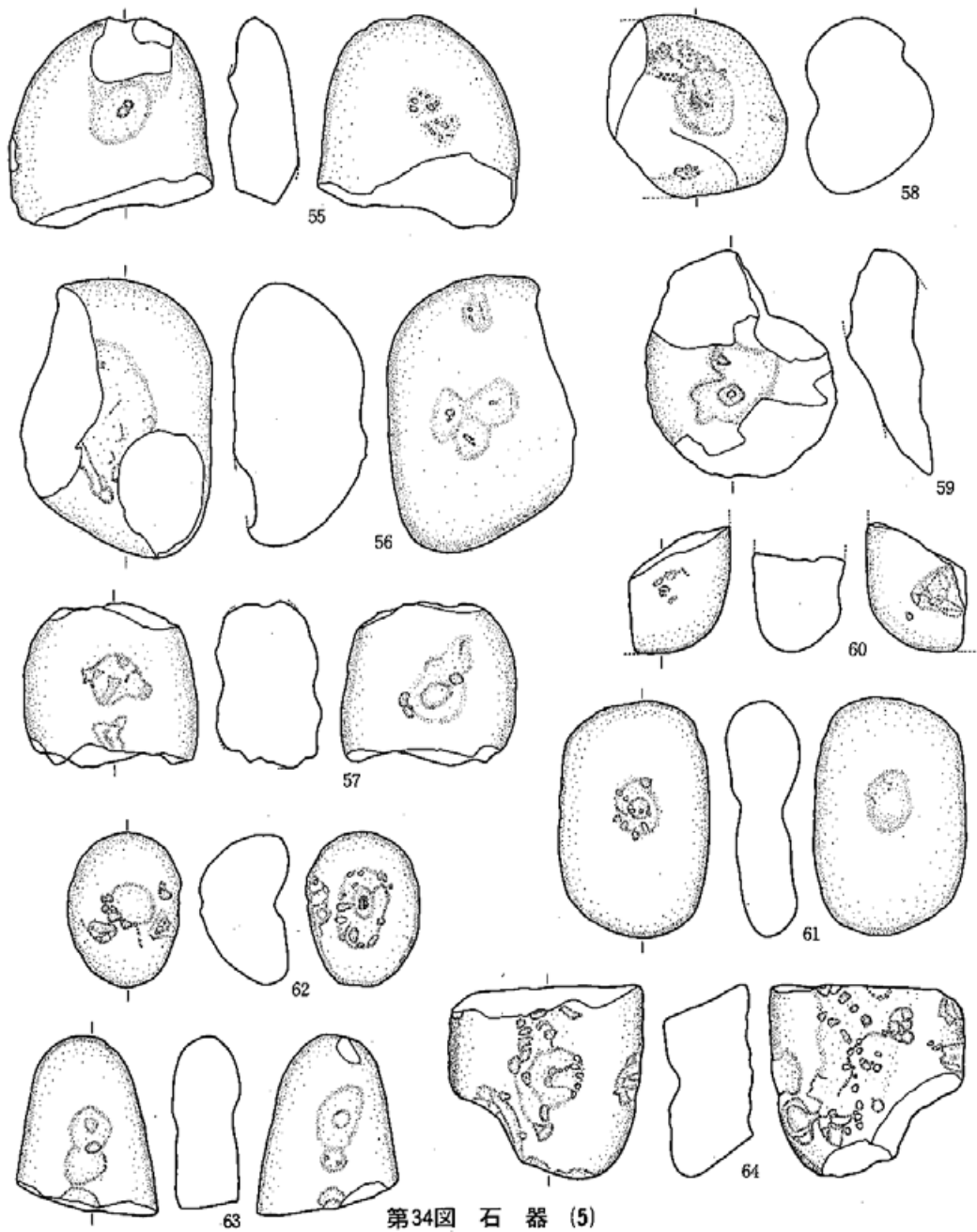
円礫の上・下両面や側縁に研磨痕をもつものである。77～82は縁辺に1～3面の、83・84は片面全体に及ぶ顕著な研磨面を有している。85～88は顕著な研磨面をもたないが、礫全体が研磨されたように磨り減っているものである。89には部分的な研磨痕が認められる。これらの磨石には研磨に伴うと思われる擦痕が観察されるもの(84～84・88)もある。また、研磨以外の使用痕として78～80・86・87に敲打痕が認められる。

石皿(第37図、90～93)

すべて破片であるが、縁や脚を有しないものである。90・93は偏平な礫の片面に、91・92は大型の礫の両面に磨面を有して、90・91・93は磨面に擦痕を伴っている。90・92の磨面は中央部に向ってわずかに窪んでいる。

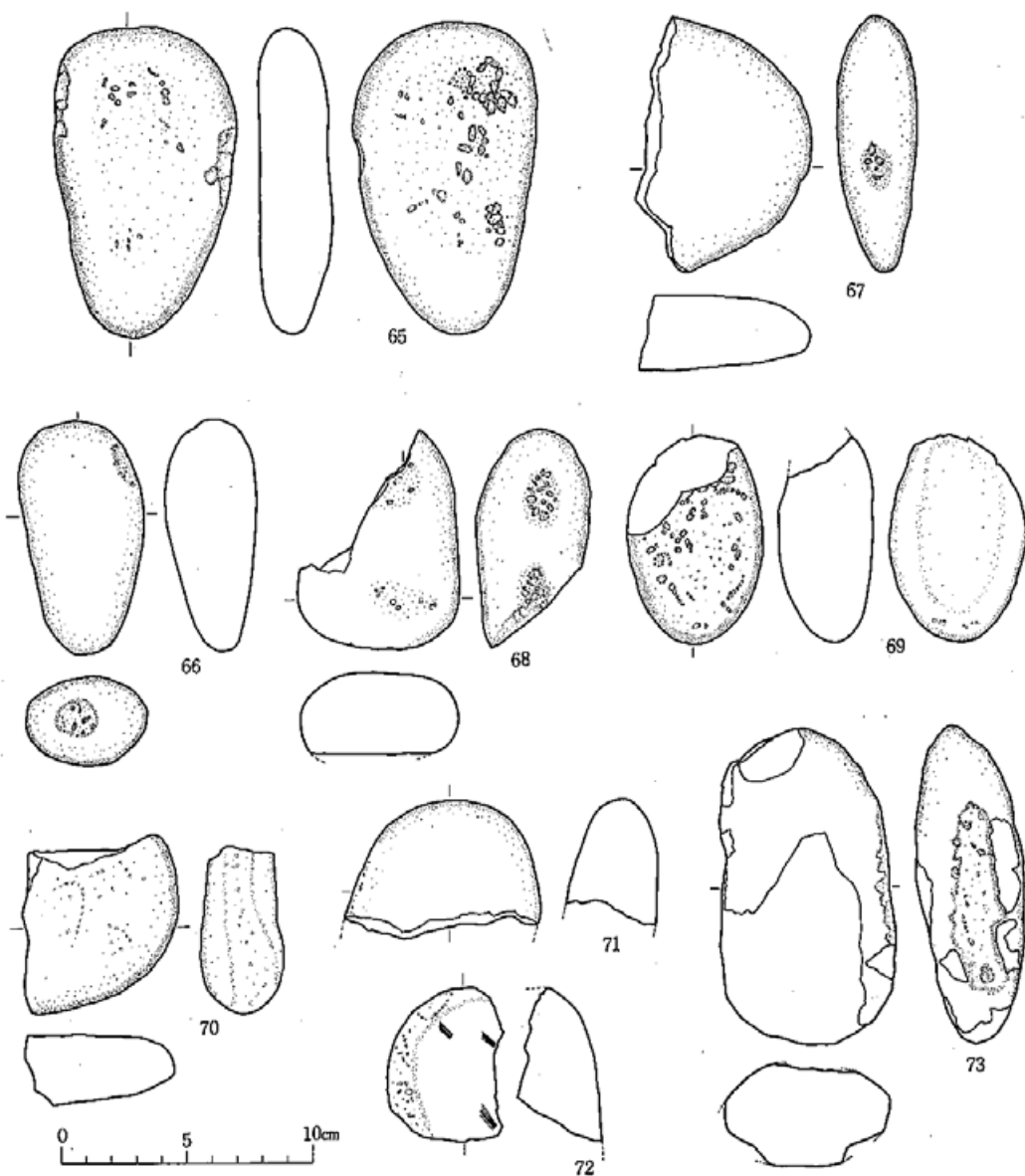
石錘(第38図、94)

石英安山岩質凝灰岩製で、小さく偏平な円礫の上端と下半を欠き、上・下の欠損部に2ヶ所の切り込みを入れたものである。重量は24.3gである。



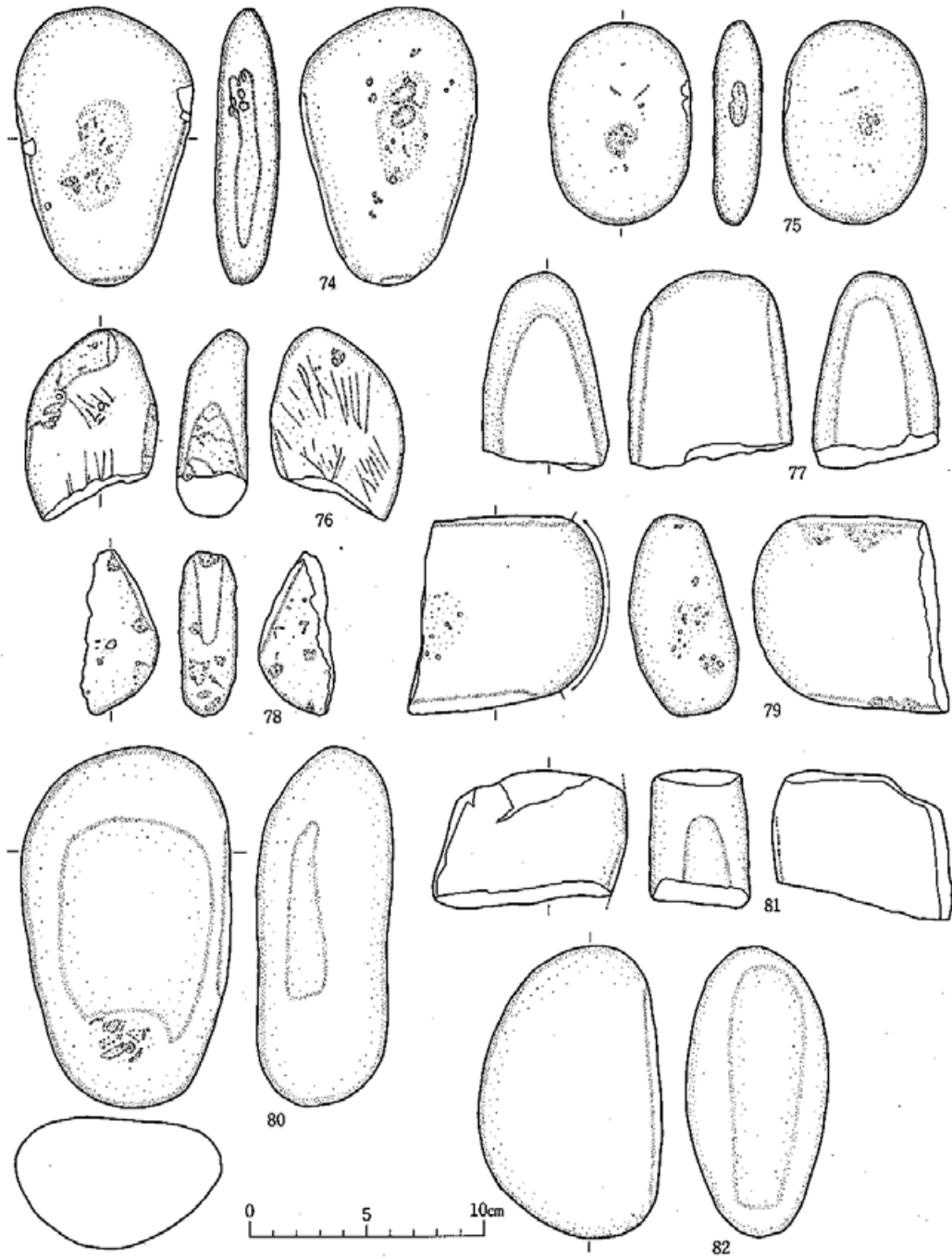
第34図 石器 (5)

番号	種別	地区層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石	材	備考
55	凹石	H-8-9 6b層	(8.9)	8.5	2.8	305.0	石英安山岩質凝灰岩		側縁敲打痕
56	*	C-6-7 6c層	11.8	(7.9)	5.5	822.0	石英安山岩質凝灰岩		
57	*	H-8-9 7層	(7.4)	7.3	4.5	336.0	花崗閃緑岩		
58	*	C-8 7a層	(7.6)	7.7	5.1	340.0	石英安山岩質凝灰岩		
59	*	G-8 8層	(9.6)	(7.9)	(2.8)	208.0	流紋岩質凝灰岩		
60	*	H-6 9層	(5.5)	(4.2)	4.1	104.3	石英安山岩質凝灰岩		
61	*	H-7 9層	10.0	6.4	3.0	236.0	石英安山岩質凝灰岩		側縁敲打痕
62	*	H-7 9層	6.6	4.7	3.5	135.5	石英安山岩質凝灰岩		*
63	*	H-8-9 12層	(7.5)	5.9	2.8	145.8	石英安山岩		
64	*	H-8-9 12層	(8.2)	8.1	4.1	228.0	流紋岩質凝灰岩		側縁敲打痕



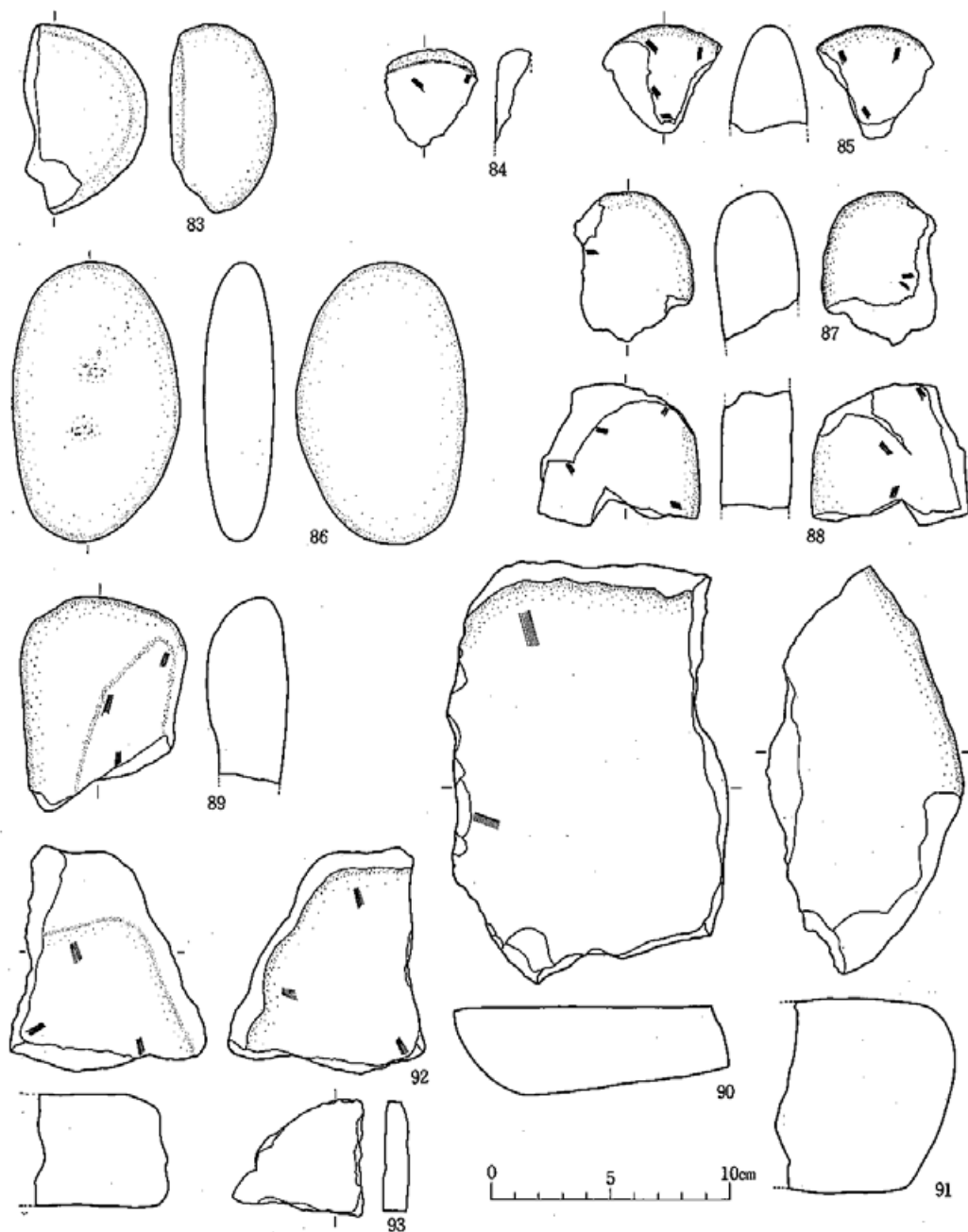
第35圖 石器 (6)

番号	種別	地区層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石	材	備考
65	敲石	F-7 X	12.4	7.2	3.1	362.0	石英安山岩質凝灰岩		
66	〃	G-6-7 2層	9.4	4.8	3.5	210.0	石英斑岩		
67	〃	H-8 6b層	10.2	(6.7)	3.2	265.0	安山岩		
68	〃	G-6-7 6c層	(9.0)	6.4	4.5	204.0	石英安山岩		
69	〃	C-6-7 8層	(8.2)	5.4	3.7	212.0	安山岩		磨面
70	〃	G-7 9層	(7.1)	(6.2)	3.3	168.5	石英安山岩		
71	〃	G-6-7 9層	7.7	(5.1)	3.8	186.2	安山岩		
72	〃	H-6 9層	(6.1)	(4.3)	(3.2)	132.1	安山岩		磨面
73	〃	H-6 9層	12.6	7.0	4.3	424.0	石英安山岩質凝灰岩		



第36図 石器 (7)

番号	種別	地区層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石	材	備考
74	敲石	H-7 9層	11.9	7.5	2.7	324.0	石英安山岩		
75	°	H-8-9 10層	8.7	6.1	2.1	173.0	石英斑岩		
76	°	H-8-9 12層	(8.0)	5.7	3.1	164.5	石英安山岩質凝灰岩		擦痕
77	磨石	G-7 6b層	(8.4)	6.9	5.4	437.0	安山岩		
78	°	H-6 6b層	(7.0)	(3.1)	2.4	61.4	安山岩		敲打痕
79	°	G-8 8層	(8.2)	(7.9)	4.5	466.0	石英安山岩		°
80	°	G-6-7 9層	15.5	8.9	5.8	1,212.0	石英安山岩		°
81	°	I-6-7 9層	(7.4)	(5.7)	4.3	305.0	石英安山岩質凝灰岩		
82	°	H-8 12層	12.5	7.8	6.2	810.0	石英安山岩		



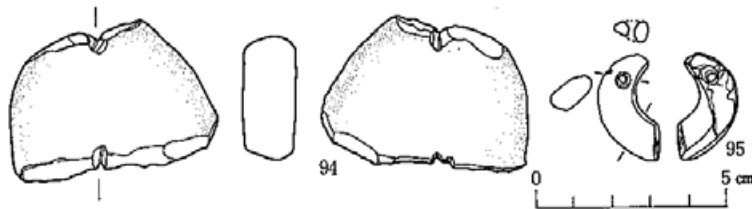
第37図 石器 (8)

番号	種別	地区層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石	材	備考
83	磨石	H-8 5層	8.0	(5.1)	(4.4)	188.4	石英安山岩		
84	◇	G-8 8層	(4.1)	(3.9)	(1.3)	17.0	石英安山岩		
85	◇	C-8 8層	(4.9)	(4.7)	3.2	70.6	石英安山岩		
86	◇	C-6-7 9層	11.9	7.1	3.9	334.0	石英安山岩		敲打痕
87	◇	C-8 9層	(6.4)	(4.8)	3.8	140.5	安山岩		◇
88	◇	C-8 9層	(6.8)	(5.9)	3.1	177.6	石英安山岩		
89	◇	H-6 9層	(8.9)	6.9	3.5	280.0	石英安山岩		
90	石皿	H-8 6層	(17.8)	(11.3)	(3.7)	1,112.0	安山岩		片面
91	◇	C-8 9層	(17.1)	(8.2)	8.2	1,390.0	安山岩		両面
92	◇	C-8 9層	(9.6)	(8.2)	4.7	498.0	石英安山岩		◇
93	◇	H-7 9層	(4.9)	(5.4)	(1.1)	40.8	安山岩		片面

その他の石製品

石製垂飾品 (第38図、95)

滑石片岩製の塊状耳飾を再加工した垂飾品である。塊状耳飾はほぼ円形の肉厚のもので、全体的によく研磨されていたと思われる。この塊状耳飾の左1/3ほどの破片を利用し、破損部の上端に、表・裏両面からの孔を穿って垂飾品としている。破損部の縁辺や孔の部分に再加工後の使用によって生じたと思われる磨滅が認められる。



第38図 石器 (9)

番号	地区層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	備 考
94	H-8・9 ×	(39.0)	50.5	14.0	25.3	石英安山岩質凝灰岩	
95	F-6・7 9層	27.5	10.5	6.0	4.0	滑石片岩	塊状耳飾破片

(3) 骨角貝製品

貝層を中心とする堆積層から少量の骨角器と貝製品が出土している。骨角器には鹿角製の銚頭や骨針、加工痕のある破片や垂飾品があり、貝製品には貝刃や貝輪などがある。

骨角器 (第39図、1～10)

1は基部を欠く半欠品であるが、鹿角製の銚頭であると思われる。先端部中央には逆刺が1つある。体中央部に溝が1条巡っており、この溝の部分で折れている。基部を欠損しているため基部形態は不明であるが、紐を縛るための溝を有していることから、ヤスではなく銚頭である可能性が強い。

2は現存長約7cm、断面形がほぼ円形の骨針で上部は欠損している。先端部もわずかに欠く。全体的に非常によく研磨されており、光沢をもつ。

3～6は棒状の骨角器破片で全体の形態の不明なものである。3は先端部分である。断面形は3・5・6がほぼ円形で、4は扁平である。4・6には整形の際の擦痕が顕著に認められる。3・4は鹿角製、5はニホンジカの中手か中足骨製である。これらは刺突具や骨針の破片であると思われる。

7～9も全体の形態の不明な骨角器破片である。素材は緻密で非常に光沢があり、いずれも断面形は扁平である。7はわずかに弯曲するもので、8・9は弯曲部で折損している。8・9

の折損部には磨り切り状の切痕が残っている。

10はニホンカモシカの右下顎骨を第2臼歯の後で切断し、第4前臼歯部分と第2臼歯の下の2ヶ所の下顎体に孔を穿って垂飾品としたものである。第3前臼歯より前は破損しており、不明である。下顎体の頬側には縦位と斜位の線刻が施されており、舌側にも第2臼歯部分の孔に短い縦位の線刻が施されている。頬側の下顎体は破損が著しいため線刻による文様は明確ではないが、第2臼歯部分と第1臼歯前端部分に垂下された2組の縦位平行沈線間に「×」字状の線刻が施され、第4前臼歯部分の孔の下にも斜位の線刻が施される。下顎体が破損しているため第2前臼歯～第1臼歯は脱落しており、第2臼歯だけが残っている。第2臼歯は萌出前後の状態が残っており、この垂飾品はニホンカモシカの若獣の下顎骨を素材としている。

貝製品 (第39図、11～22)

貝製品には貝刃 (11～19)、貝輪 (20～22)、その他の貝製品がある。

貝刃—9点ある。すべてハマグリを素材とするもので11～15・18が左殻、16・17・19が右殻を使用している。殻長は最も大きい18で8.0cm± (推定値)、最も小さい19で4.9cmである。刃部は貝殻の腹縁に剥離を施して形成されており、その範囲は破損品を除いて腹縁外面の3/4～全体に及んでいる。また、11～13・17・19では腹縁内面にも剥離痕が認められ、13では顕著である。貝刃の大部分は悪化が進んでいるため使用痕跡などは明瞭ではないが、11・13・16・19の外面には擦痕が認められる。擦痕の多くは腹縁に対して斜方向に走っているが、11には腹縁に平行する擦痕もある。また、擦痕は腹縁近くより腹縁と殻頂との中間の中央部や殻頂近くに多く観察できる。

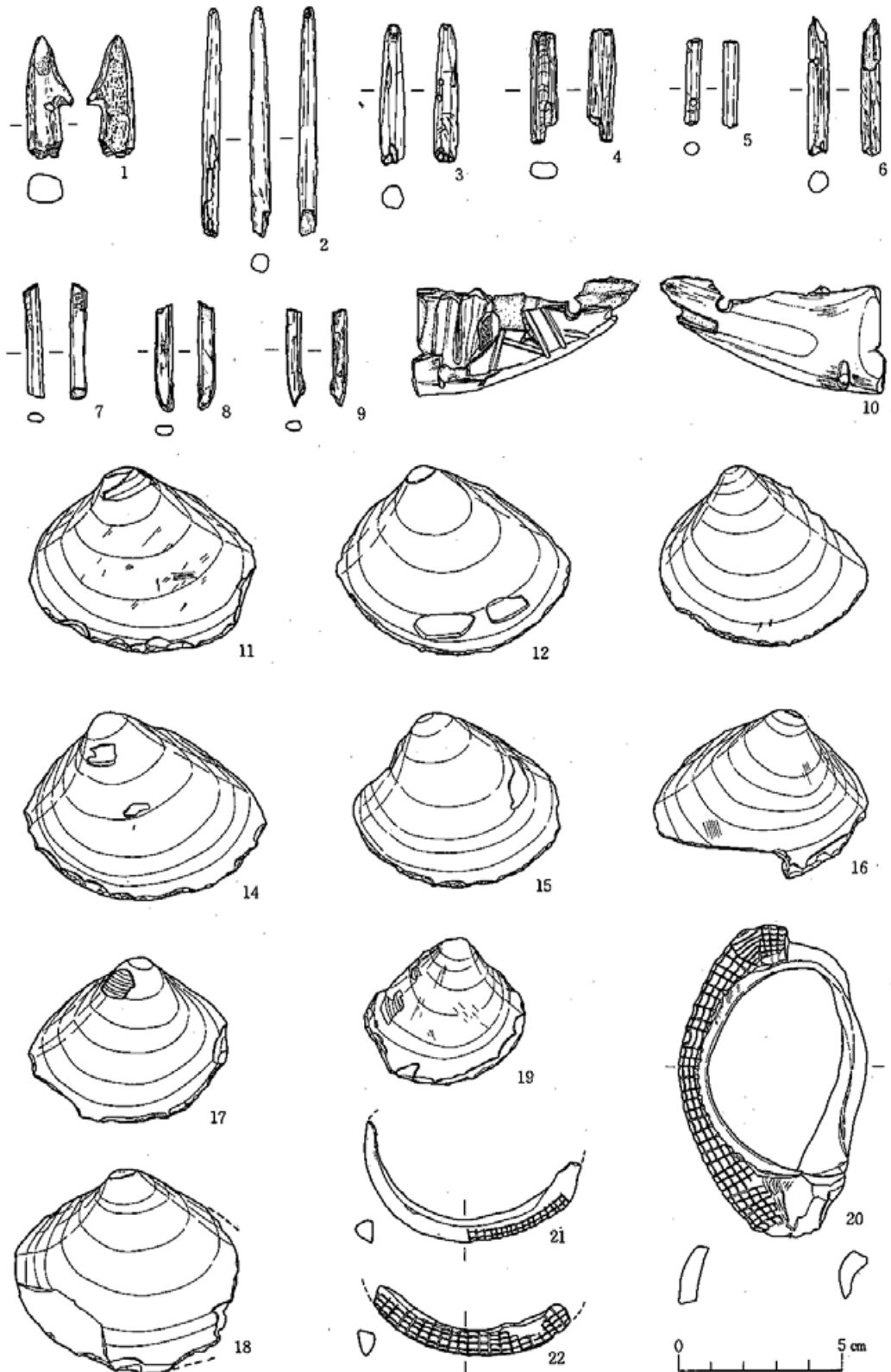
貝輪—アカニシ製の完形品 (20) とベンケイガイ製の破損品 (21・22) の3点がある。

19はアカニシの殻口部分以外を除去して貝輪としたもので、整形のための研磨が折断部分や口唇部、前溝部に入念に施されている。アカニシの殻外面につく特徴的な螺肋の結節 (トゲ) も研磨によって除去されており、外面も平滑になるように整形されている。

20・21はベンケイガイの右殻を素材とした貝輪で、20は全体の1/2ほど、21は腹縁部分だけ残っている。21は内・外面や内縁がよく研磨されるもので、外面の放射肋はあまり明瞭には残らない。21は20ほど入念な研磨を施さないもので、特に内縁への研磨は部分的にしか認められない。

その他の貝製品 (図版14-23)

明瞭な加工痕をもたないが、H-6区6b層からタカラガイの外唇部の破片が1点ある。タカラガイはいずれも表面は光沢をもち、色彩や文様も美しいことから装飾品として利用された可能性がある。



第39圖 骨角、貝製品

(4) 自然遺物

自然遺物には堆積層の各層、特に6層以下の貝層から出土した多くの動物遺存体がある。動物遺存体には貝層を構成する多くの貝類と魚・鳥・獣骨などがある。これらの動物遺存体の種名を一覧表として示し、その内容について概述する。

今回検討したのは発掘時に取り上げた動物遺存体とG-7区北壁からのブロックサンプリング資料から出土したものである。

宇賀崎貝塚出土の動物遺体種名表

I. 軟体動物 Mollusca

a. 腹足綱 Gastropoda

1. イボキサゴ *Umbonium moniliferum*
2. スガイ *Lunella coronata*
3. カワニナ *Semisulcospira libertina*
4. オオタニシ *Cipangopaludina japonica*
5. ウミニナ *Batillaria multiformis*
6. ホソウミニナ *Batillaria cumingii*
7. フトヘナタリガイ *Cerithidea rhizophorum*
rhizophorum
8. カワアイガイ *Cerithideopsilla djadjariensis*
9. ヘナタリガイ *Cerithideopsilla cingulata*
10. ツメタガイ *Neverita didyma*
11. タカラガイの一種 *Cypraeidea* gen.et
sp.indet.
12. アカニシ *Rapana venosa*
13. イボニシ *Reishia clavigera*
14. レイシガイ *Reishia bronni*
15. バイ *Babylonia japonica*
16. ムシロガイ *Niotha livescens*
17. オカチョウジガイ *Allopeas Kyotoensis*
2. サルボウ *Scapharca subcrenata*
3. ハイガイ *Tegillarca granos*
4. ベンケイガイ *Glycymeris albolineata*
5. マガキ *Crassostrea gigas*
6. トブガイ *Anodonta woodiana*
7. ヤマトシジミ *Corbicula japonicus*
8. ハマグリ *Metatrix lusoria*
9. コタマガイ *Gomphina veneriformis*
melanaegis
10. オキシジミガイ *Cyclina sinensis*
11. カガミガイ *Phacosoma japonicum*
12. アサリ *Ruditapes philippinarum*
13. ウバガイ *Spisula sachalinensis*
14. シオフキガイ *Macra veneriformis*
15. オオノガイ *Mya arenaria oonogai*

II. 脊椎動物 Vertebrata

a. 軟骨魚綱 Chondrichthyes

1. エイ目 *Rajiformes* fam.indet.

b. 硬骨魚綱 Osteichthyes

1. マイワシ *Sardinops melanosticta*
2. ウグイ類 *Tribolodon* sp.
3. フナ *Carassius auratus*
4. ウナギ *Anguilla japonica*
5. ボラ *Mugil cephalus*

b. 二枚貝綱 Bivalvia

1. アカガイ *Scapharca broughtonii*

6. サバ類 *Scomber* sp.
7. スズキ *Lateolabrax japonicus*
8. マダイ *Pagrus major*
9. クロダイ *Acanthopagrus schlegeli*
10. ハゼ科の一種 Gobiidae gen.et sp.indet.
11. コチ *Platycephalus indicus*
12. ヒラメ *Paralichthys olivaceus*
13. マフグ科の一種 Tetraodontidae gen.et sp.indet.
14. ヒガンフグ *Fugu pardale*

c. 両生綱 Amphibia

1. カエル（無尾目） Anura (Selientia) fam.indet.

b. 鳥綱 Aves

A. 貝類

巻貝類17種、二枚貝類15種の計32種が検出された。このうち陸産貝種はオカチョウジガイ1種である。また、ベンケイガイは貝輪に加工したものが2点あるだけである。出土量はヤマトシジミ、ハマグリ・アサリなどの二枚貝類が多く、巻貝類はイボキサゴを除いて概して少ない。

具体的に貝類の出土量を出現率で示したものが第1表で、B-7区のサンプルに基づき、土層である1~5層を除外して作製してある。すでに基本層序の項でも述べ、第1表でも明らかなように各貝層の構成貝種や比率は第8層を境として大きく異っている。

上部貝層の第6b・6c・7層は淡水産のヤマトシジミが主体で、出現率も99%前後を占めている。ヤマトシジミは淡水産貝種ではあるが、鹹水の影響の強い河口近くや潟湖などの汽水域に棲息する貝である。上部貝層にはカワニナ、オオタニシ、ドブガイなどの純淡水産の貝も少量含まれており、遺跡周辺の環境が推定できる。また、上部貝層にはイボキサゴ・ウミニナ・カワアイガイ・サルボウ・アサリ、第1表には現われないがマガキ・ハマグリ・オオノガイ・イボニシ・レイシ・ヘナタリ・スガイ・ウバガイ・シオフキガイなどの鹹水産の貝も極く少量含まれている。

下部貝層の9・10・11層ではハマグリとアサリが主体を占めイボキサゴがそれに次いで高い比率を占めている。上部貝層で圧倒的に多かったヤマトシジミは少量含まれるだけで、他はすべて鹹水産貝種である。量的に多いハマグリ・アサリ・イボキサゴなどは淡水の流入する鹹度

1. カイツブリ *Podiceps* cfr. *ruficollis*
2. ガン・カモ科の一種 Anatidae gen.et sp.indet.
3. キジ類 *Phasianus* sp.

d. 哺乳綱 Mammalia

1. タヌキ *Nyctereutes procyonoides*
2. イヌ *Canis familiaris*
3. カワウソ *Lutra lutra*
4. クジラ目 Cetacea fam.indet.
5. イノシシ *Sus scrofa*
6. ニホンジカ *Cervus nippon*
7. ウマ *Equus caballus*
8. ニホンカモシカ *Capricornis crispus*

第1表 G-7区ブロックサンプル軟体動物出現率表

種名	層位	6b層		6c層		7層		8層		9層上部		9層下部		10層		11層	
		数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
イボキサゴ						4	0.41	13	56.52	141	37.60	75	14.62	30	22.56		
スガイ										1	0.27	3	0.58				
カワニナ		2	0.05														
オオタニシ				2	0.05												
ウミニナ		1	0.03	6	0.15					2	0.53	32	6.24				
カワアイガイ						2	0.20										
アカニシ														1	0.75		
イボニシ								1	4.35	5	1.33	2	0.39	1	0.75		
ムシロガイ												1	0.19				
オカチョウジガイ										2	0.53						
サルボウ				R 1	0.03	L 1	0.10			R 3 L 1	0.80	R 1	0.19	R 1	0.75	R 7 L 6	6.80
ハイガイ										R 1 L 2	0.53			R 7 L 3	5.26	L 1	0.97
マガキ																	
ドブガイ		+		+													
ヤマトシジミ		R4034 L3680	98.85	R3868 L3984	99.65	R966 L782	99.08	R 3 L 7	30.43	R 3 L 1	0.80	R 5 L 3	0.97	L 1	0.75	R 2	1.94
ハマグリ		R44 L40	1.09	R 1 L 4	0.10	R 2 L 1	0.20	L 1	4.35	R119 L135	36.00	R183 L181	35.67	R45 L55	41.35	R75 L85	82.52
オキシジミガイ												R16 L12	3.12	R 2 L 1	1.50	L 2	1.94
アサリ				R 1	0.03			R 1	4.35	R81 L73	21.6	R180 L185	36.06	R24 L34	25.56	R 4 L 6	5.83
シオフキガイ												R 5 L 7	1.36				
オオノガイ												L 3	0.58	R 1	0.75		
計			100.02		100.01		99.99		100.00		99.99		99.97		99.98		100.00

第2表 ヤマトシジミの殻長分布表

	G-7-6b			G-7-6c			G-7-7		
	L	R	%	L	R	%	L	R	%
~ 6.0mm				1		0.03			
6.1~ 8.0				3	1	0.08	1		0.22
8.1~10.0	1	1	0.03	1	7	0.18			
10.1~12.0	11	1	0.34	3	4	0.10			
12.1~14.0	21	26	0.80	12	13	0.34		2	0.45
14.1~16.0	76	66	2.33	46	38	1.19		2	0.45
16.1~18.0	224	199	6.86	149	143	3.86		2	0.45
18.1~20.0	516	404	15.79	275	277	7.17	4	8	1.79
20.1~22.0	683	728	22.28	450	408	11.66	12	9	2.69
22.1~24.0	772	757	23.63	495	491	12.82	29	25	6.50
24.1~26.0	459	438	14.05	693	645	17.95	69	43	15.47
26.1~28.0	237	228	7.25	826	791	21.39	102	138	30.94
28.1~30.0	114	78	3.49	381	530	13.73	44	85	19.06
30.1~32.0	43	34	1.32	222	189	5.75	16	47	10.54
32.1~34.0	36	21	1.10	83	114	2.95	22	30	6.73
34.1~36.0	18	6	0.55	17	28	0.73	9	12	2.69
36.1~38.0	6	3	0.18	2	2	0.05	8	4	1.79
38.1~40.0				1		0.03	1		0.22
計	3,217	2,990	100.00	3,660	3,681	100.01	317	407	99.99

第3表 ハマグリ殻長分布表

	G-7-9下		
	L	R	%
~20.0mm		1	0.78
20.1~26.0		2	1.56
26.1~28.0	3	2	2.34
28.1~30.0	6	6	4.69
30.1~32.0	10	5	7.81
32.1~34.0	7	10	7.81
34.1~36.0	13	15	11.72
36.1~38.0	20	16	15.63
38.1~40.0	19	10	14.84
40.1~42.0	14	12	10.94
42.1~44.0	10	10	7.81
44.1~46.0	4	8	6.25
46.1~48.0	2	3	2.34
48.1~50.0	2	2	1.56
50.1~52.0		1	0.78
52.1~54.0	1		0.78
54.1~56.0	1	2	1.56
56.1~58.0		1	0.78
計	112	106	99.98

第4表 アサリ殻長分布表

	G-7-9F		
	L	R	%
~10.0mm		1	0.81
16.1~18.0	1		0.81
18.1~20.0	3	1	2.44
20.1~22.0	1	3	2.44
22.1~24.0	4	7	5.69
24.1~26.0	8	10	8.13
26.1~28.0	7	11	8.94
28.1~30.0	16	13	13.01
30.1~32.0	12	10	9.76
32.1~34.0	21	25	20.33
34.1~36.0	12	11	9.76
36.1~38.0	11	11	8.94
38.1~40.0	5	8	6.50
40.1~42.0	2	1	1.63
42.1~44.0			
44.1~46.0		1	0.81
計	103	113	100.00

の低い内湾の砂泥底に棲息する貝種であり、他の多くの貝も同様な環境の砂、泥底に、ウバガイはやや外洋性の砂底に棲む貝種である。スガイ・イボニシ・レイシは潮間帯の岩礁間に、マガキは内湾の岩礁に付着して棲息する貝種であり、これらの岩礁性の貝種は種類・量ともに少ない。

また、下部貝層の各層に少量づつ含まれるバイガイは現在は三河湾以南の特定の内海の泥底にしか棲息していないものである。第2～4表に代表的貝種であるヤマトシジミ・ハマグリ・アサリの殻長の分布を示した。ヤマトシジミは量的に多い6～7層のものを、ハマグリ・アサリは風化したものが多く計測可能なものが少いため9層下部のものを計測し、2mm単位の分布表とした。ハマグリは殻長40mm前後に、アサリは35mmに分布が集中しておりハマグリは小型の、アサリは中程度の大きさのものが多く、ヤマトシジミは7層では殻長30mm前後に分布が集中し、小型のものが少いのに対して、6b層では20.0～24.0mm前後に含有が集中しており、7層より小型のものが多く。

貝輪の素材となったベンケイガイはタカラガイと共に移入品である可能性がある。

B. 魚類 (第5・6表)

合計14種の魚類が出土している。発掘時に採集されたものはスズキ・クロダイ・マダイ・フグなどの大きく目につきやすい内臓骨が主で、その数量は第5表に示すように多いものではない。多くの魚類はブロック土中から検出された小さい個体のものである。(第5表)

淡水魚はフナ1種だけが検出された。咽頭歯・背鰭第1棘・椎骨が第6b～7層の上部貝層と間層である第8層を中心に下部貝層の第10層からも少量出土している。第8層出土の咽頭歯は全長15.0mmで10cm強の体長のものである。背鰭第1棘・椎骨はそれよりもずっと小型のフナのものである。

内湾性の魚で、河川に遡上したり、河口付近に棲息あるいは回遊する魚としてはウナギ・ハゼ類・ウグイ類・ボラ・スズキ・クロダイ・マダイなどがある。

ウナギは最も多くの遺存骨を出土した種類である。各層のブロック土中から鋤骨・前上顎骨・歯骨などや多くの椎骨が出土しているが、特に第8層とその上下の層での出土量が多い。前上顎骨や歯骨の大部分は破損しており、その計測値を示すことはできない。しかし、体長50cmの現生標本と比較してみると標本よりも大きなものから同程度の大きさのものが少数認められ、他は標本よりも小型のものである。第8層のブロック土中(7,000cc)からは1,556個もの椎骨が出土している。ウナギの椎骨総数は118個であり、第8層出土椎骨数を単純に椎骨総数で割っても14個体分の椎骨が含まれることとなる。椎体の大小や腹椎骨・尾椎骨などの形態差を加味して個体数を復原すれば、さらに個体数は増えると思われる。

ウナギと同じような環境の砂泥底棲のハゼ類も前上顎骨・歯骨・鰓蓋主骨や椎骨が、第9層を中心にほとんどの層のブロック土中から出土している。個体数としては第9層下部の6個体が最も多いものであるが、ウナギと共に多く漁獲されていたものと思われる。

ボラは第7～10層の各層のブロック土から椎骨が出土している。最も大きい第9層上部出土の椎骨で椎体長が6.0mmで他は2～3mm位の小さいものである。イナと呼ばれる位の大きさかもっと小さい個体のものである。

ウグイは第9層上部のブロック土から小さな椎骨（椎体長2.5mm）が1個出土しているだけで、特徴的は咽頭歯は含まれてなかった。

スズキは出土量の多い種類である。発掘時には歯骨・鰓蓋主骨・椎骨などが各層から少量ずつ採集されており、ブロック土中からは鋤骨・前上顎骨・歯骨・椎骨や表記しなかった内臓骨の諸骨が検出されている。第6表に計測可能な歯骨の歯骨高を記してある。第6表に示した発掘時採集の歯骨は8.3～14.4mmの大きさをもつ。体長にすると45.0cm以上の大きさで、60cmを越える大型のものもある。ブロック土中検出の諸骨にも大きな個体の骨は少量含まれているが、大部分は第5表の第8・9層出土歯骨高でみるような小型の個体のものである。第8層出土歯骨で22.0～25.0cm位の、第9層出土歯骨で18.0cm未満の体長で、セイゴ級の大きさのものである。

クロダイは前上顎骨・歯骨・椎骨などが第6b層にわずかに、第8層以下にややまとまって出土しているが、全体的な出土量は少ない。前上顎骨・歯骨はすべて破損しているが、前上顎骨で復原計測の可能なものについてその長さを計測した（第5表）。その長さには34.0～45.0mmのものがあり、これは体長40cm以上の大きさに相当するものである。しかし、スズキに見られたような小型の個体のものはブロック土中からも検出することはできなかった。

マダイは第9層と第11層から上後頭骨が各1点出土しただけである。

ヒラメ・コチなどもやはり内湾性の砂泥底に棲む魚種であり、フグ類・エイ類なども内湾に回遊してくる魚種である。

ヒラメは第9層下部のブロック土中から歯骨の小破片が1点出土しているだけである。

コチも同じく第9層下部のブロック中から椎骨が2個出土しただけである。椎体長は7.8mm程であまり大きな個体のものではない。

フグ類はG-6・7-8層とH-7-9層から左上歯骨が各1点ずつ出土している。G-6・7-8層出土のものは、トラフグなどが含まれるマフグ科の一種で歯骨長が46.6mmを越えるものである。H-7-9層出土のものは歯骨長17.0mmほどのヒガンフグである。

エイ類はG-7-9層から尾刺の基部近くの破片が2点出土している。1点は比較的大きな個体のもので、もう1点は小型のものである。いずれにも加工痕は認められなかった。

第5表 G-7区ブロックサンプル魚類・獣類出現率表

		6b層		6c層		7層		8層		9層上		9層下		10層		11層		
		ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	
魚	フナ	咽頭歯	1						1									
		背鰭第1棘			1		1	1										
		椎骨	1		1		5		14						2			
	ウナギ	鰓骨			3		2		7		1							
		前上顎骨			2		6	2	6	4	1			1				
		歯骨			1	1	8	2	7	5		1		1				
		椎骨			96		917		1556		80		1		2			
	ハゼ	前上顎骨									1		2		1			
		歯骨							1		1		6	2				
		鰓蓋主骨											1					
		椎骨			1		3		14		9		32		14			
	スズキ	鰓骨					2						1					
		前上顎骨								1			3 (大1小2)	1 (小)	1			
		歯骨				1			2	(H=4.0mm)	(H=3.2mm)	1						
		椎骨			3		17		14		15		14		5			
クロダイ	上顎骨								1									
	前上顎骨													1				
	椎骨	1																
ヒラメ	歯骨	1										1						
サバ類	椎骨	1				2												
ボラ	◇					5		2		2		4		10				
コチ	◇											2						
ウグイ類	◇									1								
イワシ	◇													1				
エイ類	尾棘											1						
獣類・その他		シカ中足骨1(L) ニホンカモシカ下顎骨(R) [(P ₂)(P ₄)(M ₁)(M ₂)] ()は脱落				カエル上腕骨1(R)		イノシシ下顎1(R)		イヌ上顎P ₁ (R) クジラ目 2片								
体積		30×30×?		30×30×?		30×30×10		30×30×8		30×30×13		30×30×?		30×30×10		30×30×10		

第6表 魚骨出土数量 (発掘中採集のもの)

層 No	スズキ		椎骨	クロダイ		マダイ 上後頭骨	ウナギ 椎骨	フグ 上歯骨	エイ 尾棘
	歯骨(cm)	鰓蓋主骨 ℓ r		前上顎骨	歯骨 ℓ r				
H-6-6a							1		
H-8-6a		1							
F-6-7-6b				r-1 (L=36.2)			7		
F-8-6b							1		
G-6-6b	r-1 (H=11.2)								
G-8-7		(1)					1		
H-6-7		(1)							
G-6-7-8	ℓ-1 (H=8.3)	(1) 1(1)		r-1 (L=36.0)	ℓ-1 (L=-)				ℓ-1(マフグ科の一種)
◇				ℓ-1 (L=-)					
G-8-8	r-1 (H=-)			ℓ-1 (L=-)					
G-7-9									1
G-8-9	ℓ-1 (H=14.4)	1	1	ℓ-1 (L=40.0)	r-1 (H=11.0)	1	1		
H-7-9			1	ℓ-1 (L=34.0)					ℓ-1(ヒガンフグ)
H-8-9-9							4		
G-6-7-10				r-1 (L=45.0)					
G-8-10	ℓ-1 (H=9.7)	1							
H-7-10	ℓ-1 (H=11.4)								
G-8-11						1			
G-8-12		1							
H-8-12							2		
	(H=)は歯骨高 ()は鰓蓋部のないもの			(L=)は顎骨長					

外洋性の廻遊魚にはサバ・イワシがある。しかし、どちらも内湾の沿岸にも接近する魚種で、特に小サバで著しい。

サバは第6 b層から2個、第7層から1個、ブロック土中から椎骨が出土しただけである。椎骨長は2.5~3.9mmで非常に小型のサバである。

イワシは第7層と第10層のブロック土中から1個ずつ椎骨が出土している。これも小さな個体の椎骨である。

C. 両生類

7層のブロック土から、カエル類の右上腕骨が1点出土している。小型の個体のものである。

D. 鳥類

わずかに3種類の鳥類が確認されただけで出土骨量も合計11点と少ない。

カイツブリ

H-8・9区-6 b層 右大腿骨1

上半を欠く大腿骨がH-8・9-6 b層から1点出土している。

ガン・カモ科の一種

H-8・9区-6 b層 右大腿骨1、左脛骨1、右脛骨2、J-6・7区-6 b層右鳥口骨1

H-8区9層右中足骨1、H-8区-X層左脛骨1

合計7点の骨が出土している。出土層位不明の1点を除いては上部貝層の6 b層から5点出土しており、下部貝層からは1点しか出土していない。

また、鳥口骨1点を除いては大腿骨1点、脛骨4点、中足骨1点で下肢骨に集中して出土している。破損品が多く計測可能なものは大腿骨1点しかない。その全長は43.0mmで中ガモ位の大きさである。その他のものも同程度の大きさである。

キジ

G-6・7区-8層 右中手骨1

第4中手骨部分の遠位端を欠く中手骨が1点出土している。

その他

H-8・9区-6 b層 左上腕骨1、G-8区-9層 左上腕骨1

両端を欠く中間部だけの左側上腕骨が2点出土している。種名は不明である。

E. 哺乳類

タヌキ

G-8区-9層 右尺骨1

右尺骨の近位端部分が1点出土している。

カワウソ

J-6・7区-6b層 右上腕骨1

近位端を欠く資料が1点ある。遠位端の滑車部も欠いている。

クジラ目 (第5表)

G-7区-9層上部のブロック土中から部位不明の小破片が2点出土している。

イノシシ

哺乳類のなかではシカと共に出土量は多い。上顎骨、下顎骨、その他の部位骨に分けて地区層位別の出土量を表示したが、顎骨に比して四肢骨などで部位を同定できた資料は少ない。これは、四肢骨などの出土量が少ないためではなく、細かく割られたような小破片で出土しているため、特に骨幹部ではほとんど同定することができなかった。また、関節部も大部分のものが割られて出土している。各層での最小個体数を各トレンチの2グリット単位に算出すると、上顎骨と下顎骨からは合計23個体、それに四肢骨を加味すると25個体位の最小個体数があると思われる。雌雄の判別できる個体は8個体あり、雌3個体、雄5個体が含まれている。また、乳歯をもつ顎骨は生後1年前後の個体が1例あるだけで少ない。イノシシの各個体の出土層位を検討すると土層である第5層に4個体、6～7層の上部貝層に14個体、8層に2個体、9層以下の下部貝層に4個体が含まれており上部貝層であるヤマトシジミ貝層からの出土が多い。

第7表 イノシシ部位骨出土数量

地区層位	顎骨		第一頸椎	第二頸椎	肩甲骨	寛骨		上腕骨		桡骨		第三中手骨	大腿骨		脛骨		膝蓋骨	距骨	腓骨	第三足骨				
	個頭骨	後頭部				ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r		ℓ	r	ℓ	r					ℓ	r	ℓ	r
G-6~8-5															1									
G-6・7-5					1																			
G-6・7-6a	1		1																					
H-6-6a					1			1		1		1		1	2									
H-7-6a					1					1														
F-7-6b						1	1													1				
G-6-6b													1											
G-7-6b								1																
H-6-6b		1						1		1		1							1	1				
H8・9-6b		1			1	2		1		1									1					
J-6・7-6b																				1				
G-6・7-6c															1									
G-6-7										1					1									
H-6-7			1			1				1								1		1				
H-7-7		1															1							
H-8-7								1	1															
F-6・7-8															1									
G-6・7-8																				1				
H-7-9								1	1															
H-8・9-9					1														1					
G-6・7-10																			1					
H-6-10																			1					
H-7-10					1																			
G-8-x							1																	
x-x																			1					

第8表 イノシシ上顎骨

地区層位	d											r										
	I ₁	I ₂	I ₃	C	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	M ₁	M ₂	M ₃	I ₁	I ₂	I ₃	C	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	M ₁	M ₂	M ₃
	i ₁	i ₂	i ₃	c	p ₁	p ₂	p ₃	p ₄	m ₁	m ₂	m ₃	i ₁	i ₂	i ₃	c	p ₁	p ₂	p ₃	p ₄	m ₁	m ₂	m ₃
G-6-7-5												(P ₂ P ₄)										
*												(M ₃)										
G-8-9-5	[C () P ₂]																					
H-6-7-5	(I ₁)																					
I-8-9-5												(M ₃)										
G-7-6a												(I ₁)										
H-6-6a												[I ₁ () ()]										
H-7-6a												[() M ₃]										
F-7-6b	[() ()]																					
G-7-6b												(P ₂ P ₄ M ₁ M ₂ M ₃)										
H-6-6b												[I ₁ I ₁]										
H-8-6b	(P ₄ M ₁ M ₂ M ₃)											(M ₃)										
*												未 (M ₃)										
H-6-7	(I ₁)											[() () () ()]										
*												(I ₁)										
G-6-8												(P ₂)										
C-6-7-8												(P ₂)										
H-8-9-9												(M ₁ M ₂)										

第9表 イノシシ下顎骨

地区層位	d											下顎体	下顎枝	關節突起	r											下顎体	下顎枝	關節突起	
	I ₁	I ₂	I ₃	C	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	M ₁	M ₂	M ₃				I ₁	I ₂	I ₃	C	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	M ₁	M ₂	M ₃				
	i ₁	i ₂	i ₃	c	p ₁	p ₂	p ₃	p ₄	m ₁	m ₂	m ₃	i ₁	i ₂	i ₃	c	p ₁	p ₂	p ₃	p ₄	m ₁	m ₂	m ₃							
H-6-7-5																													
I-8-9-5	(I ₁)	(I ₂)		(C)					(P ₂)	(P ₄)			(I ₁)	(I ₂)		(C)					(M ₂)	(M ₃)				♀			
G-6-8-6																												○	
G-7-6	(C)																											♂	
G-7-6a															(P ₂ P ₄ M ₁)														
H-6-6a															(M ₂ M ₃)														
*															(P ₂ P ₃ ())														
	[I ₁ I ₂ () C () () () P ₄ ()]														[I ₁ I ₂ () C () () () P ₄ M ₁ M ₂]													♀	
H-8-6a															(M ₁ M ₂ M ₃)														
F-8-6b													○																
G-6-6b																												○	
G-7-6b	(I ₁)																												
G-8-6b	(I ₁)														(C)														♂
H-6-6b																												(M ₂ M ₃)	
H-7-6b	[I ₁ I ₂ () ()]														[I ₁ I ₂ () C () () () P ₂ P ₄ M ₁]													♂	
H-8-6b																												(M ₃)	
G-6-7																												(M ₃)	
G-8-7	(I ₂)																											○	
H-6-7	※ ※ ※ ※ (M ₁) (M ₂)																												
*	(I ₁)(I ₂)(I ₃) (C) (P ₁)(P ₂)														※ ※ (I ₁)(I ₂)(I ₃) (C)													♀	
H-7-7	(C)																											♂	
H-9-7																												○	
G-8-8															(M ₁ M ₂ M ₃)														
*																												(M ₁)	
G-6-7-9															(C)													♂	
H-6-9																												(M ₁)	
H-7-9																												(M ₁)	
x-x																												(M ₃)	

*は未取出

シカ

最も出土量の多い種類である。四肢骨などが小破片となって出土しているのは、イノシシと同様である。最小個体数は顎骨でみると計29個体、四肢骨を含めるとさらにふえる。乳臼歯をもつ2才前後の若獣が4個体ある。出土量を層別別にみると上部貝層の6～7層と9層以下の下部貝層とではほぼ同数の個体が出土しており、イノシシと出土傾向が異なっている。

鹿角はすべて破片で出土量はあまり多くはないが角座骨や角座部分は7例出土している。このなかで明らかに落角であると思われるものは1点だけで、他は角座骨や頭骨を有している。H-8・9-12層出土の3例は角座骨に浅い骨痕溝をもつ、骨痕溝が出現するのは鹿角が脱落する直前の時期であり、4月上旬から7月上旬にかけてが鹿角の脱落の時期であることから、猟期が推定できる資料である。

第10表 シカ部位骨出土数量

部 位 地区層位	側頭骨		後頭類		第一頸椎	第二頸椎	肩胛骨	寛骨		上腕骨		桃骨		尺骨		中手骨		大腿骨		脛骨		中足骨		跗骨		距骨	踵骨
	ℓ	r	ℓ	r				ℓ	r	ℓ	r	psd	psd	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r	psd	psd	ℓ	r		
H-5-4																							1				
G-6-7-5																								1			1 1
G-8-5										1																	
I-8-9-5																											1
G-6-8-6															1												
H-9-6															1												
G-6-7-6a									1	1																	
H-6-6a											1							1				1					1
F-6-6b	1						1			1																	
F-6-7-6b																						1					
F-7-6b		1					1	1										1									
F-8-6b								1																			1
G-6-6b								1 1	1	1																	1
G-7-6b																							1				
G-8-9-6b													1	1												1	
H-6-6b																	1	1									1
H-7-6b							1															2					
H-8-9-6b						1	2											1									2
J-6-7-6b									1							1											
G-6-7									1																		
G-8-7									1											1			1				
H-6-7							1			1								1					1			1	3 2
H-8-7																						1	1				
F-6-7-8												1										1					
F-8-8																			1								
G-6-7-8	1											1										1	1				
G-8-8												1											1 1 1		1		1
G-6-7-9																											1
G-7-9																							1	1			
G-8-9									1 1														2	4			1
H-6-9																											1
H-7-9							1	2	1	1						1											1
G-6-7-10																											1
H-6-10																						1					
H-8-9-10																						1					1 1
H-6-7-12																											1 1
H-8-9-12		1	1			1																					1 1 1
G-8-x																											1

第11表 シカ上顎骨

地区層位	切歯骨	ℓ										切歯骨	r									
		I ₁	I ₂	I ₃	I ₄	P ₂ m ₂	P ₃ m ₃	P ₄ m ₄	M ₁	M ₂	M ₃		I ₁	I ₂	I ₃	I ₄	P ₂ m ₂	P ₃ m ₃	P ₄ m ₄	M ₁	M ₂	M ₃
H-6-6a		(M ₁)																				
F-7-6b													(M ₁)(M ₂)									
G-6-6b																						
G-8-9-6b													(P ₄)(M ₂)									
H-8-6b																						
G-6-7																						
H-6-7																						
H-7-7																						
H-8-7																						
I-6-7																						
F-6-7-8																						
G-8-8																						
H-7-9																						
*																						
G-6-7-10																						
H-8-9-10																						
G-8-11												○										
H-8-9-12																						

第12表 シカ下顎骨

地区層位	ℓ										下顎体	髁突起	関節突起	r										下顎体	髁突起	関節突起
	I ₁	I ₂	I ₃	I ₄	P ₂ m ₂	P ₃ m ₃	P ₄ m ₄	M ₁	M ₂	M ₃				I ₁	I ₂	I ₃	I ₄	P ₂ m ₂	P ₃ m ₃	P ₄ m ₄	M ₁	M ₂	M ₃			
H-5-3																										
H-6-7-5																										
G-6-7-6a																										○
G-8-6a																										
H-6-6a																										○
F-7-6b												○														
*												○														
G-8-9-6b																										
*																										
*																										
*																										
H-8-6b																										
G-8-7																										
H-6-7																										
*																										
*																										
G-6-7-8																										
*																										
G-7-9																										
G-8-9												○														
H-6-9																										
H-7-9																										○
H-8-9																										
G-8-11																										
H-6-7-12																										
H-8-9-12																										

第13表 ニホンジカ角・角座骨出土量表

地区・層位	数量	R・L	部 位・その他
H-6・7-5	1	L	角叉部
H-6-6a	5	-	小破片
F-6・7-6b	1	-	＊
F-8-6b	1	-	先端部
H-6-6b	3	-	小破片
G-6・7-8	2	-	角座部分(落角)・角幹(先端近く)
G-6・7-9	1	-	半截品
G-8-9	1	-	先端部
＊	1	L	頸骨～角座骨
G-8-10	2	L・R	頸骨～角座骨
H-8・9-10	1	-	小破片
H-8・9-12	4	R2 L1 -1	頸骨～角座骨(骨痕溝有) ＊ (＊) 角座部

ウマ

H-8・9区-5層、第1頸椎-1、左上腕骨-1、左**橈**骨-1、距骨-左・右各1、左基節骨-1、中節骨-1

H-9区の5層から馬の第1頸椎と右前肢骨が一括状態で出土し、同じくH-8区とH-9区の5層から左右の距骨が出土している。第1頸椎は環椎翼と背結節部分を欠損するものである。上腕骨は近位端と外側上顆稜から外側滑車の一部を欠いている。**橈**骨は両端を欠く遠位端に近い骨幹部だけのものである。基節骨と中節骨は指骨であるか趾骨であるか不明である。

第1頸椎…前関節窩最大幅80.0、後関節窩最大幅74.3、上腕骨…内踝前後幅(76.5)

右距骨…①全長54.7 ②滑車最大長(外側)51.7 ③滑車上縁幅26.0、左距骨①55.3 ②52.0
③26.2、基節骨…全長75.0、最大幅52.5、中節骨…全長45.0、最大幅47.7 (単位 mm)

B. 発見された遺構とその出土遺物

1. 竪穴住居跡 (第40図)

〔遺構の確認〕 丘陵平坦部から東斜面に移行する部分の調査区H・I・J-5・6区で確認された。

〔平面形・規模〕 削平によって東半部が失なわれているが、残存する西壁と南壁・北壁の一部から推定すると方形の平面形をもつと思われる。西壁の長さは6.55mほどで規模の大きな住居であると推定される。

〔堆積土〕 3層認められる。

第1層—黄褐色の地山土のブロックである。

第2層—黒褐色土層で地山の黄褐色土の小ブロックが多数混在している。

第3層—黄褐色土層で地山の黄褐色土と土色・土性が非常によく似ているが、地山土よりやや暗く、汚れている感じの層である。壁ぎわに分布している。

〔壁〕 最も保存の良い西壁で15cmの残存壁高がある。南壁の残存長は3.0m、北壁は1.7mほどである。地山を壁としている部分が多いが南壁の東半では地山直上の黒褐色土層や貝層を壁としている。

〔床〕 壁の残る西辺部にしか床面は残っていない。地山を床面としており床面は平坦で固い。P₁、P₄周辺の床面は焼けて赤変している。

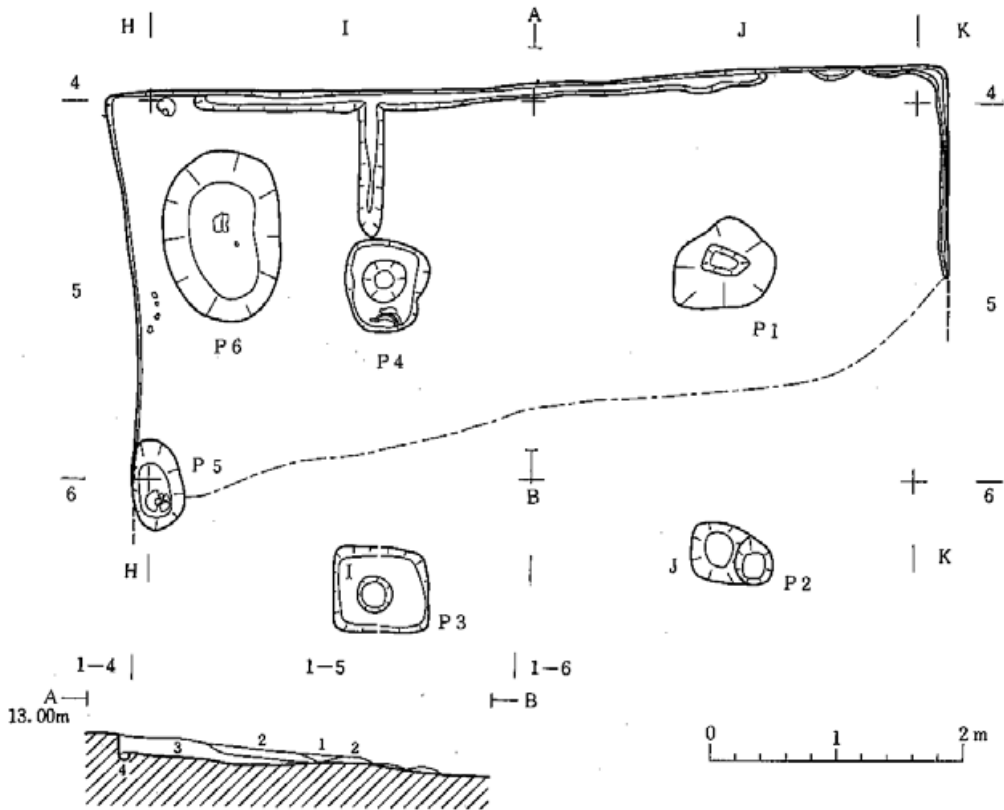
〔柱穴〕 床面から検出されたP₁、P₄と削平部分から検出されたP₂、P₃はほぼ住居跡対角線上に位置し、長径50～17cm、深さ30～60cmと規模も大きい。またP₃、P₄からは柱痕跡が検出されており、P₁～P₄が支柱穴であると思われる。

〔周溝〕 西壁および東壁ぞいに幅10～20cm、床面からの深さ5cmほどの周溝が認められる。西壁ぞいの周溝は北半で一部途切れている。また、西壁ぞいの周溝からP₄に向ってほぼ直角に幅約20cm、深さ5cmほどの溝が分岐して走っている。この溝は長さ約1mほどで、末端部はしだいに浅くなっており、P₄の掘り方の手前で途切れている。

〔その他の施設〕 南西隅近くに位置するP₆は長径135cm、短径90cmの東西に長い楕円形で、深さは2～5cmと浅く皿状の断面形をもつピットである。壁、底面全体が火熱を受けて赤褐色を呈している。位置や形態、火熱を受けていることから炉の可能性が考えられる。

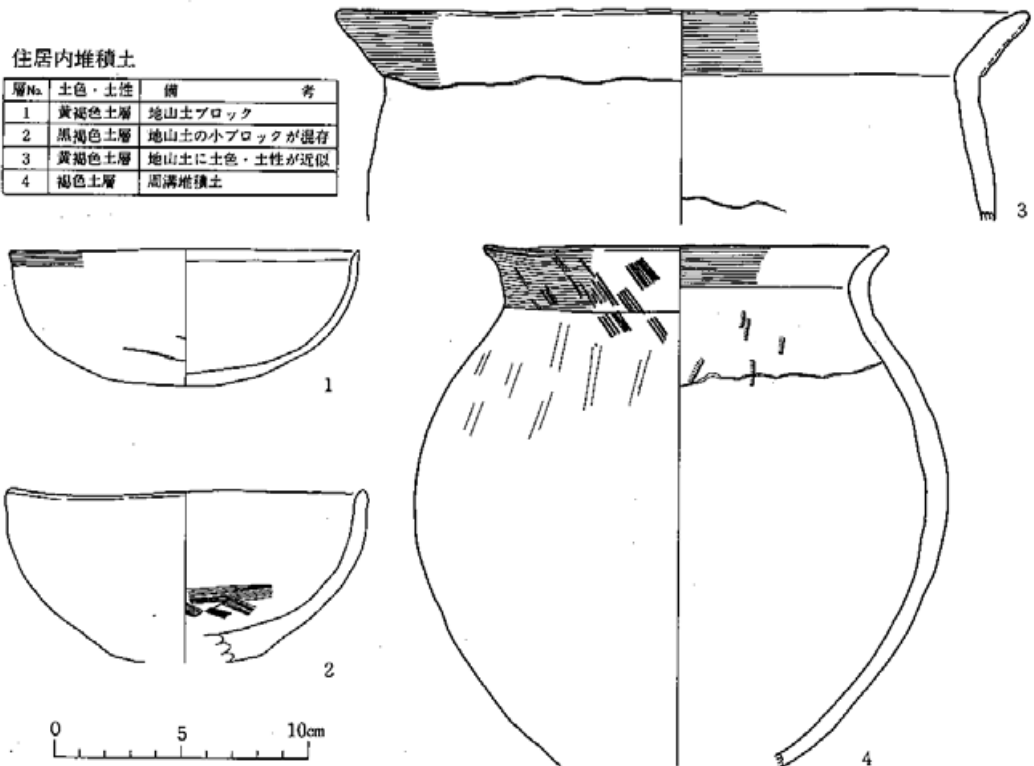
また、南壁ぎわのP₅は長径70cm、短径40cmの東西に長い楕円形のピットで、約5cmの深さをもつ。このピット中からはほぼ完形の土師器杯が1点と甕破片が出土しており、貯蔵穴の可能性がある。

〔出土遺物〕 堆積土や床面、ピット中から土師器杯・甕・壺などが出土している。このうち図



住居内堆積土

層No.	土色・土性	備	考
1	黄褐色土層	地山土ブロック	
2	黒褐色土層	地山土の小ブロックが混存	
3	黄褐色土層	地山土に土色・土性が近似	
4	褐色土層	周溝堆積土	



第40図 第1住居跡と出土遺物

示できるものは床面およびP₅出土の坏各1点とP₄出土の甕口縁部1点、堆積土出土の甕1点の計4点だけである。

土師器

坏（第40図1・2）1は南西隅の床面上から、2はP₅中から出土したものである。1は丸底で体部は丸味をもって外傾し口縁部は直立する。口縁部内面は斜めに削がれており、端部は尖がる。全体的に盤面の荒れが著しく調整は不明であるが、口縁外面にわずかに横ナデが観察できる。また、体部には積み上げの痕跡が認められる。2は底部は小さな平底で体部はやや丸味をもって外傾し口縁部は直立する。口縁端は丸味をもっている。1と同様に器面が荒れているため調整は不明で、わずかに体部内面にヘラナデの痕跡が観察される。

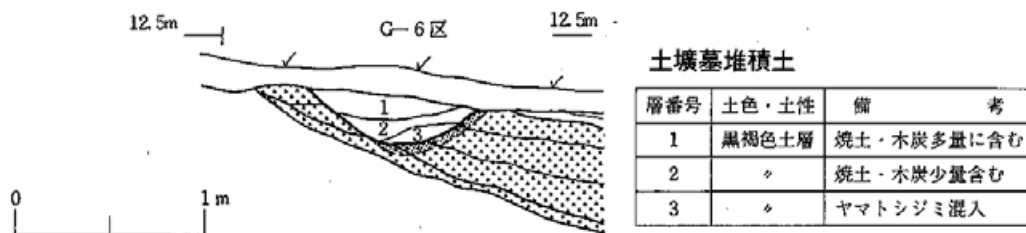
甕（第40図3・4）3はP₄中から、4は堆積土中から出土したものである。3は口縁部から体部上半まで残存する甕で、口縁部に最大径をもつ。頸部で強く屈曲し、口縁部は直線的に外傾するが短く、体部はあまりふくらまない器形と思われる。口縁部は折り返し口縁状となっている。口縁部内外面に横ナデが認められるが、器面が荒れているため体部の調整は不明である。4は底部を欠くもので頸部で屈曲して口縁部は短く外反する。体部はふくらみ楕円形を呈し、最大径の位置を体部中央よりやや上にもつ。器面が荒れているため、調整方法や単位は明らかではないが外面の口縁部は刷毛目のち横ナデ、体部は刷毛目のちヘラミガキが施され内面は口縁部が横ナデ、体部にはヘラナデが施される。3・4共に内面に積み上げの痕跡が認められる。

2. 土墳墓（第41図）

〔遺構の確認〕発掘時には注意されなかったが、土墳状のくぼみから出土した焼骨を整理段階で検討した結果、人骨片であることが判明したため土墳墓として取り扱う。G-6区北西隅に位置しており、G-6区北壁断面図に土墳の断面形が現われている。この断面図から土墳墓は表土直下の第6a層上面から掘り込まれていることがわかる。

〔平面形・規模〕上述の理由により平面形・規模は不明であるが、断面図部分での長さは85cm、深さは25cmである。

〔壁・底面〕第6a～7層のヤマトシジミ貝層を壁・底面としている。断面形は皿状で壁、底面は明確には区別できない。底面と東壁に相当する部分の貝層は厚さ5cmほどが火熱を受けて焼けている。



第41図 土墳墓

〔堆積土〕 3層認められる。3層とも黒褐色土層であるが、混入物やその混入量によって3分された。第1層は焼土、木炭が多量に含まれる層である。第2層は焼土、木炭の混入量が第1層に比して少ない層である。第3層はヤマトシジミを少量含む層である。

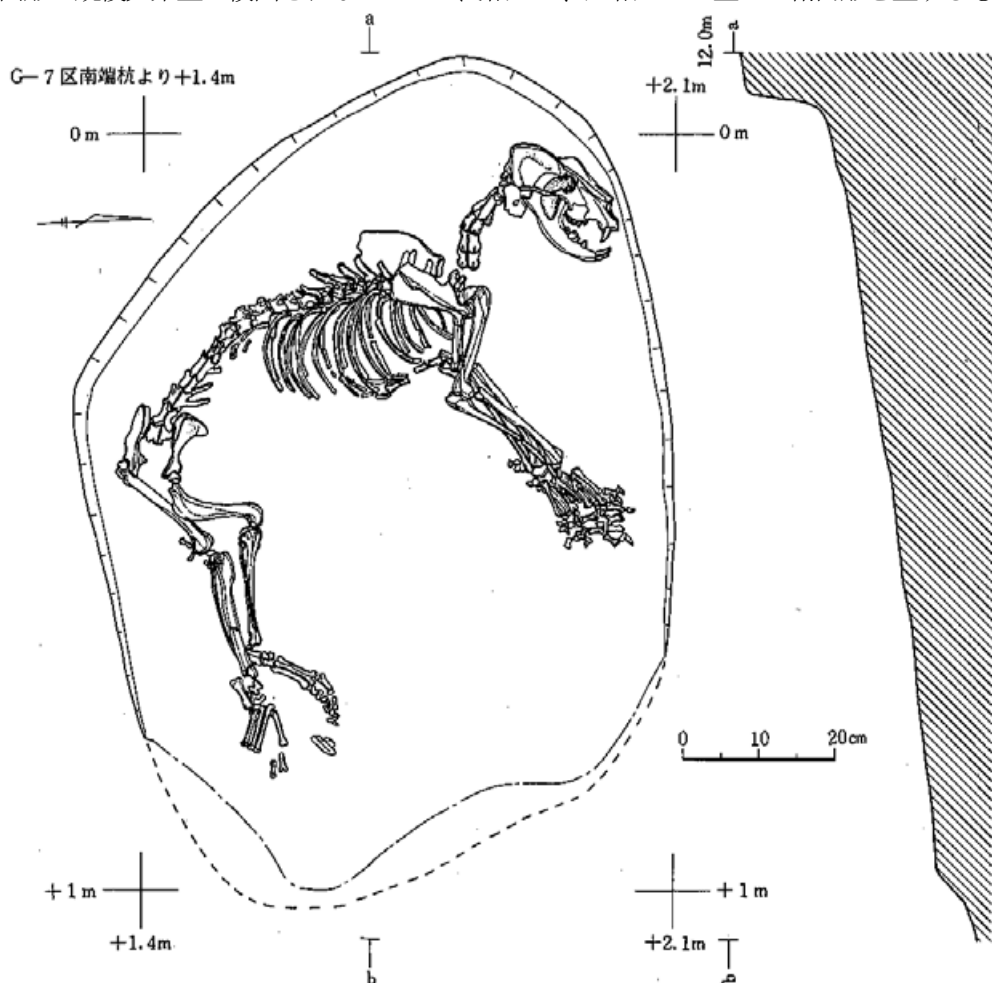
〔出土人骨〕 第1層を中心に各層から焼けた人骨片が少量出土している。人骨についての知見は付章で述べる。

〔出土遺物〕 第1層から縄文土器が2点出土している。1点は第22図268に示した胎土に繊維を含まないもので、細粘土紐の貼付による曲線文をもつものであり、もう1点はやはり繊維を含まないもので地文だけが施文される破片である。

3. 埋葬犬を伴う土壌 (第42図)

〔遺構の確認〕 G-7区の西端、中央からやや北に寄った位置で検出された。確認面は第4c層下の6a層上面である。

〔平面形・規模〕 東壁が検出されなかったが長軸90cm、短軸70cmの歪んだ楕円形を呈するも



第42図 埋葬犬を伴う土壌

のと思われる。

〔壁・底面〕 第6 a層のヤマトシジミ貝層を壁としている。最も保存の良い西壁で5～10cmの壁高がある。

第6 b層のヤマトシジミ純貝層を底面としている。底面はほぼ平らで東側に向ってゆるく傾斜している。

〔埋土〕 ほとんど破碎されていないヤマトシジミを含むかたくしまった黒褐色土が1層認められた。土壌埋土であると思われる。

〔埋葬犬骨〕 土壌内から趾骨・手根骨・足根骨の一部や尾椎骨などをわずかに欠くだけのほぼ完全な犬骨が1体検出された。頭部を北西隅に置き、脊柱列は西壁に沿っており、腹側を東に向けた形、つまり、左側を下にした側臥の状態で見られる。前肢・後肢とも左右肢をほぼそろえた形で伸展しており、埋葬後に攪乱を受けた痕跡は全くない。

〔出土遺物〕 土壌内から縄文土器の小破片が1点出土した。胎土に繊維を含まず、外面に縄文（RL）が施文されている。その他の遺物の出土はない。

V. 考 察

1. 縄文時代

(1) 縄文土器の特徴とその年代

縄文土器の口縁部・胴部資料は、A—縄文時代早期後半の土器群、B—前期初頭の土器群、C—前期中葉の土器群の3群に大別された。A～Cの各群土器は、様々の特徴などからさらに類別され、その概略は第四章で述べた。ここではA～C各群の各類について、他の遺跡の出土例などと比較しながらその編年の位置付けを行い、問題点などを述べる。

A群土器

A群土器はすべて胎土に繊維を含んでおり、アカガイあるいはサルボウ等の貝殻による腹縁刺突文や条痕文をもっている。こうした特徴をもつ土器群は従来縄文時代早期後半から早期末に位置付けられている土器群である。A群土器はさらに、AⅠ類—腹縁刺突文をもつが条痕文は施れないもの、AⅡ類—いわゆる条痕文土器、AⅢ類—縄文条痕文土器に大別された。

AⅠ類にみられる貝殻腹縁刺突文は、高清水町大寺遺跡上層出土土器（興野：1970）、小牛田町山前遺跡第4層出土土器（小牛田町教育委員会：1976）や七ヶ浜町吉田浜貝塚の第3類土器（後藤：1968）などに類例が認められ、それぞれ大寺式（山前遺跡、吉田浜貝塚）、大寺上層式（大寺遺跡）とされている。

AⅡ類はいわゆる条痕文土器で、AⅢ類は縄文条痕文土器である。AⅡ類やAⅢ類の大部分は小牛田町素山貝塚の上層（伊東：1940）や柴田町松崎（槻木）貝塚の上層（山内：1929・伊東：1940）から出土し、それぞれ素山2式、槻木2式（伊東：1957）とされた土器に類似している。ただし、口縁部に貝殻腹縁刺突文帯をもつAⅡa類や、AⅢ類の撚糸文が回転施文されるものなどは、素山貝塚上層土器、松崎貝塚上層土器には類例はない。

ところで、AⅡa類の腹縁刺突文帯はAⅠ類のものと類似している。そして、大寺遺跡上層出土土器や吉田浜貝塚第3類土器の腹縁文土器には条痕文が施されるものも含まれていることや、貝殻文土器群は「最後の段階では、貝殻条痕文が一般化し、口縁部に二・三条の貝殻腹縁文帯をもつだけになる。」（林：1965）とされていることからAⅡa類はAⅠ類とともに大寺上層式に比定されるものと考えられる。一方、AⅡa類4～8にみられる口縁部形態（口縁下部が肥厚し、稜帯状となるもの）は、素山2式に普遍的であることからAⅡa類は大寺上層式の中でも、より素山2式に近い要素をもっていると思われる。

AⅢ類には、38・42・49のように撚糸文が横位回転施文をされているものが含まれている。撚糸文については早期最終末に位置付けられる船入島下層式に伴うものとされ（林：1954）、石巻市南境貝塚妙見地区（後藤：1969）でも早期末の第2層土器群に伴っている。このように撚

糸文土器は素山2式より後出の土器群に伴うものであると考えられてきた。しかし、38の口縁部形態はAⅡa類やAⅡb類に類似しており、口縁部の肥厚部に馬蹄形状の原体圧痕を施す法は素山2式の一つの特徴である（伊東：1940）。また、42のように口縁部内面上端にも地文が施される例は槻木2式に認められることから、本遺跡出土の撚糸文施文の土器もAⅢ類土器に含めて考えても差し支えないと思われる。

なお、素山2式は茅山下層式に併行する素山Ⅱa式と縄文条痕文土器群の素山Ⅱb式とに2分されるという見解が示され（林：1965）、素山Ⅱa式は吉田浜貝塚第2類土器として層位的に把握されたとされている（後藤：1968）。しかし、宇賀崎貝塚ではAⅡ類とAⅢ類は層位的に分離することはできなかった。したがって、ここではA群のうちAⅠ類とAⅡa類を大寺上層式に、AⅡ類とAⅢ類は素山2式に位置づけておきたい。また、このA群土器に伴うと思われる底部資料は確認できなかった。

B群土器

B群土器は胎土に繊維を含むが、条痕文は認められないものである。宇賀崎貝塚出土土器中最も出土量の多いもので、BⅠ～BⅤ類に類別された。

このうちBⅠ～BⅤ類は地文に羽状縄文が多用され、それが量的主体を占むいわゆる羽状縄文土器群で、従来、縄文時代前期初頭に位置付けられてきたものである。

宇賀崎貝塚出土の羽状縄文土器群には口縁部に装飾的な文様をもつBⅠ類と地文だけが施されるBⅡ～BⅤ類とがある。BⅠ類の文様にはa—平行沈線文、b—竹管刺突文、c—撚糸圧痕文、d—連続刺突による渦巻文などがある。このBⅠ類は上川名貝塚上層から出土し、竹管文土器、撚糸文土器、竹管撚糸文土器とされたもの（加藤：1951）にその特徴が類似している。

BⅡ～BⅤ類は地文だけが施されるもので、BⅡ類には口唇部～口縁部上端と口縁部下端に、BⅢ類には口唇部や口縁部上端に刺突や刻目が施されている。BⅣ類・BⅤ類は刺突や刻目を有しないもので、BⅣ類は口縁部と胴部がわずかな段などによって画され、BⅤ類は口縁部と胴部が明瞭に画されない。BⅡ～BⅤ類のような施文や器形をもつものは上川名貝塚上層土器群で羽状縄文土器として一括されたもののなかなどに認められる（加藤：1951・志間1974）。このように宇賀崎貝塚BⅠ～BⅤ類土器はいずれも上川名貝塚上層土器に共通する特徴をもつことから、上川名Ⅱ式（林：1965）に位置付けられるものと思われる。

最近、宮城県内で報告された前期初頭の遺跡には鳴瀬町金山貝塚（鳴瀬町教育委員会：1977）、七ヶ浜町左道貝塚（白鳥：1979）などがある。金山貝塚や左道貝塚では宇賀崎貝塚BⅠ～BⅤ類と類似する土器群が出土しており、上川名Ⅱ式に比定されている。また、上川名貝塚上層土器群に特徴的に認められた竹管文土器・撚糸文土器・竹管撚糸文土器などの口縁部に装飾的な文様をもつ土器（BⅠ類）は両遺跡とも少量しか認められず、BⅡ～BⅤ類に相当する土器が

主体を占めていることや、地文には結束された原体や非結束の原体による羽状縄文をもつものが最も多く、斜行縄文がそれに次ぎ、ループ文・組紐回転文・撚糸文・網目状撚糸文などが少量づつあることが報告されている。

ところで、宇賀崎貝塚では図示した口縁部・胴部資料160点についてB I～B V類の出土量比をみるとB I類はB I a類3点、B I b類3点、B I c類9点、B I d類1点の計16点、B II類は9点、B III類は44点、B IV類は8点、B V類は82点あり、最も多いB V類が約50%を占め、B III類が約30%でそれに次ぎB I類は全体の1割ほどしかないことが知られた。

同様に地文のあり方を地文の判明する146点について内訳をみると、結束された羽状縄文が68点（片面ループをもつもの1点を含む）、結束されない羽状縄文が31点、斜行縄文が34点〔無節（R）2点、単節（RL）20点、（LR）9点、複節2点、合の撚1点〕、組紐回転文が7点、撚糸文は網目状撚糸文1点を含めて6点ある。このうち、斜行縄文には末端にループをもつもの11点、片面ループをもつもの1点があり、RLには結束されたものが1点含まれている。宇賀崎貝塚のB I～B V類土器に施文された地文には結束、非結束合せて99点の羽状縄文があり、70%弱を占めている。これらのなかでは結束のものが圧倒的に多い。斜行縄文の約23%がそれに次ぎ、組紐回転文、網目状撚糸文を含む撚糸文が少量づつ認められることが知られた。また、羽状縄文や斜行縄文には末端や片面にループをもつものが比較的多く含まれており注目される。

このように宇賀崎貝塚B I～B V類土器群でのB I類の比率や地文のあり方は松島湾岸貝塚群の金山貝塚や左道貝塚で上川名Ⅱ式とされた土器群と共通する内容をもつことが明らかとなった。ただし、加藤孝氏の「宮城県上川名貝塚の研究」では、このような量比については触れられておらず、今回宇賀崎貝塚で明らかになった量的な傾向が上川名貝塚上層出土土器群と同様なあり方を示しているのかについては比較することはできなかった。

なお、松島湾岸貝塚群のひとつである塩釜市桂島貝塚から出土した一群の土器をもって桂島式が提唱され、上川名Ⅱ式に後続する型式に位置付けられている。桂島式はほとんどが地文に羽状縄文（1/3強が非結束）をもつ土器群で、上川名Ⅱ式にみられた口縁部文様帯はまったくなく、底部外面には刺突文が施されるなどの特徴をもつとされている（林：1960）。桂島式と宇賀崎貝塚B I～B V類を比較すると桂島式にはB I・B II類に相当するものはなく、B III類・B IV類が少量認められ、B V類に相当するものが大半を占めていることが知られた。しかし、宇賀崎貝塚のB V類には結束・非結束の羽状縄文や斜行縄文の他に、原体の末端や片面にループをもつもの・組紐回転文・撚糸文などの地文が認められ、この点では桂島式とは異なっている。

また、現在までのところ県内で、桂島式と同様の内容をもつ例は知られておらず、桂島式がどのような位置をもつか十分明らかになっていないとは言えない。このため宇賀崎貝塚B I～B V類は現段階では上川名Ⅱ式に位置付けておきたい。

また、BVI類はその文様の特徴などから、大木2式（興野1968 a）に位置付けられる。

C群土器

C群土器は1点を除き胎土に繊維を含まず、沈線や粘土紐貼付けによる文様などが施文される土器群であり、従来、縄文時代前期中葉に位置付けられてきたものと同一の特徴のものである。C群土器は、施文技法や文様の違いなどによってC I類～C II類に類別された。

C I類は沈線文が施されるもので、a—一本工具による文様をもつものと、b—半載竹管による文様をもつものがある。C I a類とC I b類の文様には、曲線文、縦位山形文、縦位や斜位の平行線や横位の連続山形文や平行沈線文などがある。このような特徴をもつ土器は、七ヶ浜町大木囲貝塚（興野：1968 b・八巻：1972、1973）、迫町糠塚貝塚（興野：1968 b）、河北町中島貝塚（千葉：1975）などから出土しており、大木3式に位置付けられている。C I b 2類は半載竹管による平行沈線文や瓜形文などが口縁部に密に施文されているもので、県内ではこれまでのところ類例はないが、平行沈線の上に施文されている瓜形文は大木3式にみられるもの（興野：1968 b）と同じ特徴をもつことから、ここでは大木3式に含まれるものと考えておきたい。

C II類は粘土紐による貼付文をもつもので、a—斜位の刻目を有する粘土紐が横位に貼付けされるものと、b—細粘土紐の貼付けによる文様をもつものがある。C II a 1類は横位粘土紐の貼付けだけが認められるもので大木囲貝塚（興野：1968 b・八巻：1973）や糠塚貝塚（興野：1968 b）に類例が認められ、大木3式に位置付けられている。C II b類の細粘土紐貼付文には曲線的な文様や梯子状文、横位の小波状文などがある、このような特徴をもつ土器は大木囲貝塚（興野：1968 b・八巻：1973）、糠塚貝塚（興野：1968 c）などから出土しており、大木4式に位置付けられている。C II b 3類の271～273は貼付文上に細かい刻目が施されている。県内には今のところ類例はないが、神奈川県三浦市諸磯遺跡出土土器を標式とする諸磯B式の刻目浮線文（三浦市教育委員会：1979）に類似している。

C III類は無文の口縁部でC I類、C II類の口縁部と共通する特徴をもっている。

以上の検討によりC群土器は、C I類とC II a 1類が大木3式に、C II b類は大木4式に位置付けられた。しかし、斜位の刻目を有する粘土紐が横位に貼付けされた下に細粘土紐の貼付けによる文様をもつC II a 2類やC I a類と共通する沈線文が細粘土紐貼付文の間に施されるC II b 1類261のように中間的な要素をもつ例もある。なお、このC群土器には胎土に繊維を含まない底部資料B群が伴うと思われる。

（2）貝層とその年代

出土土器の年代を検討した結果、A群土器は早期後半の大寺上層式と素山2式に、B群土器は前期初頭の上川名II式と中葉の大木2式に、C群土器は前期中葉の大木3式と大木4式に位置付けられた。図示資料には出土地区層位を記した観察表を付したが、ここでは各群土器の出

土傾向などについて簡単に述べ、貝層の堆積した年代について触れてみたい。

すでに調査の成果でも述べているが貝層には基本的にヤマトシジミを主構成貝とする上部貝層（第6 a・6 b・6 c層）とハマグリ・アサリを主構成貝とする下部貝層（第9・10層）とがある。上部貝層と下部貝層は北半のG～Hでは7層（破碎されたヤマトシジミの混貝層）、南半のF・G区では8層（混貝層）を間層として2分されている。下部貝層は南半のF・G区では第11層（混貝層）に、北半のH区では12層（黒褐色土層）上に堆積しているが、H区北半までは分布していない。このためH区北半では12層の上に7層が堆積している。

大寺上層式・素山2式は上部貝層・間層から少量ずつ出土しているが、最も出土量が多いのは下部貝層、貝層下の混貝層・黒褐色土層である。

上川名Ⅱ式は上部貝層と間層の7層から少量ずつ、間層の9層と下部貝層で最も多く出土し、貝層下での出土も多い。

大木2式は間層の8層からと、上部貝層から土錘に加工されたものが1点出土している。

大木3・4式は間層である7・8層から少量ずつ、上部貝層から最も多く出土している。

以上のような出土状況から早期大寺上層式期に宇賀崎貝塚が初めて生活の場となり、素山2式期に下部の鹹水産貝種による貝層が形成され、上川名Ⅱ式期の後半には貝層を形成しなくなり、空白期を経て、大木3・4式期にヤマトシジミを主体とする上部貝層が形成されたことが窺われる。また、各層の接する部分や末端部分では遺物は混在する傾向があり、特に上部貝層の上面には土師器が少量混入している。

東北大学理学部地理学教室に依頼した上部貝層のF-7区-6 b層採取のヤマトシジミと下部下層のF-7区-9層採取のハマグリ放射性炭素年代測定結果は、F-7区-9層のハマグリがB. P. 6820±120 (TH-496)、F-7区-6 b層のヤマトシジミがB. P. 5110±100 (TH-497) となっている。

(3) その他の土製品

縄文土器以外の土製品としては土錘が3点ある。土器破片を加工したもので、2ヶ所ないし4ヶ所の紐懸けの切れ目を有しており、いずれも上部貝層の6 a、6 b層から出土した。大木3・4式期のものである。

(4) 石製品

石製品には剥片石器・磨製石器・礫石器などがある。出土層位からそれぞれの年代をみると次のようになる。

大寺上層式～上川名Ⅱ式期の石製品には石鏃1点、石匕5点、石錐1点、石篋1点、不定形石器19点、大型打製石器1点、磨製石斧11点、多くの凹石、敲石・磨石・石皿や瑛状耳飾の半欠品に孔を穿った垂飾品などがある。

大木3・4式期の石製品には石鏃3点、石篋1点、不定形石器1点、磨製石斧2点と多くの

凹石・敲石・磨石や石皿などがある。所属時期不明の石器も多くあるが、紐懸けを有する石錘は、同様の土錘が出土している大木3・4式期の可能性がある。

大木3・4式期には石錘を除いて、剥片石器が少なくなる傾向が認められる。

(5) 骨・角・貝製品

骨角製品には銚頭や骨針・加工痕のある破片や垂飾品、貝製品には貝刃や貝輪やタカラガイの破片などがある。

上川名Ⅱ式期の骨角貝製品には、骨角器破片2点とハマグリ製の貝刃が2点ある。

大木3・4式期の骨角製品には銚頭・骨針各1点と破片4点、ニホンカモシカの右下顎骨を加工した垂飾品1点がある。貝製品には7点のハマグリ製の貝刃、アカニシ製の貝輪1点、ベンケイガイ製の貝輪2点とタカラガイの破片1点がある。

利器・装飾品ともに骨角貝製品は大木3・4式期のものが多く内容も比較的豊富である。特に銚頭の出土は基部を欠くため全体の形態を知ることはできないが、上川名貝塚や桂島貝塚（後藤：1979）から出土した上川名Ⅱ式の銚頭に次ぐ古い例となった。

また、装飾品はこの時期としては、従来出土例の知られていないものが多く、特にニホンカモシカ製の垂飾品は類例を知らない。

(6) 自然遺物

自然遺物としては、貝類32種、魚類14種、両生類1種、鳥類3種、哺乳類8種の計58種の動物遺存体の存在が確認されている。貝類は大木3・4式期の上部貝層と上川名Ⅱ式期の下部貝層では含まれる種類が大きく異なっている。上川名Ⅱ式期にはハマグリ・アサリ・ダンベイキサゴを主体とする内湾性で砂泥底棲の貝種が多く含まれており、貝塚周辺の海域が阿武隈川の供給する土砂礫と沿岸流が形成する浜堤によって内湾化されていたことが知られる。大木3・4式期の貝層はヤマトシジミが90%以上を占めるようになり、周辺海域は浜堤の発達により、完全に潟湖化し、ヤマトシジミが多産するようになったものと思われる。このような環境の変化は魚類の種類やその出土量にも示されている。下部貝層には、多様な魚種が含まれ、スズキ・クロダイ・ボラ・ハゼなどの出土量も比較的多いが、上部貝層での出土は少量となり、魚種も限定されてきて、フナが含まれるようになる。最も特徴的なものはウナギで、下部貝層から除々に出土量が増えて、貝層を形成しない第8層で出土量が最も多く、上部貝層の上層にいくにしたがい出土量は減じている。上部貝層、下部貝層ともに魚類はブロック土中から検出された小型の個体のものが多い。上部貝層から出土した銚頭や土錘などの漁具と考えられる遺物を通して、スズキ・クロダイ・マダイなどの大型の個体に対する漁法、ウナギなどの底棲魚に対する漁法、沿岸に集まる小魚に対する漁法などが想定できる。また、同時期の松島湾岸貝塚に特徴的にみられるマダイの出土量は少なく、マグロ類は出土していない。

鳥類の出土量は少なく、種類も3種と少ない。内湾や潟湖などの水域であれば、カモ類を初めとする水鳥の数は多かったと思われる。キジの出土量も少ない。

哺乳類は8種と比較的多くの種類が確認されている。しかし、シカ・イノシシやイヌを除くとその出土は断片的である。最も出土量が多いのはシカでイノシシがそれに次いでいるが、シカ・イノシシの出土傾向には違いが認められた。シカは上川名Ⅱ式期と大木3・4式期ではほぼ同数出土しているのに対して、イノシシは上川名Ⅱ式期より、大木3・4式期の方が出土量が多い。また、シカ・イノシシともに幼獣や若年の個体の出土は少なかった。注目される例としてはシカの角座骨に骨痕溝をもつものが3例出土している。骨痕溝が出現するのは4月上旬から7月上旬とされる鹿角の脱落時期の直前であることから猟期の推定ができる。イヌは上部貝層に掘り込まれた土壌から検出された1体分の埋葬犬と、貝層などから散乱状態で出土したものとがあり、出土量は比較的多い。従来、資料の少なかった縄文時代前期のイヌとして今後他の遺跡の例とも比較し、十分検討を加えたい。

ウマは第5層（包含層）の末端部分で出土したもので、古墳時代以降のものと思われる。

2 弥生時代

(1) 弥生土器の特徴と年代

少量の弥生土器が第5層を中心として出土しており、施文文様の有無によって2分された。第1類は幅の狭い平行施文具によって連弧文や円文などの曲線的な文様や山形文などの直線的な平行沈線文が施されている。このような特徴は名取市十三塚遺跡から出土し、十三塚式とされた土器群に類似している（伊東：1957）。第2類は地文だけが施されるもので年代を明らかにすることはできないが、第1類と同じ層から出土しているので十三塚式の可能性がある。

3 古墳時代以降

(1) 土師器・須恵器の特徴と年代

土師器

土師器には竪穴住居跡から出土したものと（第40図）、第5層を中心とする包含層から出土したものがある（第28図）。器種には坏・高坏・小型壺・壺・甕・甌などがある。主として坏の特徴によって年代を述べる。

坏 住居跡出土の1・2はロクロ不使用の坏で底部は丸底や平底である。体部は丸味をもって外傾し口縁部が直立する器形で、調整は器面が荒れているため不明であるが、器形は仙台市岩切鴻ノ巣遺跡から出土しBⅢ類に分類された坏に類似している（白鳥・加藤：1974）。BⅢ類は古墳時代中期の南小泉式とされていることから1・2も南小泉式に位置付けられると思われる。包含層出土の1・2・3は器形・調整ともに岩切鴻ノ巣遺跡でAⅠc類、AⅡc類、BⅢc類とされたものに類似している。AⅠc類、AⅡc類も南小泉式とされている。4～6は全体的な器形

や調整の明らかでないもので、5の外面には沈線が、6の内面は黒色処理されている。5・6は南小泉式より後出の型式に位置付けられると思われる。また、図示資料はないが、ロクロを使用し底部を回転糸切りで切離した坏も出土しており、表杉ノ入式（氏家：1957）と考えられる。

坏以外の高坏・小型壺・壺・甕・甑など図示した資料は岩切鴻ノ巣遺跡や大河原町台ノ山遺跡（阿部・千葉：1980）などで南小泉式に共伴したものと器形・調整など類似した特徴をもつことから南小泉式に位置付けられると思われる。

須恵器

坏・甕などの破片が少量出土している。底部は坏・甕とも回転糸切り技法によって切り離しており、住居跡などで表杉ノ入式の土師器と共伴する須恵器に特徴が類似している。

（2）遺物包含層とその年代

貝層の上に堆積した2～5層の各層から少量の縄文土器・弥生土器・須恵器・石器・骨角器・動物遺存体などと多くの土師器が出土している。最も出土量の多いのが貝層の大部分を覆っている第5層で、その他の層からの出土は少ない。

第5層出土遺物で最も多いのが南小泉式～表杉ノ入式の土師器で、特に南小泉式のものがまとまりをもって出土している。第5層には十三塚も含まれており、第5層は弥生時代～平安時代にかけて堆積した遺物包含層で、その堆積の中心は古墳時代中期にあると思われる。

（3）竪穴住居跡とその年代

竪穴住居跡の床面やピットなどから出土した土師器・坏・甕が、その特徴から南小泉式に位置付けられたことから、この竪穴住居跡は南小泉式期のものと考えられる。発見された竪穴住居跡は1軒だけで、その東半部が削平されているため、その形態や構造は十分明らかではないが、平面形や規模、4本柱であることやその配置、炉の存在など、同一丘陵上に隣接して立地し、昭和48年に調査された宮下遺跡の16軒の南小泉式期の住居跡と共通する点が多い。

（4）その他の遺構と年代

a 土壇墓

土壇墓は表土直下の縄文時代前期中葉の貝層に掘り込まれているが、土壇中からは人骨と縄文土器以外の遺物の出土はなくその年代は不明である。人骨は火葬骨であることからあるいは平安時代以降の土壇墓である可能性がある。

b 埋葬犬を伴う土壇

土壇墓と同様に縄文時代前期中葉の貝層上部に掘り込まれた土壇で、ほぼ完全な一体分のイヌが埋葬されている。土壇内からは縄文土器以外の遺物の出土はなく、縄文時代前期中葉の埋葬犬の可能性もあるが、貝層中から散乱状態で出土した他の犬骨と出土状況は大きく異なることなどから、厳密にはその年代を特定することはできない。

VI. ま と め

1. 宇賀崎貝塚は、愛島丘陵の南縁からさらに南に延びる小舌状丘陵上に立地しており、貝層は丘陵端の南斜面と東斜面の2地点に形成されている。今回調査されたのは東斜面の貝層と丘陵平坦部である。
2. 今回の調査によって宇賀崎貝塚は縄文時代早期後半～前期中葉、弥生時代、古墳時代中期～平安時代に生活の場となったことが明らかとなった。そして、縄文時代前期初頭には鹹水産貝種による、縄文時代前期中葉にはヤマトシジミを主構成貝とする貝層が形成されていたことが判明した。また、古墳時代中期の竪穴住居跡1軒と時期不明の土壇墓1基、埋葬犬を伴う土壇墓1基の遺構が検出された。
3. 貝層からは縄文土器をはじめ多様な石製品、骨・角・貝製品や計58種の動物遺存体などが出土している。
4. 縄文土器はその特徴などから、それぞれ大寺上層式、素山2式、上川名2式、大木2～4式に位置付けられた。特にまとまりをもって出土したのは上川名Ⅱ式で、従来、不明確であった上川名Ⅱ式の内容を知ることができた。また、資料の少なかった大木3・4式も比較的多く出土した。
5. 出土した動物遺存体の検討により、当時の自然環境の変化、および漁撈、狩猟活動の一端を知ることができた。阿武隅川下流域貝塚群では初めての成果である。
6. 今回の調査では縄文時代の遺構は発見できなかったが、遺跡の範囲が調査区の南や西に延びることや南斜面に保存の良好な貝層が残っていることなどから、遺構の存在の可能性はある。また、弥生時代、古墳時代～平安時代の遺物・遺構の発見は同一丘陵上に立地する宮下遺跡との強い関連が窺れ、弥生時代・古墳時代～平安時代にはこの丘陵上に広範な集落が営まれたものと思われる。

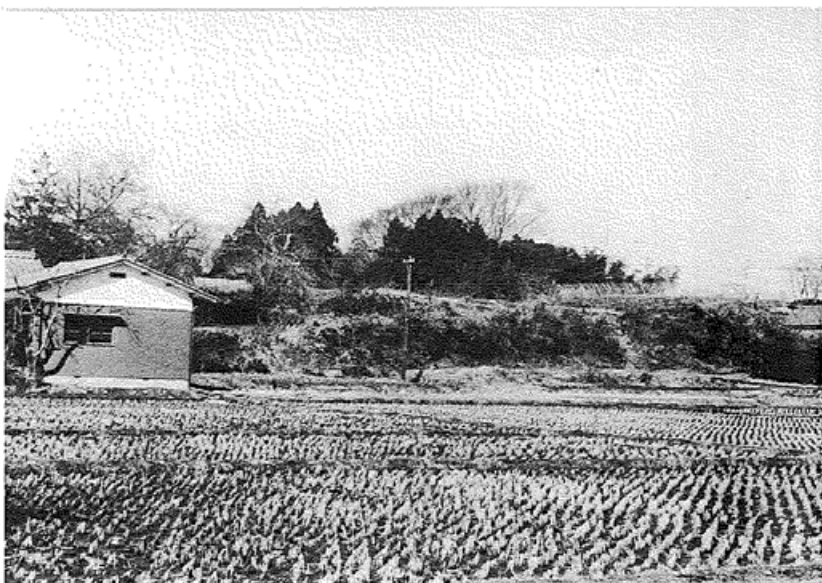
引用・参考文献

- 阿部 博志・千葉宗久 (1980) : 「台ノ山遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告Ⅱ』宮城県教育
- 伊東 信雄 (1940) : 「宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告」東北帝国大学法文学部奥羽史料調査部研究報告第二
(1957) : 「古代史」『宮城県史』第一巻 宮城県
- 氏家 和典 (1957) : 「東北土師器の型式分類とその編年」歴史14集
- 金子 浩昌 (1978) : 「長者原貝塚の動物遺体」南方町文化財報告書第1集「長者原貝塚」
- 加藤 孝 (1951) : 「宮城県上川名貝塚の研究」宮城学院女子大学研究論文集I
(1952) : 「阿武隈・北上両河岸段丘、並に松島湾岸諸島における貝塚の分布とその編年」宮城学院女子
大学研究論文集II
(1956) : 「考古学上よりみた宮城県」地域社会研究7・8輯
- 興野 義一 (1968A) : 「大木式土器理解のために (Ⅱ)」考古学ジャーナルNo.16
(1968B) : 「大木式土器理解のために (Ⅲ)」考古学ジャーナルNo.18
(1968C) : 「大木式土器理解のために (Ⅳ)」考古学ジャーナルNo.24
(1970) : 「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」古代文化第22巻第11号
- 後藤 勝彦 (1968) : 「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚 (Ⅰ)」『仙台湾周辺の考古学的研究』
- 後藤勝彦他 (1970) : 「下窪遺跡」釜房ダム水没遺跡発掘調査概報
- 後藤 勝彦 (1979) : 「仙台湾縄文前期貝塚出土の動物遺体から見た漁撈活動について」研究紀要VI・宮城県多賀城跡
調査研究所
- 小牛田町教育委員会 (1976) : 「山前遺跡」
- 斉藤 忠 (1930) : 「松島湾内諸島に於ける貝塚調査概報」『東北文化研究第2巻第4号』
- 酒詰 仲男 (1959) : 『日本貝塚地名表』土曜会
- 志間泰治 (1974) : 「柴田町の文化財」柴田町の文化財第5集
- 下村克彦・庄野靖寿 (1978) : 「貝崎貝塚第3次発掘調査報告」大宮市文化財報告第12集
- 庄野靖寿他 (1974) : 「関山貝塚」『埼玉県埋蔵文化財調査報告第3集』
- 白井 邦彦 (1967) : 「日本の狩猟獣」林野弘済会
- 白鳥 良一 (1974) : 「仙台市三神峯遺跡の調査」東北の考古・歴史論集
(1978) : 「宮城県七ヶ浜町左道貝塚の縄文前期土器について」宮城史学第6号
- 白鳥良一・加藤道男 (1974) : 「岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線報告書Ⅰ』宮城県教育委員会
- 千葉 宗久 (1975) : 「河北町の原始時代」河北町誌上巻P128~181
- 坪井正五郎 (1908) : 「陸前名取郡地方に於ける見聞」人類学雑誌第23巻一第267号
- 東京帝国大学人類学教室 (1917) : 「日本先史時代人民遺物発見遺跡地名表Ⅳ」
- 東京帝国大学人類学教室 (1928) : 「日本先史時代人民遺物発見遺跡地名表Ⅴ」
- 富永盛治郎 (1965) : 「五百種魚体解剖区説上・下」角川書店
- 名取市教育委員会 (1975) : 「宮下遺跡」名取市文化財調査報告書第1集
- 鳴瀬町教育委員会 (1977) : 「亀岡遺跡・金山貝塚」宮城県鳴瀬町文化財調査報告第1集
- 秦 昭繁 (1977) : 「松原」置賜考古学会
- 林 謙作 (1960) : 「宮城県桂島貝塚出土の前期縄文式土器群」考古学叢書第46巻第3号
(1962) : 「山形県野山遺跡の土器」考古学雑誌第47巻第4号
(1965) : 「縄文時代一東北」『日本の考古学Ⅱ』

- 堀田 秀之 (1951) : 「日本産硬骨魚類の中軸骨格の比較研究」日本魚学振興会
- 三浦市教育委員会 (1979) : 「諸磯遺跡とその周辺」三浦市南部地区遺跡詳細分布調査報告書
- 宮城県教育委員会 (1969) : 「埋蔵文化財緊急調査概報―南境貝塚」宮城県文化財調査報告書第20集
(1973) : 「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概要」宮城県文化財調査報告書第33集
(1975) : 「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第38集
- 八巻 正文 (1978) : 「大木囲貝塚」―昭和51年度環境整備調査報告―七ヶ浜町文化財調査報告書第3集
(1979) : 「大木囲貝塚」―昭和52年度環境整備調査報告―七ヶ浜町文化財調査報告書第4集
- 安田 喜憲 (1978) : 「仙台湾周辺における後氷期の地形変化・海水準変動と人類の居住」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ「上深沢遺跡」宮城県教育委員会
- 山内 清男 (1929) : 「関東北に於ける繊維土器」史前学雑誌第1巻第2号
(1930) : 「関東北に於ける繊維土器追加第2」史前学雑誌第2巻第1号
(1979) : 「日本先史土器の縄文」先史考古学会

図版 1

遺跡遠景(調査前)

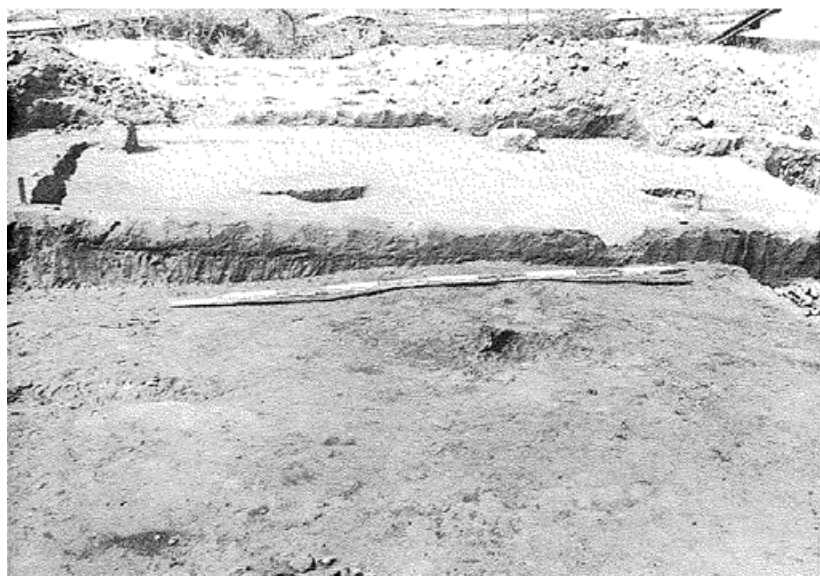


遺跡遠景(東より)



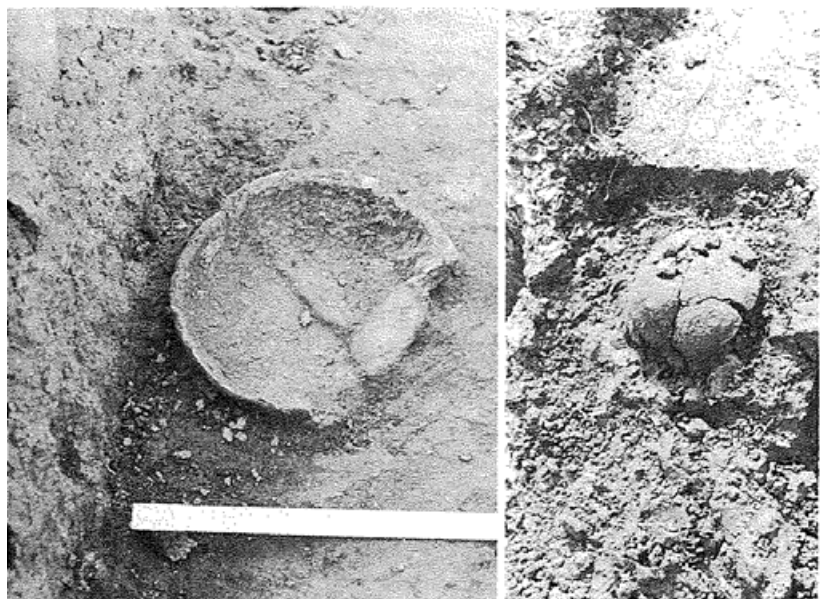
調査区遠景





図版2

第1住居跡



第1住居跡
遺物出土状況



埋葬犬

図版3

調査区
貝層部分(手前から)
F・G・H区

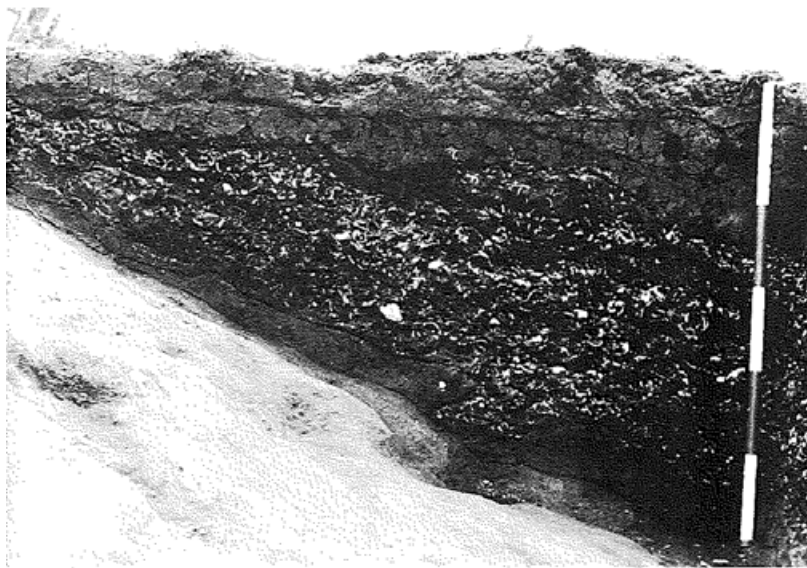


G区北壁



H区北壁





図版4

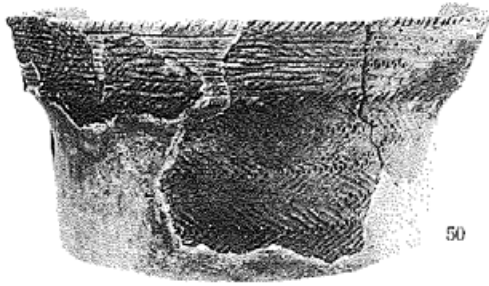
F-6・7区北壁



G-8区西壁



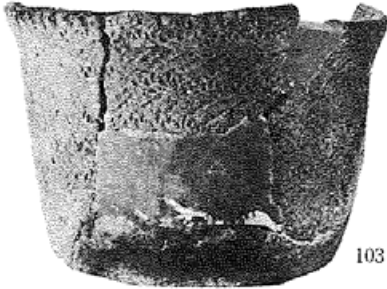
G-6・7区
ヤマトシジミ貝層



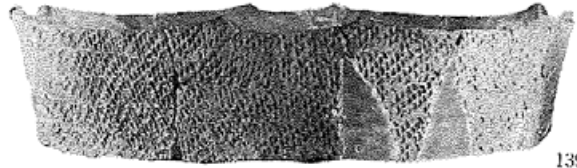
50



133



103



139



277



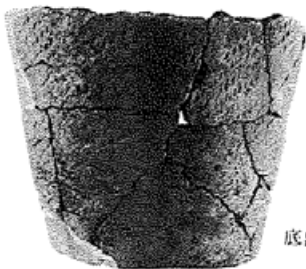
164



底部7



底部9

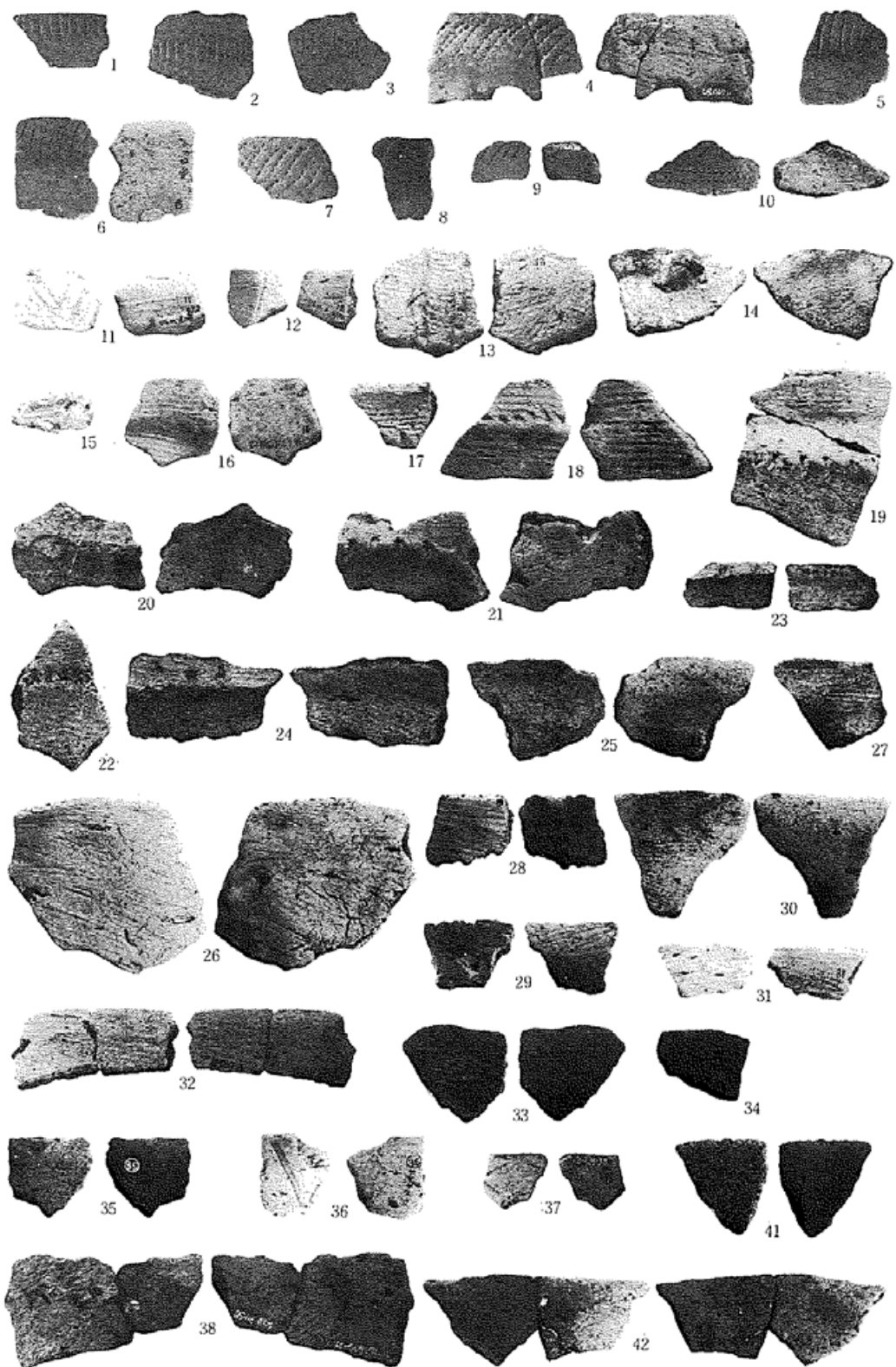


底部20

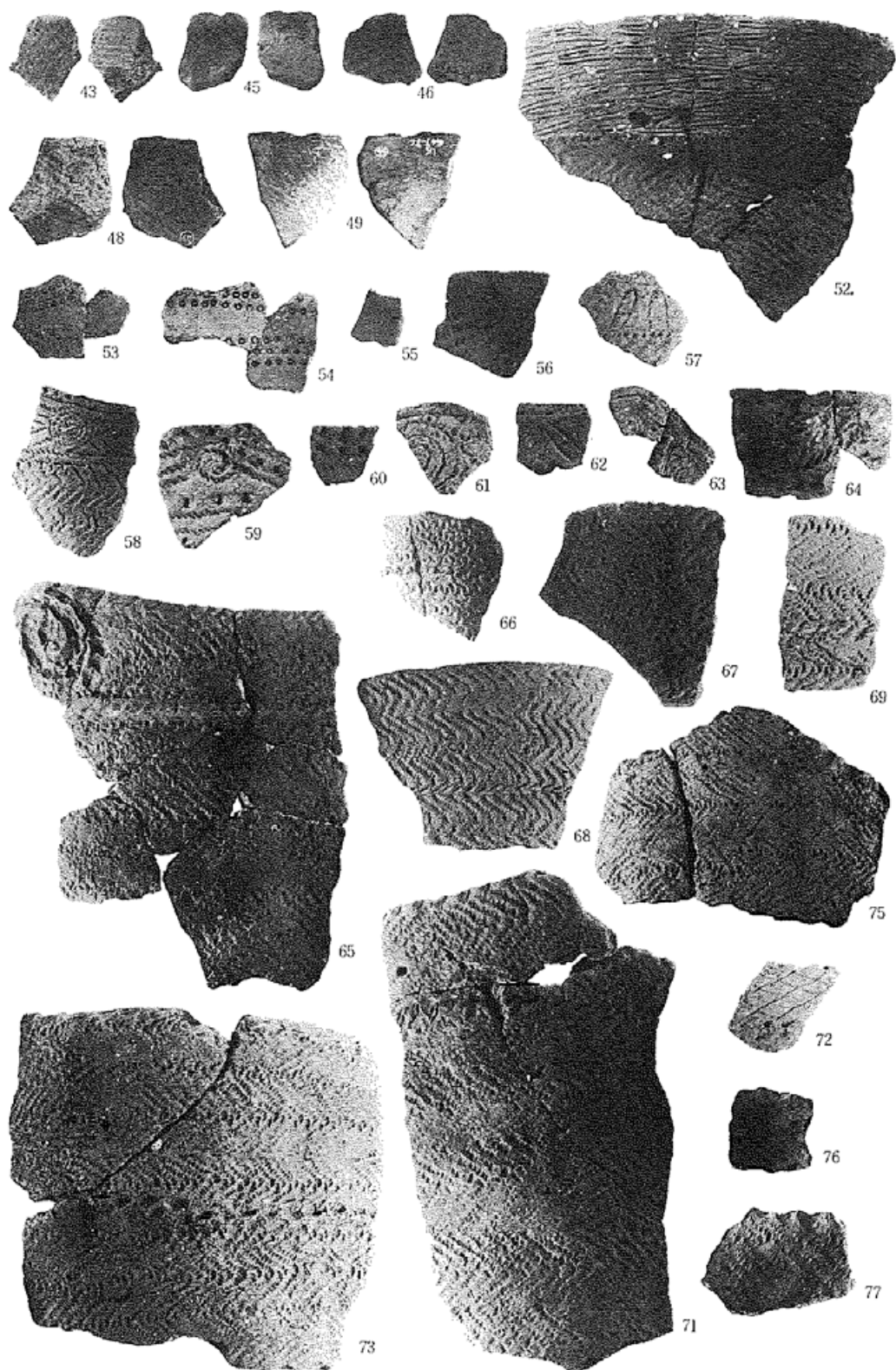


弥生土器1

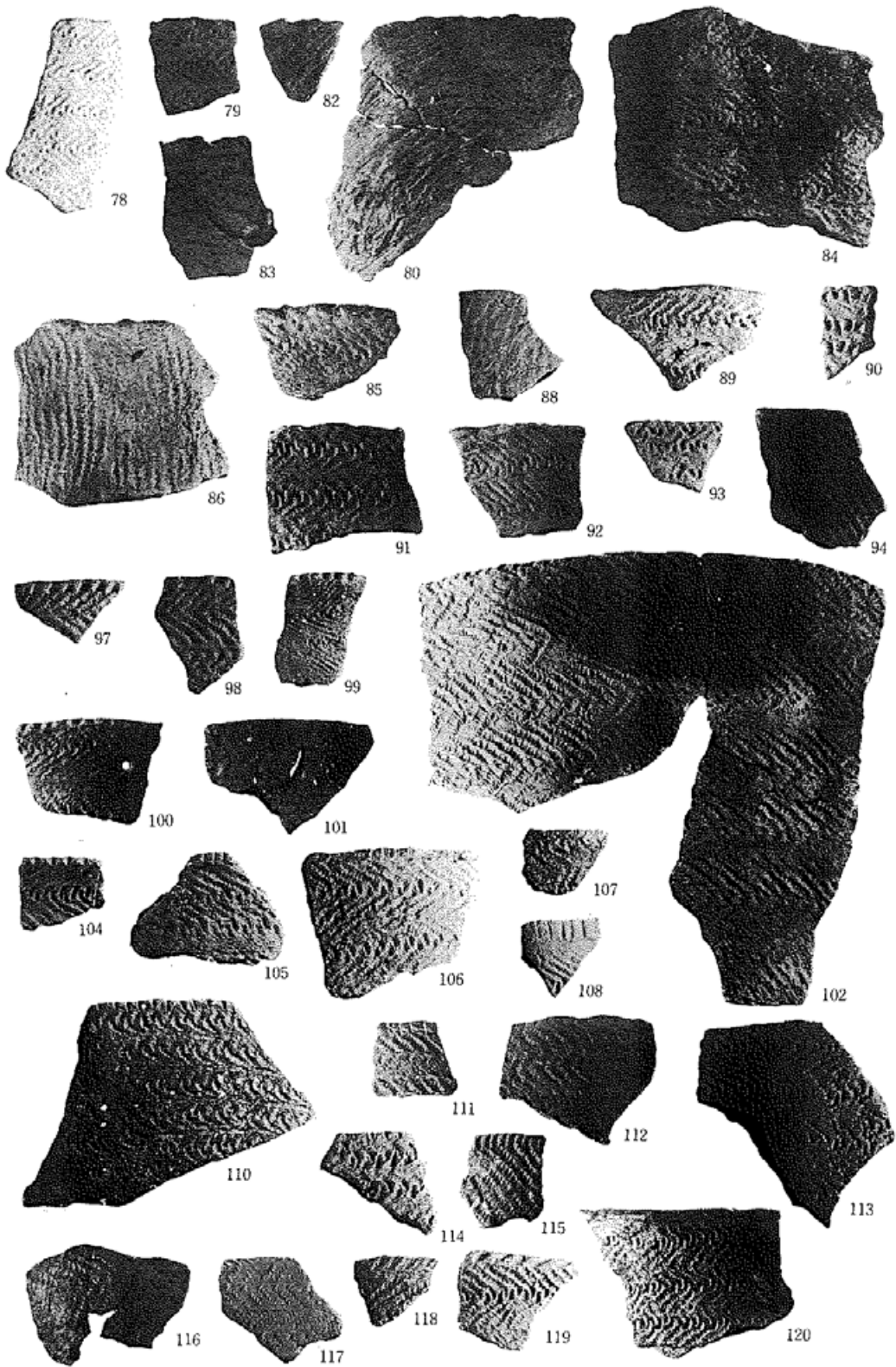
図版5 縄文土器・弥生土器



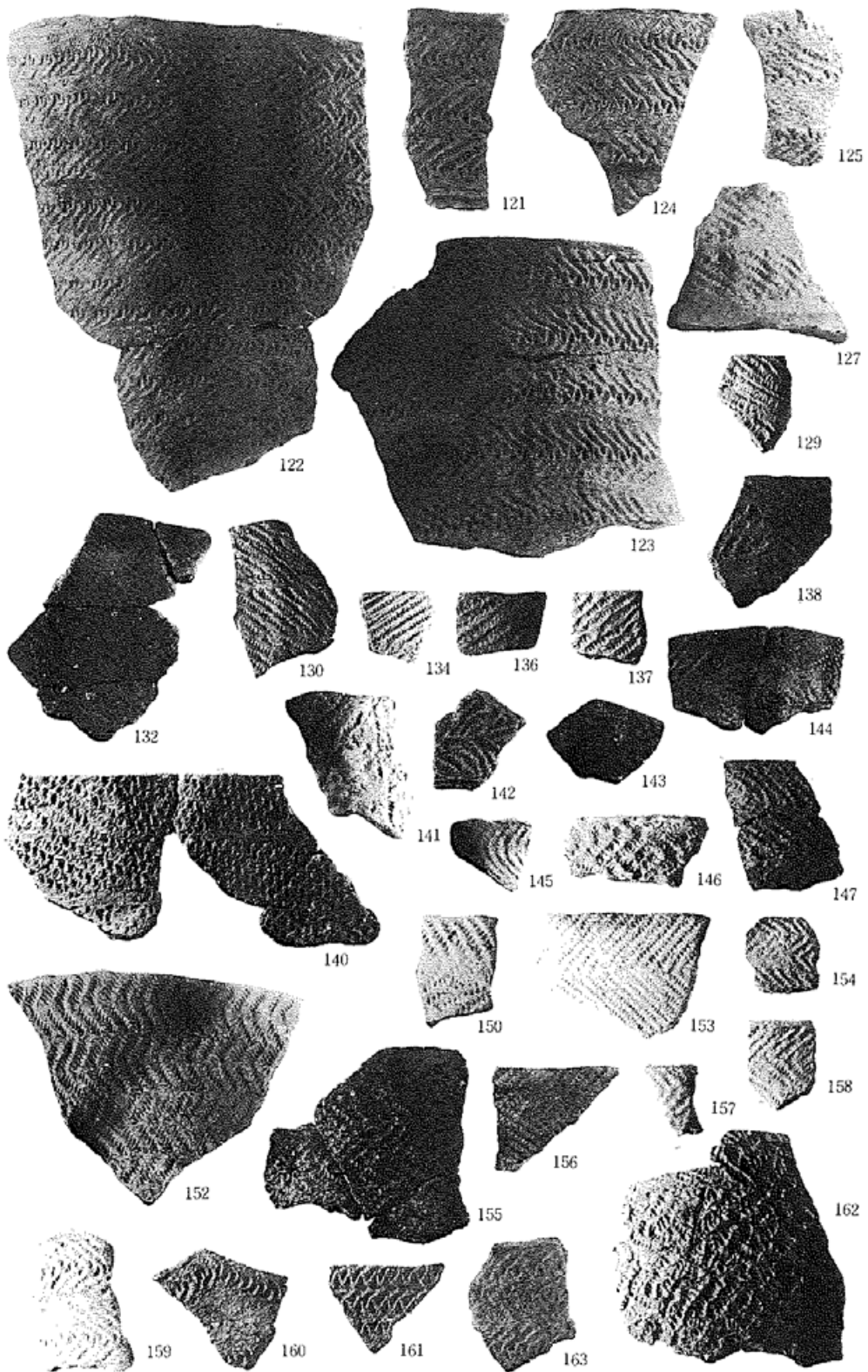
図版6 縄文土器



図版7 縄文土器



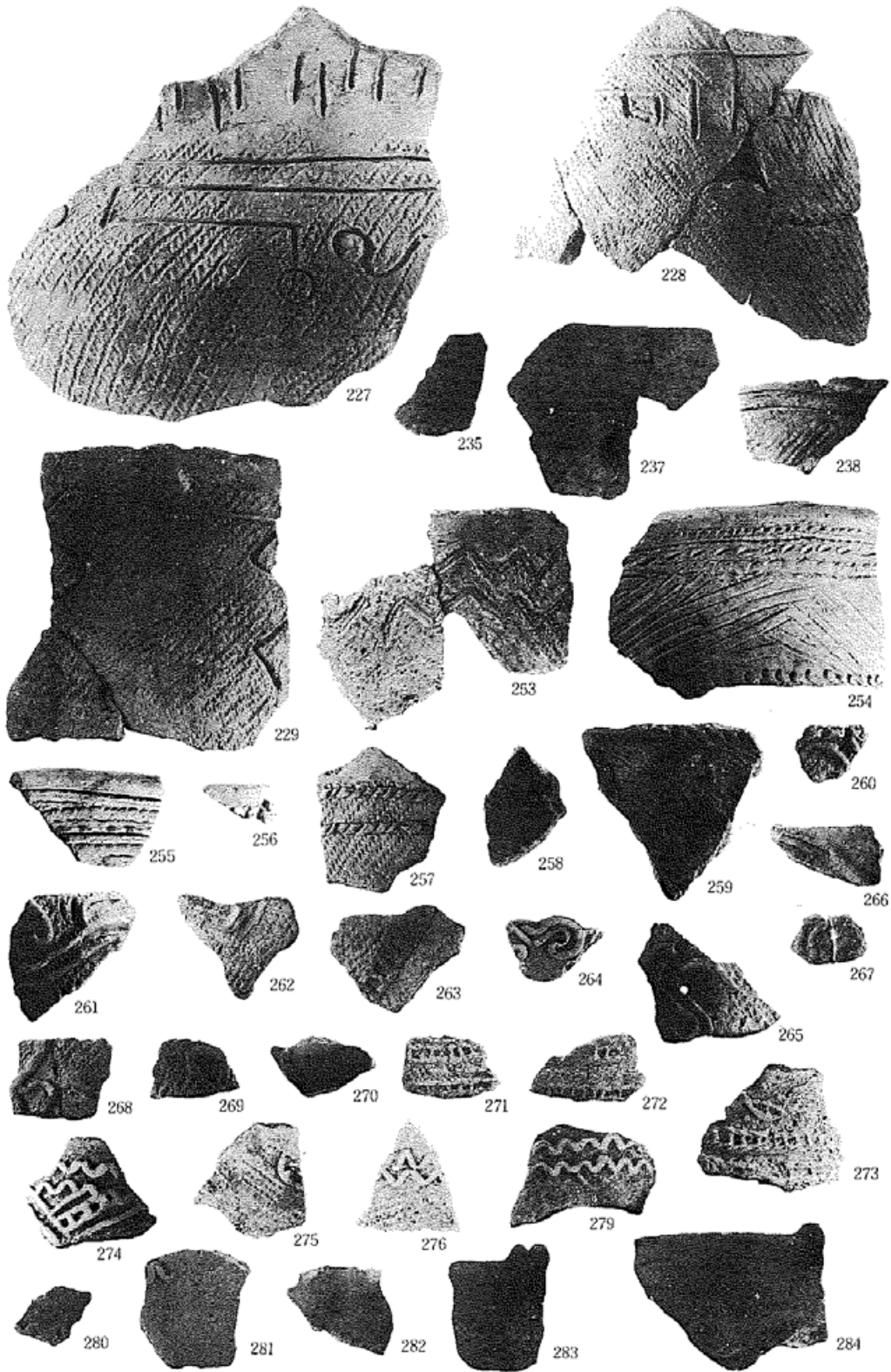
図版8 縄文土器



図版9 縄文土器



図版10 縄文土器



圖版 11 繩文土器



1~4 : 第40図1~4
 5~14 : 第28図1~10
 15 : 第28図12

図版12 土師器

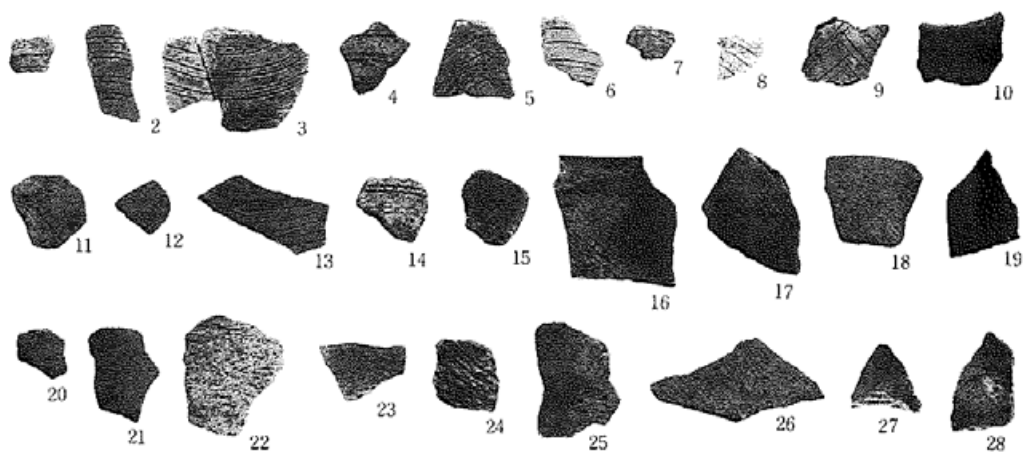


縄文土器底部資料

1～6：第24図1～6

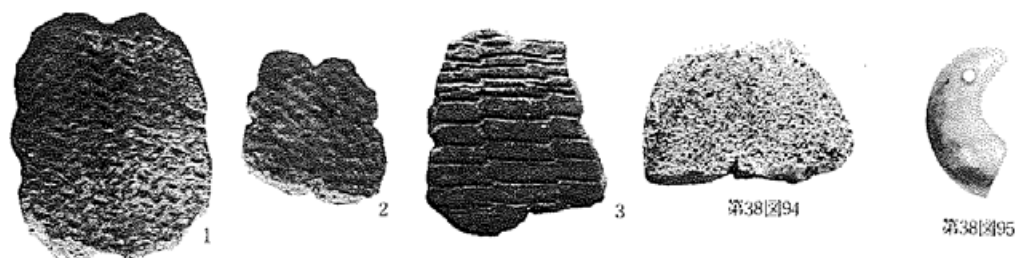
7：第24図8

8～11：第25図12～15



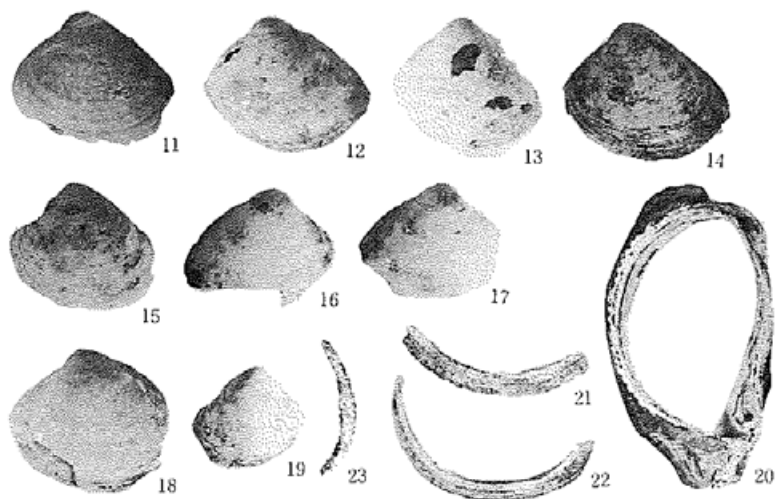
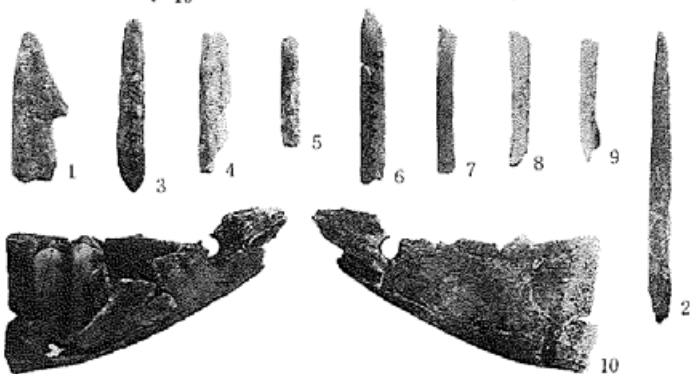
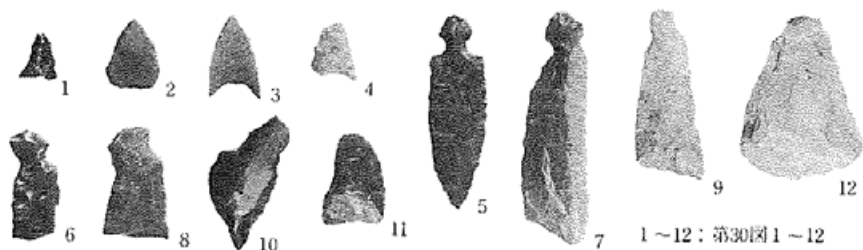
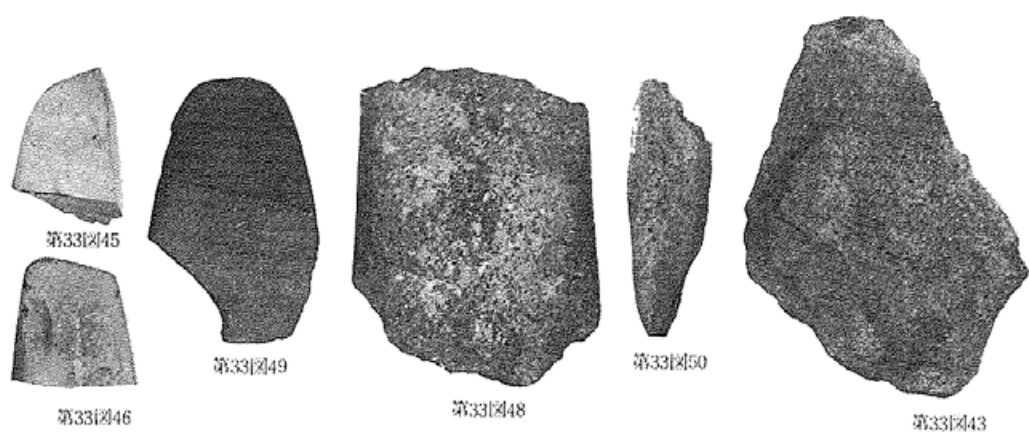
弥生土器 1～6：第26図2～7

7～28：第27図8～29



土錘 1～3：第29図1～3

図版13 縄文土器、弥生土器、土錘、石製品



1~22: 第39图 1~22

图版14 石器、骨·角·貝製品